

# 下分遠崎遺跡

(高知県香美郡香我美町)

1994. 3

(財) 高知県文化財団  
埋蔵文化財センター



# 下分遠崎遺跡

(高知県香美郡香我美町)

1994. 3

(財) 高知県文化財団  
埋蔵文化財センター



## 巻頭カラー



SD 3 遺物出土状況



ツキノワグマ下顎骨出土状況



## 序

下分遠崎遺跡は、本県における弥生文化の成立・展開を明らかにする上において、極めて重要な位置付けがなされております。当遺跡は、本県では類例の僅少な木器、杵、ドングリなどをはじめとする多くの自然遺物、更にシカ・イノシシなどの獣骨、カツオの骨、更に今回はツキノワグマの下顎骨が発見されました。これらの遺物は、当時の人々の生活の様子を大変具体的に示すものです。土器や石器で語られてきた本県の弥生時代の歴史像を、より豊かに描くことが可能となりました。そのことを報告すると同時に、皆様と共に喜びたいと思います。

これらの遺物の一つ一つは、今から2000年以上も前、高知平野を拓いた先人たちの生きざまを伝える貴重な資料でございます。斯学の向上に資することは勿論ですが、歴史を背負い未来を開拓しなければならない私たちの共有財産として、現代的意味を追求して行かなければならないものであると思います。

下分遠崎遺跡は、その大部分が水田の下に眠り続けています。今後遺跡の保護と活用のあり方を考えて行かなければなりません。

最後に、調査にあたりまして労を尽くして頂きました南国土木事務所の隅田純一班長、田村隆章技監はじめ、発掘作業に従事して下さった地元作業員の皆様、整理作業に携わって頂いた方々に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 高知県文化財団  
埋蔵文化財センター所長 原 雅彦



## 例 言

1. 本書は、県道稗地中村線緊急地方道路整備（緊道整(A) 第2-8-4号）事業に伴う下分遠崎遺跡発掘調査報告書である。
2. 所在地 高知県香美郡香我美町下分
3. 調査対象面積 850㎡，調査面積 350㎡
4. 調査期間，立会調査 平成5年8月12日，試掘調査 同9月1日～3日，本調査 同9月24日～10月31日である。
5. 調査体制  
立会調査 坂本 徳昭（高知県文化財団 埋蔵文化財センター）  
試掘調査 出原 恵三（同 上）  
本調査 同 上
6. 本書の執筆・編集は出原が行った。
7. 出土遺物は、高知県埋蔵文化財センターで保管している。  
発掘作業及び整理作業で下記の方々の協力を得た記して謝意を表す。  
発掘作業：安達泰秀・石川功・石川康弘・石川弘己・馬地節子・小松和則・加納末雄・  
貞岡重道・佐野宣重・土方睦・谷紀子・吉川徳子  
整理作業：高橋千代・岩本須美子・矢野雅・山本裕美子・浜田雅代・川村重矢・吉本睦子  
・大原喜子・橋田美紀・田村美鈴・松本富子・楠瀬憲子
8. 遺物の鑑定、保存処理については下記の諸先生の手を煩わせた。記して深甚の意を表したい。  
木器保存処理 西山要一先生（奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室）  
樹種鑑定及び細胞写真 山口誠治先生（大阪文化財センター 長田分室）  
獣骨鑑定 松井 章先生（国立奈良文化財研究所）  
山口誠治先生には玉稿を頂いた。
9. 凡 例  
本文中の弥生土器編年で使用した中期Ⅰ期は畿内第2様式に、中期Ⅱ期は同第3様式に併行する。

## 報告書要約

1. 遺跡名 下分遠崎遺跡 遺跡番号 180019 遺跡地図No.19-159
2. 所在地 高知県香美郡香我美町下分
3. 立地 沖積低地 標高約10m
4. 種類 弥生時代前期・中期
5. 調査主体 財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
6. 調査契機 緊急発掘調査
7. 調査期間 立会調査 平成5年8月12日  
試掘調査 平成5年9月1日～9月3日  
本調査 平成5年9月24日～10月31日
8. 調査面積 350㎡
9. 検出遺構 弥生前期末の上坑2基 同ピット2個  
弥生中期の性格不明土坑1基  
弥生中期の溝 2条  
弥生後期の溝 1条  
出土遺物 弥生前期・中期の上器多量、中期の木製品(鋤先、矢板状木製品他)、獣骨(ツキノワグマ)
10. 内容要約

下分遠崎遺跡は、昭和58年に発見され以後2回の調査が実施されてきた。その結果、弥生前期末に成立し中期前半で終わる比較的短命な集落遺跡であることが明らかとなった。従来  
の調査では掘立柱建物、貯蔵穴、溝などを検出している。低湿地にあることから本県では類  
例の僅少な弥生時代の農・工具などの木製品、獣骨、魚骨、各種種子などの自然遺物が多量  
に出土し、当時の生業を明らかにする上で貴重な資料を提供している。

今次調査は、前2回の調査に比べると検出遺構は少なかったが、前・中期の遺物は豊富に  
得ることができた。上器は、中期Ⅰ期(畿内第1様式併行)の一括性の高い資料をSD2か  
ら得た。当該期の一括資料は、類例が少なく器種組成等不明な点が多かったが、今次調査の  
成果はそれを補うものである。SD2からは上器の他に、着柄鋤先や矢板状木製品、ツキノ  
ワグマ下顎骨が出土した。弥生時代におけるツキノワグマの出土例は極めて少ないが、確実  
な遺構に伴う例は全国的に見ても本例が初めてではないかと思う。

## 本文目次

巻頭カラー

序

例言，報告書要約

目次（本文目次／Fig. 目次／写真図版目次）

第Ⅰ章 周辺の歴史・地理的環境	- 1
第Ⅱ章 調査に至る経過及び調査の方法	4
第Ⅲ章 調査の成果	7
1 基本層序	7
2 検出遺構と遺物	11
3 ユニット出土の遺物	23
4 包含層出土の遺物	37
第Ⅳ章 考察	50
付章 1 下分遠崎遺跡出土木製品の樹種について（山口誠治）	57

## Fig. 目 次

Fig. 1 : 周辺の遺跡 …………… 2	Fig. 28 : ユニット 2 出土土器実測図 …… 30
Fig. 2 : 調査区位置図 …………… 5	Fig. 29 : ユニット 2 出土土器実測図 …… 31
Fig. 3 : 調査 1 区全体図 …………… 8	Fig. 30 : ユニット 3 遺物出土状況平面図
Fig. 4 : 調査 2 区全体図 …………… 8	及び垂直分布図 …………… 31
Fig. 5 : 調査 1 区南壁セクション …… 9	Fig. 31 : ユニット 3 出土土器実測図 …… 32
Fig. 6 : 調査 2 区南壁セクション …… 9	Fig. 32 : ユニット 4 遺物出土状況平面図
Fig. 7 : SK 1 及び周辺からの遺物出土	及び垂直分布図 …………… 32
状況実測図 …………… 11	Fig. 33 : ユニット 4 出土土器実測図 …… 33
Fig. 8 : SK 1 及び周辺からの出土土器	Fig. 34 : ユニット 5 遺物出土状況 …… 35
実測図 …………… 12	Fig. 35 : ユニット 5 出土土器実測図 …… 37
Fig. 9 : SK 2 実測図 …………… 11	Fig. 36 : 1 区包含層上層出土土器
Fig. 10 : P 1, P 2 実測図 …………… 12	実測図 …………… 38
Fig. 11 : SX 1 及び遺物出土状況実測図 … 13	Fig. 37 : 1 区包含層上層出土石器
Fig. 12 : SX 1 出土土器実測図 …………… 13	実測図 …………… 39
Fig. 13 : SD 1 平面・エレベーション及び	Fig. 38 : 1 区包含層上層出土石器
セクション図 …………… 14	実測図 …………… 40
Fig. 14 : SD 1 出土遺物実測図 …………… 15	Fig. 39 : 1 区包含層下層出土土器
Fig. 15 : SD 2 出土土器実測図 …………… 15	実測図 …………… 41
Fig. 16 : SD 3 遺物出土状況実測図 …… 17	Fig. 40 : 1 区包含層下層出土石器
Fig. 17 : SD 3 上層出土土器実測図 …… 18	実測図 …………… 42
Fig. 18 : SD 3 上層出土土器実測図 …… 19	Fig. 41 : 1 区包含層下層出土石器
Fig. 19 : SD 3 下層出土土器実測図 …… 20	実測図 …………… 43
Fig. 20 : SD 3 下層・床面出土遺物実測図・ 21	Fig. 42 : 2 区包含層上層出土土器
Fig. 21 : SD 3 及び 1 区Ⅶ層出土木製品 … 22	実測図 …………… 45
Fig. 22 : ユニット 1 遺物出土状況平面図	Fig. 43 : 2 区包含層上層出土土器
及び垂直分布図 …………… 24	実測図 …………… 46
Fig. 23 : ユニット 1 出土土器実測図 …… 25	Fig. 44 : 2 区包含層上層出土土器
Fig. 24 : ユニット 1 出土土器実測図 …… 26	実測図 …………… 47
Fig. 25 : ユニット 2 上層 (上段)・下層	Fig. 45 : 2 区包含層下層出土土器
(下段) 遺物出土状況実測図 …… 27	実測図 …………… 48
Fig. 26 : ユニット 2 垂直分布図 …… 28	Fig. 46 : 2 区包含層出土石器実測図 …… 49
Fig. 27 : ユニット 2 出土土器実測図 …… 29	Fig. 47 : 出土木器顕微鏡写真 …… 58

## 写真図版目次

- PL. 1 : 1区調査前全景（西から）・同（東から）  
PL. 2 : 2区調査前全景（東から）・同（西から）  
PL. 3 : 1区南壁セクション（SD2付近）・同（I7付近）  
PL. 4 : 1区南壁セクション（5～6付近）・2区南壁セクション  
PL. 5 : 1区完掘状況（西から）・同（東から）  
PL. 6 : SK1検出状況・SK1完掘状況  
PL. 7 : SD1（北から）・SD2（東北側から）  
PL. 8 : ユニット1検出状況（北から）・ユニット1壺（97）出土状況  
PL. 9 : SX1遺物出土状況（北から）・壺（118・ユニット2）出土状況  
PL. 10 : ユニット2遺物出土状況・ユニット3遺物出土状況  
PL. 11 : SD2下層遺物出土状況（北から）・ユニット3遺物出土状況（壺159）  
PL. 12 : 1区南壁セクション及び遺物出土状況（V層中の壺198）  
PL. 13 : 遺物出土状況  
PL. 14 : SD3出土土器・壺（86）  
PL. 15 : SD3（53・74）、ユニット1（108）、ユニット2（140・144・145）  
PL. 16 : ユニット2（147・148）、ユニット3（174）、ユニット5（178）、1区V層（200）、1区Ⅱ層（217）出土土器  
PL. 17 : SD2（26）、SD3（52）、ユニット1（97）、ユニット2（120・137・142・146）、2区V層出土土器  
PL. 18 : SD2（24）、SD3（71・75・78）、ユニット1（112）、ユニット2（118・124・141）、ユニット3（159・160）、ユニット5（179）、1区V層（230）出土土器  
PL. 19 : SD3（47～49・67・68）、ユニット1（109）、ユニット2（115・116・121）、ユニット3（170）、SX1（12）、1区V層（197・202）出土土器  
1区Ⅱ層（218・222・225）、2区V層（239・242・245・247・249・250・253・258）、2区最下層（280・281）出土土器  
PL. 20 : SD1（17）、SD3（41・70）、ユニット1（99）、ユニット2（123・128・132・134・138・139）、ユニット3（161、162、164、173）出土土器  
石包丁（21・206）、刃器（211・234）、ノミ状片刃石斧（212）  
PL. 21 : SD3出土の着柄鋤先  
PL. 22 : SD3出土のツキノワグマ下顎骨



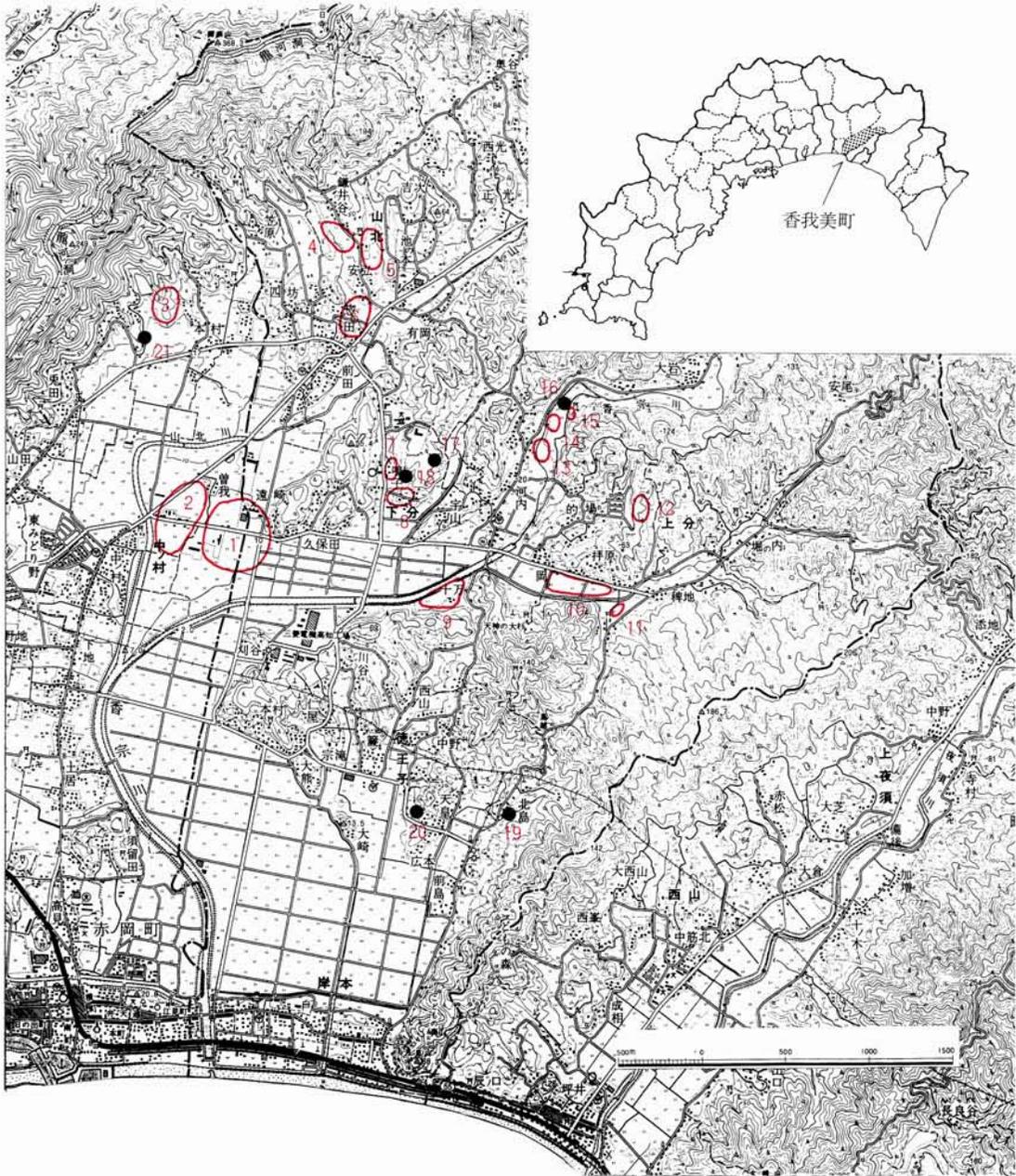
## 第Ⅰ章 周辺の歴史・地理的環境

土佐の国、高知県は、北側を峻険な四国山地に囲まれ南は太平洋に面し、東西に長い弧状の海岸線を有している。その中央部に位置する高知平野は、南四国で最大規模を誇る平野であり、かつては米の二期作地帯として有名であったが、現在は施設園芸作物のビニールハウスへと変貌している。高知平野とその周辺部は、縄文時代から近世に至る多くの遺跡が立地しており、わけでも物部川下流域に展開する田村遺跡群は、弥生時代前期初頭から後期まで継続して営まれた県下最大の拠点集落である。高知平野における弥生時代社会の展開は、田村遺跡群を核として展開したものと考えられる。

下分遠崎遺跡は、高知平野の東端部に位置する香美郡香我美町下分にある。遺跡は、山北川と香宗川の間を南西に伸びる俗称遠崎山の南端裾部に形成された沖積地に立地している。海岸線からは北に3 km、田村遺跡群からは物部川を隔てて東方約6 kmの地点にあり、標高は10 m前後を測る。下分遠崎遺跡は、後述するように1986年と1988年との2回にわたって発掘調査が実施されている。その結果、弥生時代前期末から中期前半にかけて営まれた集落遺跡であることが明らかとなり、高知平野における弥生文化の波及・展開を知る上で重要な位置付けがなされている。また遺跡が低湿地にあることから、田村遺跡では得ることができなかった数多くの木製品や獣骨、炭化米、粃、各種の自然遺物を検出することができた。1988年の調査では四国では最古カツオの腹椎骨を検出するなど注目を集めている。

当地域の歴史は、現在のところ縄文時代後期まで遡ることができる。東方の拝原遺跡<sup>(10)</sup>では、遺構を明らかにすることはできなかったが、後期前半の宿毛式土器、成立期の縁帯文土器である松ノ木式土器、後期中葉の片柏式土器が出土している。これまで宿毛式土器は、県西部に分布する局地的な土器とされていたが、広く東部にも分布することが明らかとなったのである。続く晩期は、十方遺跡<sup>(9)</sup>から貯蔵穴が検出され刻目突帯文期の深鉢・鉢が出土している<sup>(4)</sup>。以後、弥生時代前期前葉～中葉の時期は全く空白であるが、前期末葉に至ると下分遠崎遺跡をはじめ、先に挙げた拝原遺跡や十方遺跡からも遺物・遺構が確認されている<sup>(5)</sup>。高知平野の周辺地域においては、当該期が弥生時代の最初の画期となることを示している。これらの三遺跡に共通することは、中期前葉までしか続かない比較的短命な遺跡と言うことである。凹線文の出現期には、低地から集落址が消え、丘陵斜面や丘陵上に立地するようになる。東方的場遺跡<sup>(12)</sup>や北方の本村遺跡<sup>(3)</sup>、「神の壺」で有名な龍河洞洞窟遺跡も当該期に成立する。凹線文土器成立期、当地域においても集落を再編成する政治的な要因が横たわっているように思われる。

後期になると集落は再び平野部に営まれるようになる。後期初めは空白であるが、中葉には拝原遺跡で2棟、十方遺跡で1棟の竪穴住居址が確認されている。後期後半から古墳時代初頭



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	下分遠崎遺跡	弥生	8	鳴呼遺跡	古墳～平安	15	幅山遺跡	弥生～古墳
2	曾我遺跡	弥生～中世	9	十万遺跡	弥生～中世	16	野神社古墳	古墳
3	本村遺跡	弥生	10	拝原遺跡	弥生～中世	17	棒ヶ谷古墳	古墳
4	宮の西遺跡	弥生～古墳	11	稗地遺跡	弥生～古墳	18	鳴呼古墳	古墳
5	宮の前遺跡	弥生～古墳	12	的場遺跡	弥生	19	徳王子古窯址群	古墳～奈良
6	風の芝遺跡	古墳～中世	13	下幅遺跡	弥生～古墳	20	徳善天皇古墳	古墳
7	棒ヶ谷遺跡	弥生	14	中幅遺跡	弥生～古墳	21	大崎山古墳	古墳

Fig. 1 周辺の遺跡

に至ると集落数は飛躍的に増加する。竪穴住居址の検出例を挙げると十萬遺跡で2棟、拝原遺跡で2棟、稗地遺跡<sup>16)</sup>で6棟が検出されている。これらの他周辺部の田畑には、当該期の土器散布地が数多く確認されている。すなわち香宗川流域では、中幅遺跡(14)・幅山遺跡(15)、山北川流域では宮の前遺跡・宮の西遺跡などを挙げることができる。これらの諸遺跡は、中期前半まで営まれた底湿地ではなく、河川の中流域の標高の高い谷平野筋に点々と立地している。これらの集落は、共通の水系に依拠しながら大規模な用・排水路の敷設など協業を通して強固に結びついた世帯共同体を形成していたことが考えられる。そしてこの段階になると広範な可耕地を開拓し、今日とそれほど変わらない水田経営がなされていたものと思う。古墳時代初頭に属する竪穴住居址からは、多量の在地土器に混ざって必ずと言ってよいほど河内や阿波からの搬入土器が見られる。しかしながら急増した集落は長期にわたって営まれることなく、土器1～2型式のうちにごとごとく消滅してしまう。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての集落の急増と急落、これは土佐における古墳時代成立期前後に見られる一般的傾向であるが、当地域において典型的に現われていると言えよう。

周辺に前期古墳は存在せず、わずかに須恵器出現直前頃の古式土師器(古式土師器Ⅲ期)<sup>13)</sup>を有する竪穴住居が2棟確認されているのみである。再び当地域が活況を呈するようになるのは6世紀末頃を待たなければならない。拝原遺跡では、カマドを持った竪穴住居が3棟存在し、同時期に掘られたと考えられる幅2.6～3m、深さ0.6～0.7m、延長120mを測る大溝が検出されている。山南川から水を引くための用水路と考えられる。7世紀になると嗚呼古墳(18)や幅山古墳など小円墳が造営されるようになり、須恵器窯(徳王子一号窯)(19)も登場する。当地域の生産力の拡大に照応した有力家父長層の政治的成長の過程を示すものである。そして、これらを前提として、8世紀に至ると十萬遺跡では、突然として方形掘り方を有する掘立柱建物群が出現する。律令体制下、当地は『和名類聚鈔』に記載のある大忍郷に属するが、同郷内において当地域は、その中心的位置を占めていたことが考えられるのである。

## 註

- (1) 高橋啓明・出原恵三 1987年 「下分遠崎遺跡発掘調査概報」香我美町教育委員会
- (2) 高橋啓明・出原恵三 1989年 「下分遠崎遺跡(Ⅰ)」香我美町教育委員会  
出原恵三 1993年 「下分遠崎遺跡(Ⅱ)」香我美町教育委員会
- (3) 出原恵三 1993年 「拝原遺跡」香我美町教育委員会
- (4) 出原恵三 1993年 「南四国中央部における縄文後期土器」『遺跡』第34号 遺跡発行会
- (5) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生 1988年 「十萬遺跡発掘調査報告書」香我美町教育委員会
- (6) 松田知彦 1993年 「稗地遺跡発掘調査報告書」高知県埋蔵文化財センター
- (7) 出原恵三 1993年 「弥生から古墳へ——前期古墳空白地域の動向」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会

## 第Ⅱ章 調査に至る経過及び調査の方法

### 1. 調査に至る経過

下分遠崎遺跡は、1983年5月、町道前山―遠崎線拡幅工事に伴う側溝掘削時に、土器が出土したことが契機で明らかとなったものである。おりしも周辺部においては、県営圃場整備事業が実施される時でもあり、香我美町教育委員会は1986年に同町道をはさんで東西の試掘調査を実施し、遺跡の内容・範囲等の把握に努めた。この調査で弥生前期末―中期前半の集落址であることが明らかとなり、低湿地であったことから、これまで県下では出土例を見なかった多量の本製品や獣骨をはじめとする自然遺物が大量に出土し、「土佐の登呂遺跡」として俄に注目を集めるようになった。続いて実施された1989年の緊急発掘調査においても同様の成果を納めることができ、下分遠崎遺跡は、高知平野周辺部への弥生文化の波及を明らかにするうえで極めて重要な位置を占めるようになった。

今次調査は、前2次にわたる調査区の北側、香我美中学校の前を東西に走る県道稗地中村線の拡幅工事（緊道整（A）第2-8-4号）に伴う緊急発掘調査である。同工事は、現在の路幅を南へ約4m掘げるものであり、計画通り工事が実施されれば、工区内で約900㎡の部分において遺跡が破壊されることが予想されるに至った。文化財保護部局である香我美町教育委員会及び高知県教育委員会は、開発部局である南国土木事務所と協議を行い、工事に先立って記録保存のための緊急発掘調査を行うこととした。先ず本調査の計画立案のための資料を得るために1993年8月12日に、南国土木事務所職員との立合いのもと6箇所任意のトレンチを設定し、地層の堆積状況・遺物の有無等を確認し、調査対象地の確定を行った。その結果、町道前山―遠崎線より東方60mの地点以東は調査対象外とし、香我美中学校南面及び町道前山―遠崎線より東方60mまでの範囲、約850㎡を調査の対象とした。次いで9月1日～3日に、調査対象地内の遺物包含層・遺構検出面の深度等を把握する為に試掘調査を実施し、9月24日～10月31日に本調査を行った。

### 2. 調査の方法

調査の便宜上、町道前山―遠崎線をはさんで西側を1区、東側を2区とした。1区は延長約110m、幅5m、2区は延長60m、幅5m、計850㎡である。しかしながら実際の調査においては、民有地・現道路肩の保全等から、対象地全面にわたっての調査は不可能であり、1～2m程度調査幅を減少せざるを得なかった。調査は、表土より遺物包含層までの50～70cmは重機を使って掘削し、それより下については人力で掘り下げた。遺物の取り上げ及び遺構の測量等については、調査区西端から1・2・3・・・と3m毎に基準を設け、位置を定めた。実測は、必要に応じて10分の1、20分の1、40分の1の縮尺で行った。

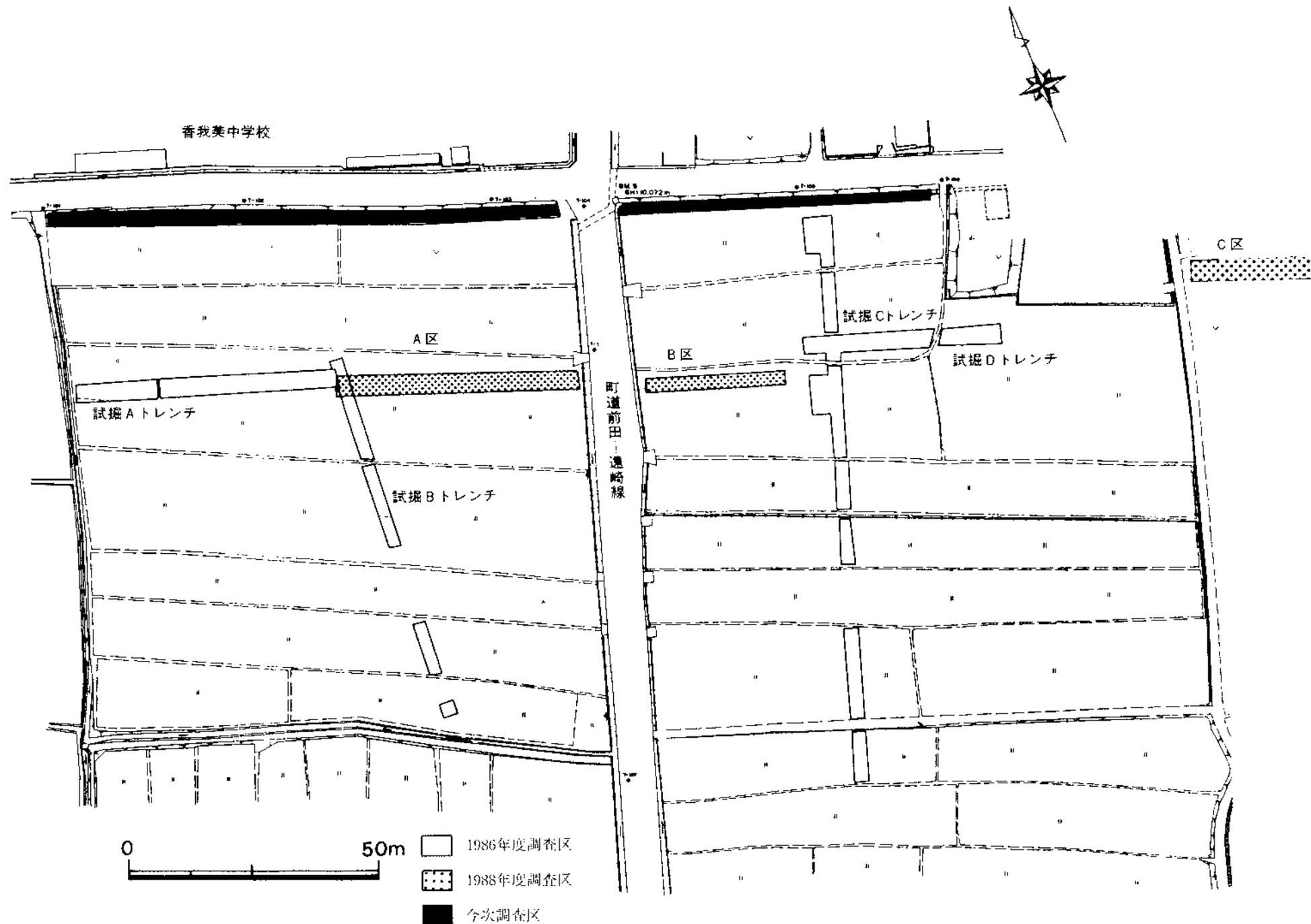


Fig. 2 調査区位置図



## 第三章 調査の成果

### 1 基本層序 (Fig. 5・6)

基本層序は、1・2区共に南壁を測った。縦を80分の1、横方向を160分の1で図化した。

#### (1) 1区 (Fig. 5)

- XIV層：青灰色砂礫層である。砂及び径1cm前後から拳大の砂岩、チャートの礫からなる。調査区中央部付近でしか確認できなかったが、かなりの起伏をもって基底層を形成している層準と考えられる。無遺物層である。
- XIII層：茶色砂礫層である。本層序はXIV層が単に酸化しているだけで、XIV層と同様の性格を有するものと考えられる。無遺物層である。
- XII層：灰黒色粘土勝風化砂岩礫層である。XIV・XIII層とⅧ層の間にブロック状に存在する。無遺物層である。
- XI層：暗灰色砂礫層である。Ⅷ層の中にブロック状に存在している。最大層厚40cmを測るが洪水等で堆積したものであろう。無遺物層である。
- X層：黒色粘土層である。XI層の上に載っている。無遺物層である。
- IX層：灰色粘土層である。調査区西部でのみ確認される。無遺物層である。
- Ⅷ層：暗灰褐色粘土層である。最大層厚60cm前後を測り、調査区全体に堆積が見られ安定した層準である。弥生前期末の上器を少量含む。後述のユニット1・2・4及びSK1は当層準を基盤としている。
- Ⅵ層：暗灰色粘質土層である。Ⅷ層と整合を保ち調査区のほぼ全面に堆積する安定した層準である。最大層厚28cmを測る。弥生前期末葉の遺物を大量に含む。
- Ⅴ層：灰褐色粘土層である。調査区西端部にブロック状に堆積している。
- Vb層：砂礫勝暗灰色粘土層である。調査区のほぼ全面に見られ安定した層準である。最大層厚40cm前後を測り、弥生中期前半・前期末の遺物を大量に含む。Vb層はVa層に整合で覆われる。
- Va層：砂礫勝暗褐色粘質土層である。Vb層が調査区西半に主として堆積しているのに対してVa層は東半に堆積する。最大層厚40cm前後を測る。弥生中期の遺物を多く含む。
- Ⅳ'層：淡黄灰色粘質土層である。Ⅳ層の下層に部分的に認められる。
- Ⅳ層：淡黄灰色粘土層である。調査区のほぼ全体に見られ安定した層準である。最大層厚20cm前後を測る。ほとんど遺物を含まないが、須恵器が1点出土している。
- Ⅲ'層：黄茶灰色粘質土層である。主として調査区の東半に堆積しており、最大層厚20cm前後を測る。
- Ⅲ層：茶灰色粘質土である。層厚8～20cmを測る。旧耕作土である。

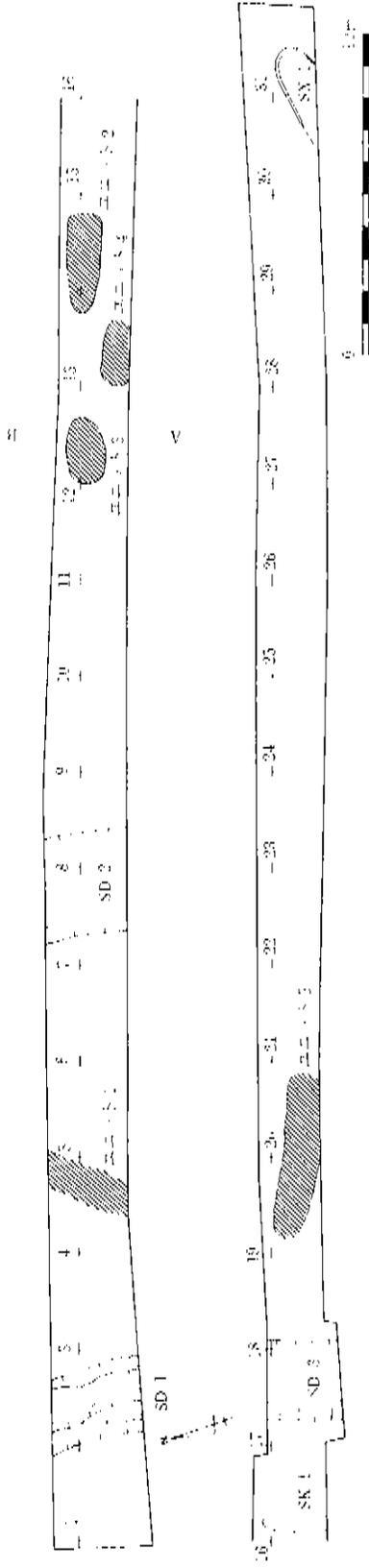


Fig. 3 調査1区全体図

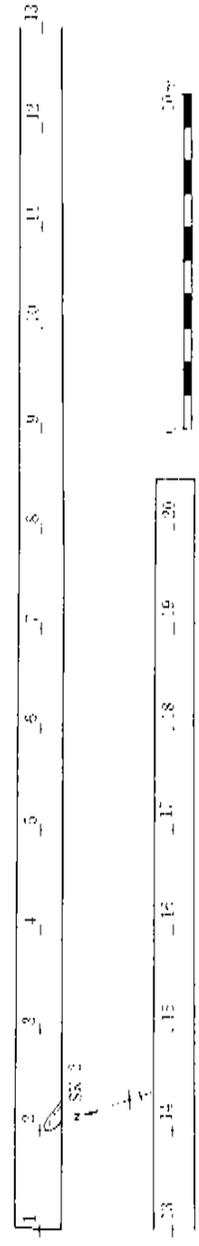


Fig. 4 調査2区全体図

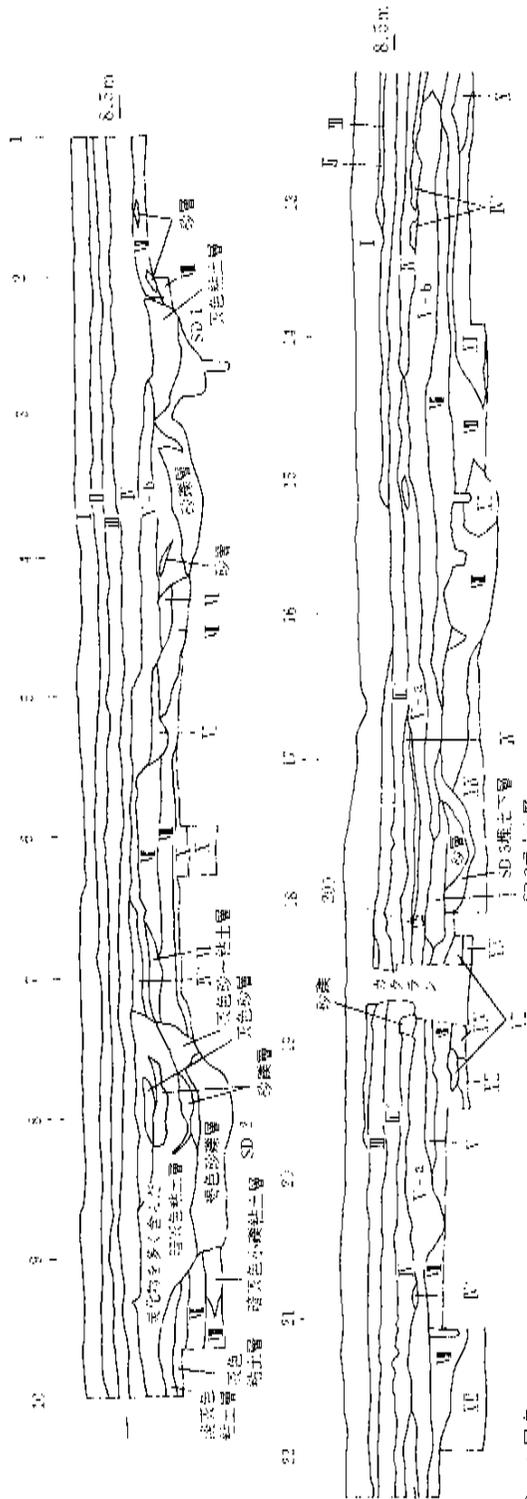


Fig. 5 調査1区南壁セクション

1区南壁セクション層名

- I層：粘土
- II層：粘土
- III層：茶褐色粘質土
- IV層：黄褐色粘質土
- V層：黄褐色粘土
- VI層：黄褐色粘土
- VI-1層：黄褐色粘質土
- VI-2層：黄褐色粘質土
- VI-3層：黄褐色粘質土
- VI-4層：黄褐色粘質土
- VI-5層：黄褐色粘質土
- VI-6層：黄褐色粘質土
- VI-7層：黄褐色粘質土
- VI-8層：黄褐色粘質土
- VI-9層：黄褐色粘質土
- VI-10層：黄褐色粘質土
- VI-11層：黄褐色粘質土
- VI-12層：黄褐色粘質土
- VI-13層：黄褐色粘質土
- VI-14層：黄褐色粘質土
- VI-15層：黄褐色粘質土
- VI-16層：黄褐色粘質土
- VI-17層：黄褐色粘質土
- VI-18層：黄褐色粘質土
- VI-19層：黄褐色粘質土
- VI-20層：黄褐色粘質土
- VI-21層：黄褐色粘質土
- VI-22層：黄褐色粘質土

2区南壁セクション層名

- I層：粘土
- II層：粘土
- III層：茶褐色粘質土
- IV層：黄褐色粘質土
- V層：黄褐色粘質土
- VI層：黄褐色粘質土
- VI-1層：黄褐色粘質土
- VI-2層：黄褐色粘質土
- VI-3層：黄褐色粘質土
- VI-4層：黄褐色粘質土
- VI-5層：黄褐色粘質土
- VI-6層：黄褐色粘質土
- VI-7層：黄褐色粘質土
- VI-8層：黄褐色粘質土
- VI-9層：黄褐色粘質土
- VI-10層：黄褐色粘質土
- VI-11層：黄褐色粘質土
- VI-12層：黄褐色粘質土
- VI-13層：黄褐色粘質土
- VI-14層：黄褐色粘質土
- VI-15層：黄褐色粘質土
- VI-16層：黄褐色粘質土
- VI-17層：黄褐色粘質土
- VI-18層：黄褐色粘質土
- VI-19層：黄褐色粘質土
- VI-20層：黄褐色粘質土
- VI-21層：黄褐色粘質土
- VI-22層：黄褐色粘質土

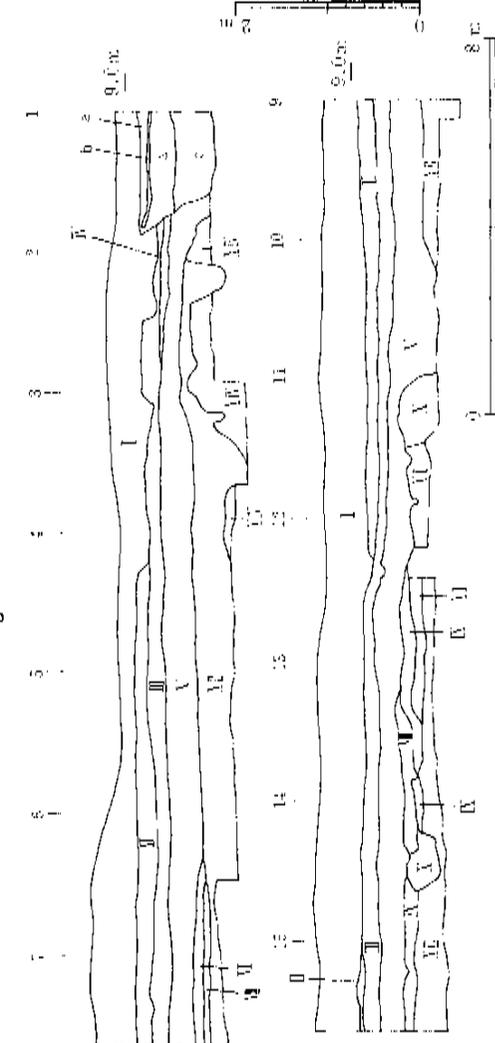


Fig. 6 調査2区南壁セクション

Ⅱ層：黄褐色シルト～粘質土層である。現代水田の床上～旧耕作土である。

Ⅰ層：現代水田耕作土である。

(2) 2区 ( Fig. 6 )

XIV層：茶灰色砂礫層である。調査区西端に高く盛り上がっている。1区のXIV層に対応する層準と考えられる。無遺物層である。

XIII層：黒色腐食土層である。調査区東半分で認められ、東に向かって次第に厚さを増す。無遺物層である。

XII層：暗灰色粘質土層である。調査区西半部分に見られる。1区のⅧ層に対応する層準で、弥生前期末葉の上器を多く含む。最大層厚は60cm以上を測る。

XI層：灰茶色砂質土層である。調査区西半部に部分的に見られる。無遺物層である。

X層：黄青灰色砂礫層である。調査区西半部に部分的に見られる。無遺物層である。

IX層：灰色粘土層である。調査区西半部に部分的に見られる。

Ⅷ層：拗黒色粘土層である。調査区西半部の一部に見られる。

Ⅶ層：灰黒色粘土層である。調査区西半部の一部に見られる。

Ⅵ層：黒褐色砂～粘質土層である。調査区の中央部に見られ、弥生前期末の遺物を含んでいる。

V層：暗灰褐色砂～粘質土層である。調査区全体に見られ安定した層準をなす。層厚60cm以上を測る。1区のV b層に対応し弥生前期末・中期前葉の遺物を多く含んでいる。

IV層：暗灰色粘土層である。調査区西端の一部に見られる。

Ⅲ層：淡灰色粘土層である。層厚4～20cmを測る。旧耕作土である。

Ⅱ層：現代耕作土である。

Ⅰ層：客土である。

以上1区・2区の基本層序について述べた。1・2区共に砂礫層 (XIV層) が、かなりの凹凸をもって基盤層を形成しており、その上に粘土・シルト層が堆積している。これら粘土・シルト層の中にもブロック状に、砂礫や砂の堆積が見られる。これらは度重なる洪水による堆積を示している。前期末の遺物包含層 (1区-Ⅶ・Ⅷ層 2区-XII層) は比較的安定した堆積を示しており、安定した生活面を形成していたことが窺われる。このことは前2回の調査と同様の結果である。

2区はXII層が東へ行くに従って下向を示しており、それと共に遺物量も減少している。そして黒色腐食土層のXIII層が厚く堆積するようになり、旧地形が東に向かって傾斜していることが分かる。このことは先述した立会調査の結果とも一致する。西方に向っては、まだかなり安定した層準が続いていることが予想される。

## 2 検出遺構と遺物

1・2区共に検出遺構は少ない。遺物の多くは遺物包含層及び遺構検出面基盤層の上面に集中して出土したものである。後者については、出土状況から、括性の高いものとして理解し、ユニット番号を付して取り上げた。

### (1) SK 1 (Fig. 3・7・8)

SK 1は、1区のほぼ中央部にある。南北方向に長軸を有し、長さ160cm以上、幅42cm、深さ10cmを測る溝状の細長い土坑である。南端部の輪郭を明確にすることができなかった。Ⅷ層を掘り込んでいる。埋土は黒褐色を呈し腐食物を多く含んだ泥土状の粘土である。遺物は検出面レベルで見られたが、床面上のものはない。またSK 1西壁に近接して、比較的大きな土器片を検出したので、SK 1内のものと同時に出土状況を図示した。内・外共に前期末葉の上器である。1は、SK 1西脇から出土した甕の上胴部で外面に指頭で摘み出した小突起を3条めぐらしている。2は大型の甕で頸部下半及び上胴部にヘラ描沈線を有する。3・4は甕の、6・7は壺の底部である。6・7以外はどれもかなり激しく煤けている。

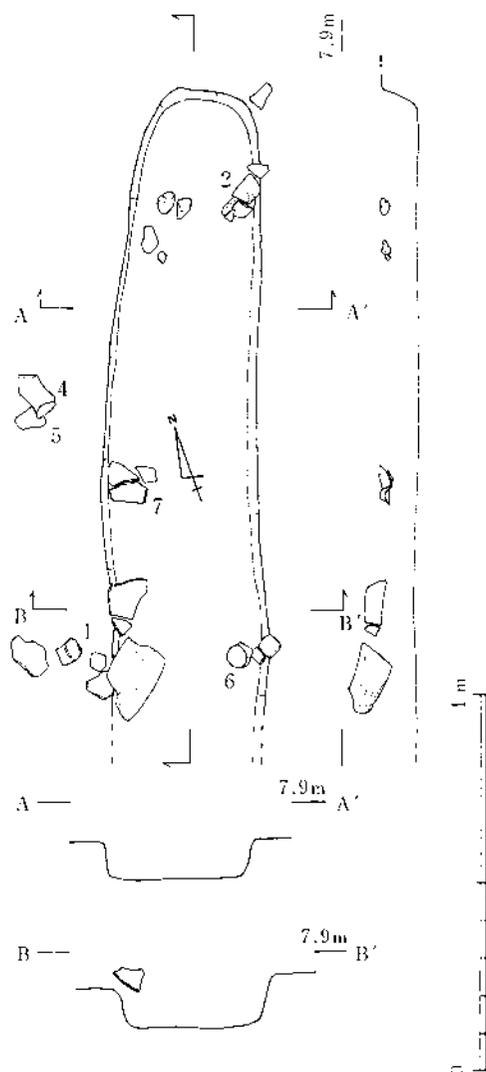


Fig. 7 SK 1 及び周辺からの遺物出土状況実測図

面レベルで見られたが、床面上のものはない。またSK 1西壁に近接して、比較的大きな土器片を検出したので、SK 1内のものと同時に出土状況を図示した。内・外共に前期末葉の上器である。1は、SK 1西脇から出土した甕の上胴部で外面に指頭で摘み出した小突起を3条めぐらしている。2は大型の甕で頸部下半及び上胴部にヘラ描沈線を有する。3・4は甕の、6・7は壺の底部である。6・7以外はどれもかなり激しく煤けている。

### (2) SK 2 (Fig. 4・9)

2区の両壁から3mの地点で検出した。大部分が調査区外に出ている。深さは20cm前後を測る。埋土は暗灰褐色

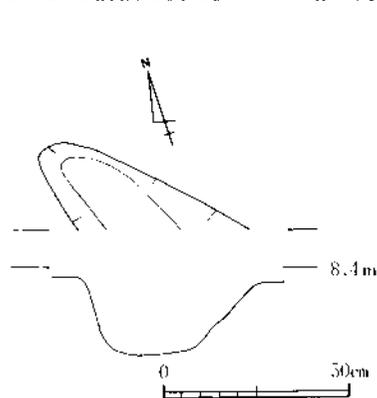


Fig. 9 SK 2 実測図

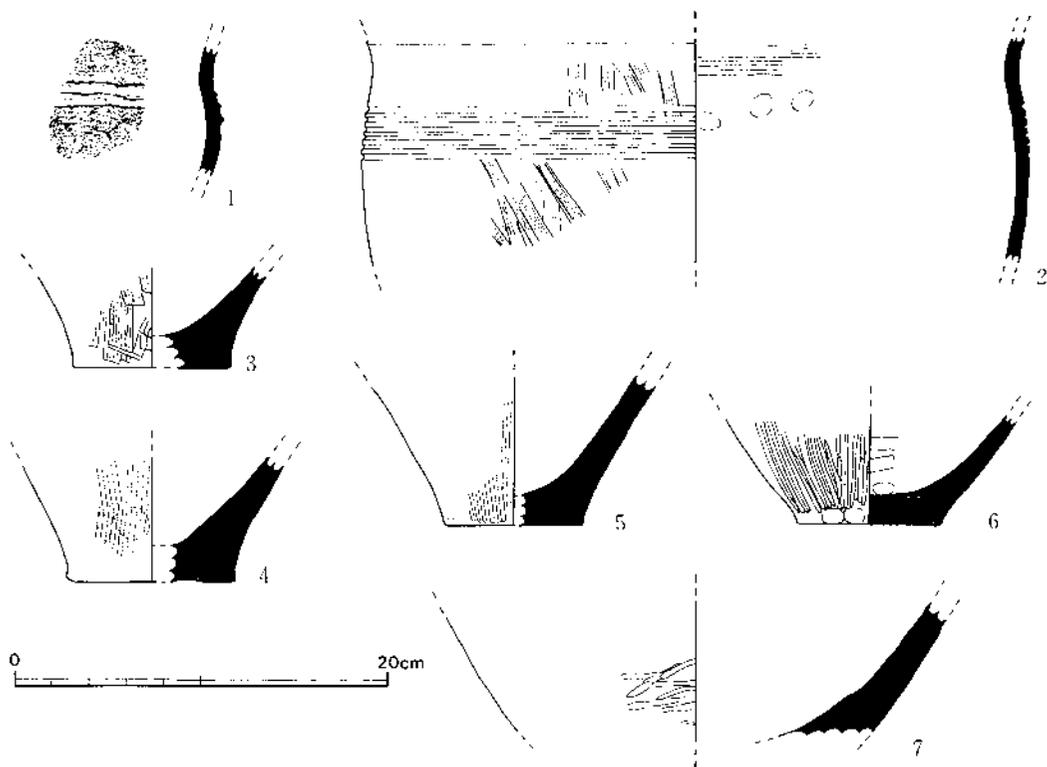


Fig. 8 SK 1 及び周辺からの出土土器実測図

砂～粘質土 (V層) であり、遺物は含まれていないが弥生中期前半の土坑とすることができる。

(3) P 1・P 2 (Fig. 10)

共にJ区のはほぼ中央部で検出した。SK 1と同様V層を掘り込んでいる。P 1は、30cm×27cmの楕円形の掘り形を有し、18cmの柱根痕を検出することができた。深さ20cmを測る。P 2は、30cm×20cmの隅丸方形形状のプランを呈し、断面台形状深さ12cmを測る。埋土は共に黒褐色粘土で、遺物は認められないが、弥生前期末に属する。

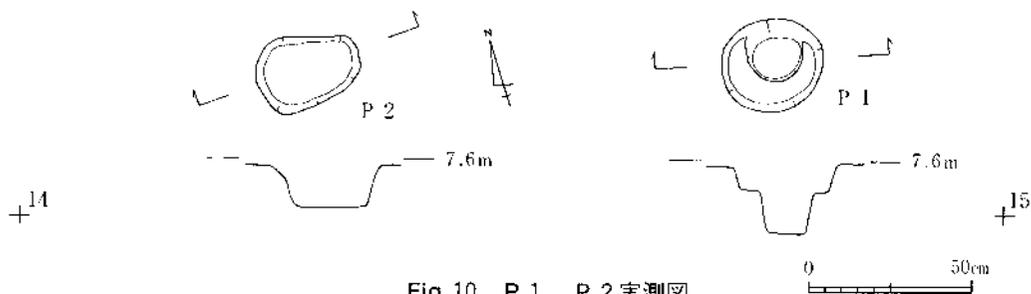


Fig. 10 P 1, P 2 実測図

(4) SX 1 (Fig. 3・11・12)

1区の東端部にある。東西方向に長軸を有す。長さ2.4m以上、幅1.4m前後、深さは5～12cmを測り床面は南に傾斜している。埋土は砂礫を多く含んだ暗灰褐色粘質土である。遺物は、

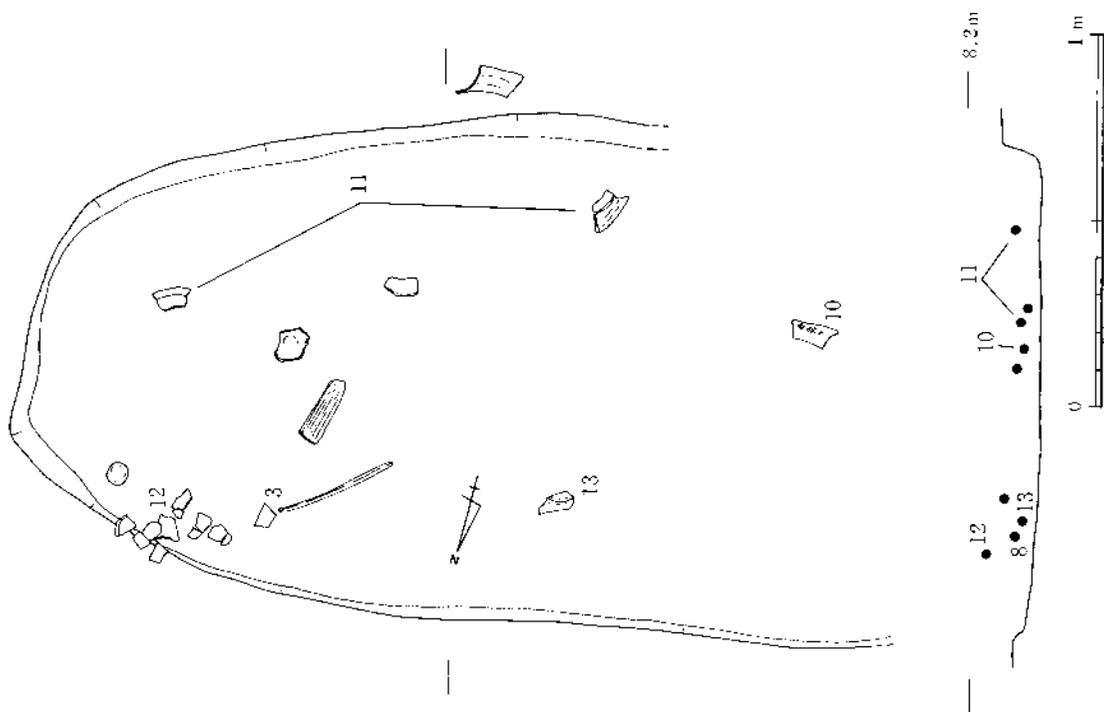


Fig. 11 SX 1 及び遺物出土状況実測図

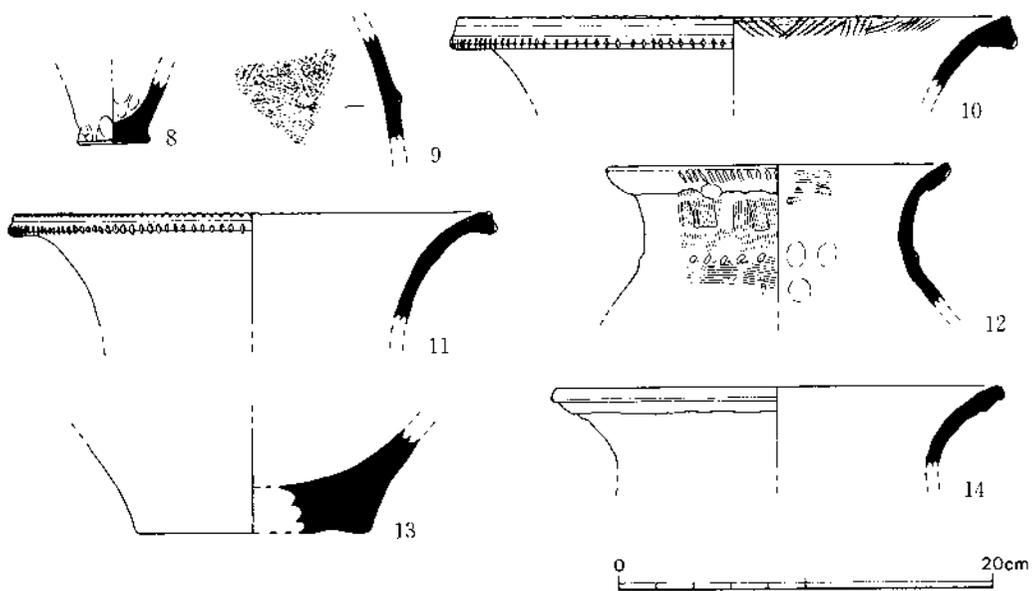


Fig. 12 SX 1 出土土器実測図

埋土中より土器と棒・板状の木製品が出土したが、床土のものはない。8は鉢、13は壺底部。9は胴部片で、断面三角形の小突帯を貼付し櫛溝波状文と双線による山形文を配す。10～12・14は壺の口頸部で、共に口縁外面に粘土帯を貼付し肥厚、口唇に刻目、10・11は口唇を強く横にナデる。10は口縁内面にハケ状原体で圧痕文。12は頸部下端に小浮文を貼り巡らす。14も外面に粘土帯を貼付し口唇部を横ナデするが無文である。中期Ⅱ期前半の遺構である。

(5) SD 1 (Fig. 3・13・14)

1区の西端部にあり、南北方向に走る溝である。肩部を明瞭につかめないとこもあり、正確な幅を出せないが、2 m前後はある。断面は階段状を呈し、中央部が最も深くなっており、最も深いところで1.3 mを測る。前期末の包含層であるⅣ層を切っている。埋土下層は、砂礫層が詰まっており、上層を灰茶色粘土が覆い、その上に一部中期の包含層(V層)が載っている。遺物は、下層からは全く認められず上層より土器・石器が出土している。15は甕口縁部、17は薄手の甕上胴部で3条の小突帯が貼付されている。16・18・19は壺胴部である。16は、櫛溝直線文を配し、その上に棒状浮文を貼付刻目を施す。18も上胴部に櫛溝直線文、19は断面三角形の突帯を貼付し、ヘラ描沈線帯、双線による弧文を配す。石器は叩石(20)と石包丁(21)が出土している。20は硬質砂岩の小礫を利用したもので、縁部に使用痕が見られる。大部分欠損しているが102 gを測る。21は、直線刃片刃の石包丁で背部は湾曲する。2孔を有し敲打によらない両面穿孔である。孔間8 mm、孔径7 mmを測る。また背部から刃部に向かって厚味が増している。石材は千枚岩である。

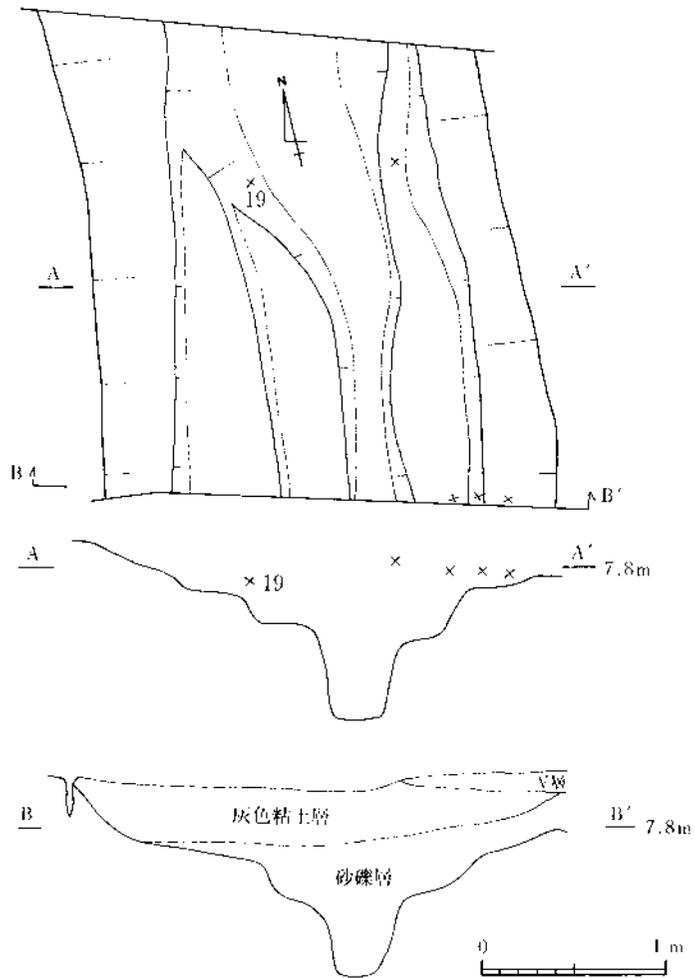


Fig. 13 SD 1平面, エレベーション及びセクション図

Fig. 13 SD 1平面, エレベーション及びセクション図

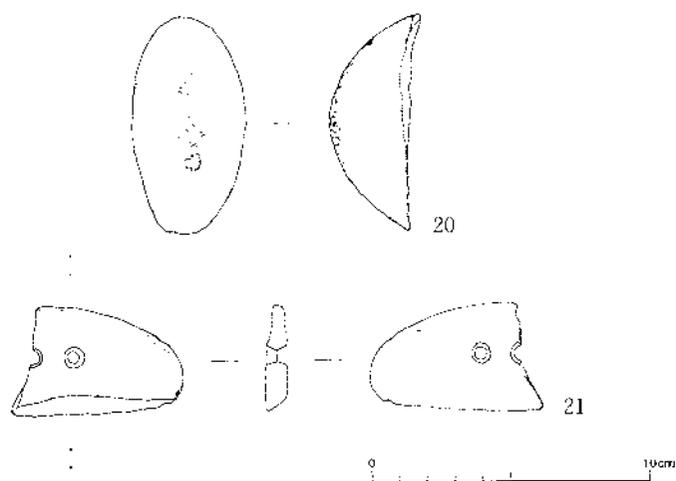
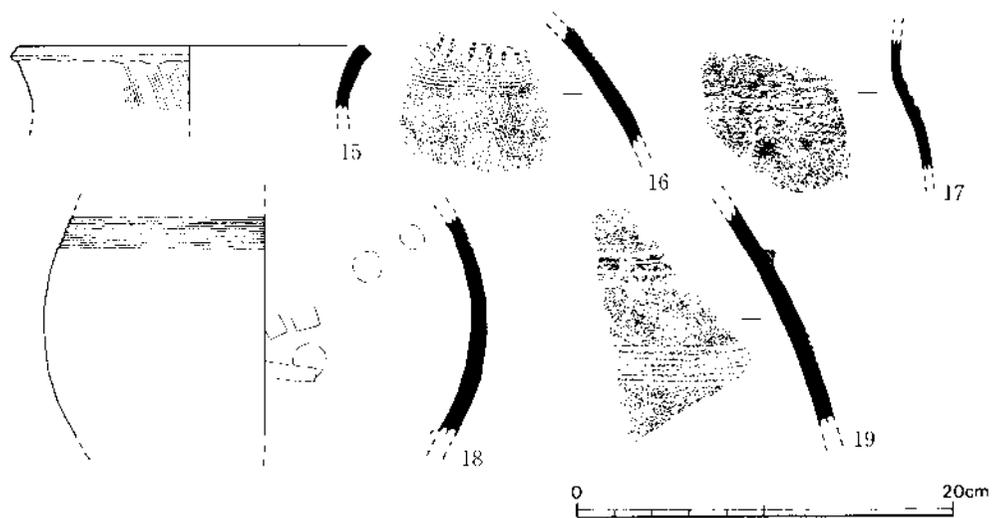


Fig. 14 SD 1 出土遺物実測図

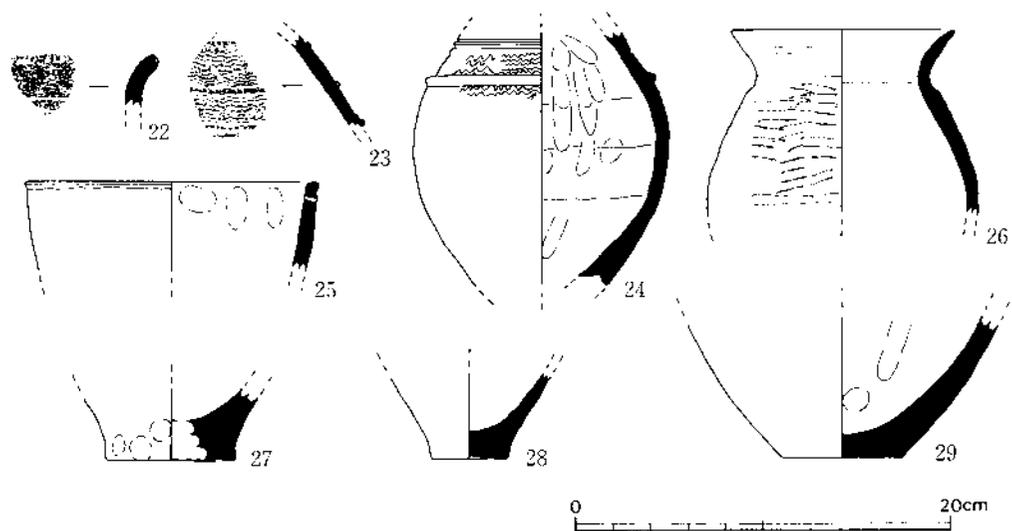


Fig. 15 SD 2 出土土器実測図

S D 1 は、埋土と遺物の状況から判断して、中期の早い段階に埋まったものと考えられる。

(6) S D 2 (Fig. 3・5・15)

1区西部にある。南北に流れる自然流路である。肩幅3.2m前後、深さ40～50cmを測る。V・Ⅵ・Ⅶ層を切っている。埋土には砂、大小礫が堆積している。遺物は弥生前期から後期までのものが出土している。22は前期甕の口縁部、27は同底部である。23・24・29は中期の壺である。23・24は胴部で、櫛描文と突帯を多様している。櫛原体が細いことから中期Ⅱの前半に比定できる。25は鉢の口縁部、28は同底部である。26は後期最終末の甕である。26は外面が激しく煤けている。

S D 2 は、弥生後期終末頃に埋まった流路である。

(7) S D 3 (Fig. 3・5・16～21)

S D 3 は、1区ほぼ中央部にあり、南北に走る溝である。幅は2.5～2.6mを測り、深さは最も深いところで40cm前後を測る。東の壁は急勾配に立ち上がるが、西の壁は緩やかに立ち上がる。東の肩が西よりも20cm程高い。S D 3 は、前期末の遺物包含層Ⅵ・Ⅶ層を切って掘られており、床面は基底層の砂礫層(XⅣ層)となっている。埋土下層は、腐食物を多く含んだ暗褐色粘土層で、多量の土器や木器・獣骨が出土した。大型壺(86)のように床面にへばりついた状態を示すものも多い。埋土上層は、中央部にレンズ状に堆積する砂層とそれを覆う暗褐色粘質土である。埋土下層は、S D 3 が機能していた時に自然堆積に近い状態で堆積した層準であるが、上層砂層は洪水砂、また暗灰褐色粘土層はS D 3 がほとんど埋沈した時期に堆積した層準と考えられる。S D 3 は、中期Ⅰ～Ⅰ期に機能した溝であり、下層及び床面の遺物は一括資料として位置付けることができる。

① S D 3 上層の遺物 (Fig. 17, Fig. 18-54・55・57・58)

壺 (Fig. 17-30～39・45～48・51～53)

30～38・45は、胴部細片である。34は頸胴部間に3～4条のヘラ描沈線を施し、33・35は多条のヘラ描沈線と扁平な刻目突帯を有する。30はヘラ描沈線+双線山形文+小突帯を有す。以上は前期末に属する。31は櫛描波状文と同原体による刺突文、32は櫛描波状文と凹形浮文、36は櫛描波状文、37は櫛描直線文+扁平な刻目突帯を有す。32は櫛目が極めて細く胎土も異なることから搬入品の可能性が強い。以上中期Ⅱ期前半の土器である。

39・46～48・51・52は壺口頸部である。39は口縁外面に粘土帯を貼付し、内面には扁平な刻目突帯を4条貼付している。46・51は口唇を横ナデし、上・下端に刻目を施す。47・48は、口縁外面に粘土帯を貼付し共に口唇を強く横ナデする。47は口唇上・下に刻目を、48は口縁内面に扁平な刻目突帯を3条貼付する。52は、頸部に多条沈線+刺突列点文を配す。52が前期末、他は中期Ⅰに属する。53は、胴部にヘラ描沈線+双線斜格子+刺突文を有し前期末に属する。57・58は共に壺の低部である。

甕 (Fig. 17-40～44・49・50, Fig. 18-54)

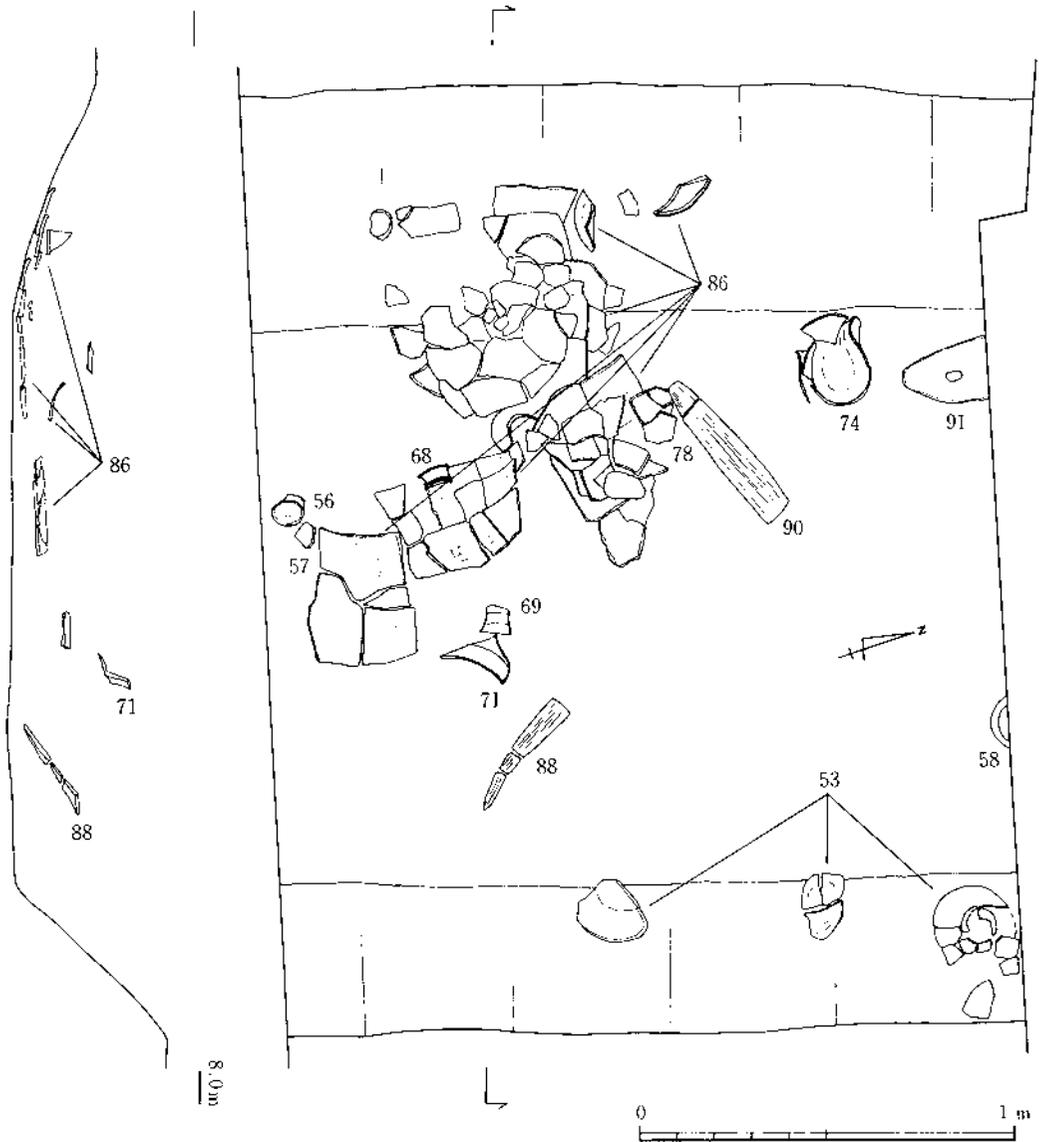


Fig. 16 SD 3 遺物出土状況実測図

40～44は、甕細片である。40・41は指頭で摘み出した小突帯を3条、42は口縁部外面に断面  
 方形の突帯を貼付し刻を施し、更にその直下に小突帯を貼付し刻む。44は3条のヘラ横沈線  
 を施す。49は口唇を強く横ナデし下端に刻目を巡らす。50は、口縁に扁平な刻目突帯を貼付し、  
 刻目を施す。41・42・50は薄手である。

55は蓋で口唇を強く横ナデする。

② S D 3 下層の遺物 (Fig. 18-56, Fig. 19-21)

④ 土器

上層に比べて大型の破片が多い。

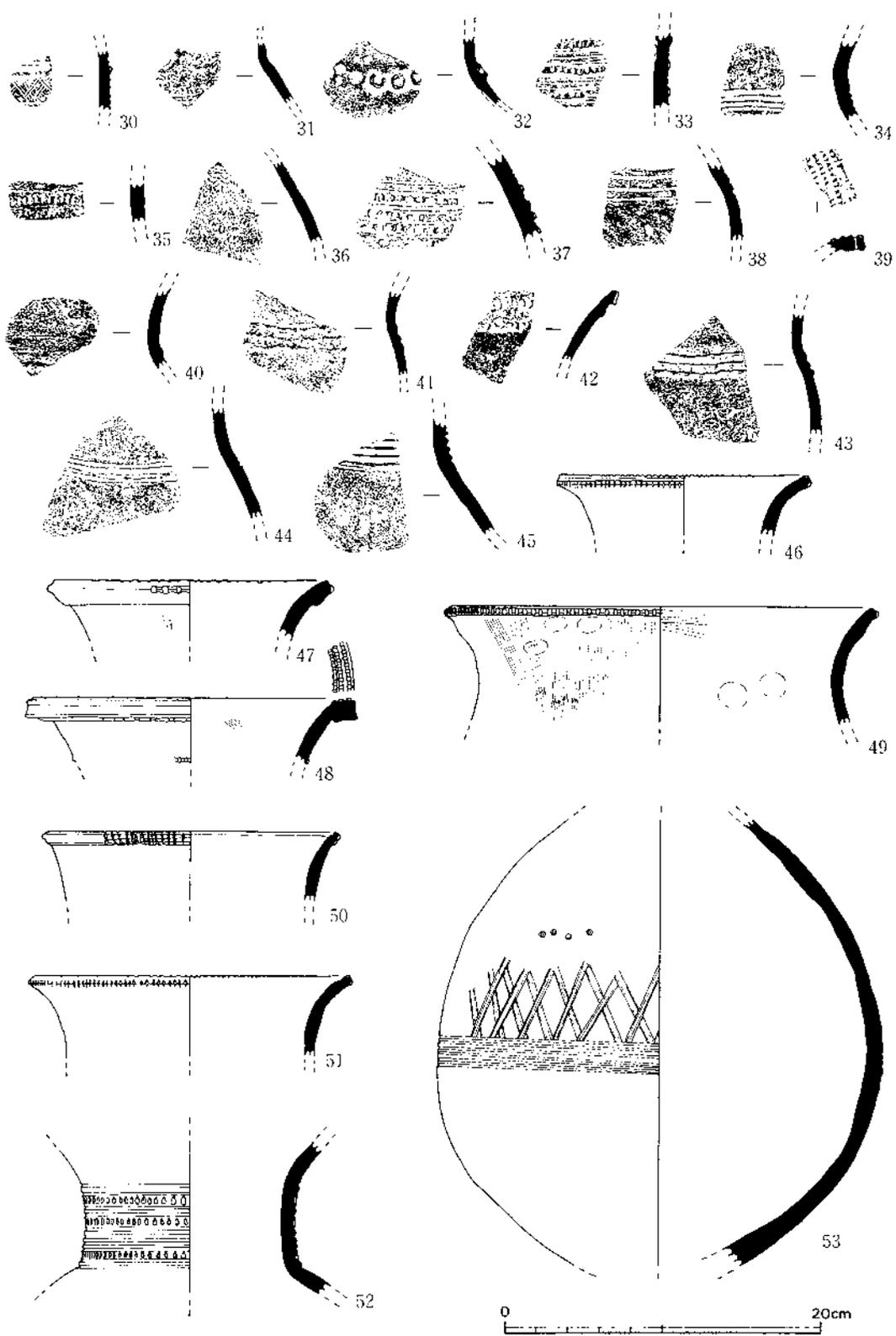


Fig. 17 SD 3 上層出土土器実測圖

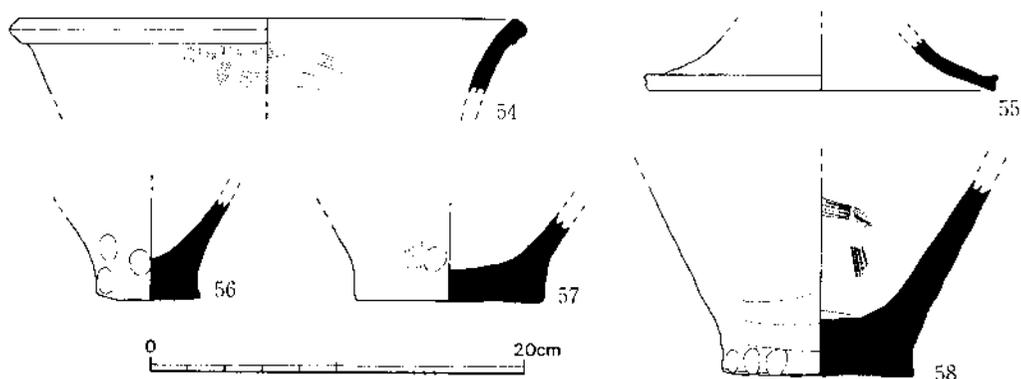


Fig. 18 SD 3 上層出土土器実測図

壺 (Fig. 19-60-68, 72・73・75・76, Fig. 20-81・82, 84-86)

60-64は胴部細片である。60・64は太い原体による櫛描直線文を有し、64は双線による山形文を配す。61・62はヘラ描沈線と双線による弧文を有す。63は双線による斜格子文+断面三角突帯を有す。65・66は長頸の広口壺である。65は口唇を強く横ナデし上・下に刻目、66は多条のヘラ描沈線+扁平な刻目突帯を有す。66・67は頸部に櫛描直線文+扁平な刻目突帯を施し、共に口唇はヨコナデ、67は口唇下端に刻目、口縁部内面に刺突文を施す。68は口唇上・下を刻み口縁内面に扁平な刻目突帯を2条貼付する。72は内面に粘土帯を貼付し、口唇に沈線、上・下に刻目を配する。73は球形の胴部から直立する頸部下端に多条のヘラ描沈線を施す。75は多条のヘラ描沈線+扁平な刻目突帯を貼付する。86は器高96cm、最大径66cmを測る大型壺である。底部が欠落しているがほぼ完形複元できた。出土状況から見て原位置で破損したものと考えなければならない。底部は接合面から剥離しており、意図的に底部をはずしてSD 3内に持ち込まれたものと考えられる。最大径を胴部下半に有する長胴の壺で、口縁端部が内・外に拡張され、口唇下端に刻目を施す。76・81・82・84・85は壺底部である。60・64・67・68は中期Ⅰ-Ⅰ期に属する。

甕 (Fig. 19-59・69-71・74・77・79・80・83)

69・71は、頸胴部間に2条の突帯を貼付、口唇は強く横ナデし、69は上端に71は下端に刻目を配す。70・74は頸胴部間にヘラ描沈線1条を有す。71は薄手である。77・80・83は底部である。

鉢 (Fig. 18-56, Fig. 20-78)

56は底部、78はほぼ完形をとどめる。共に底部を厚くつくり外脇を指頭で強く押さえている。78は、口唇を強く横ナデし上・下端に刻目を施す。

① 叩石 (Fig. 20-87)

砂岩の河原石をそのまま利用している。長側縁の一部に使用痕が見られる。長軸9.5cm、短軸7.1cm、厚さ2.5cm、重さ210gである。

② 木器 (Fig. 21)

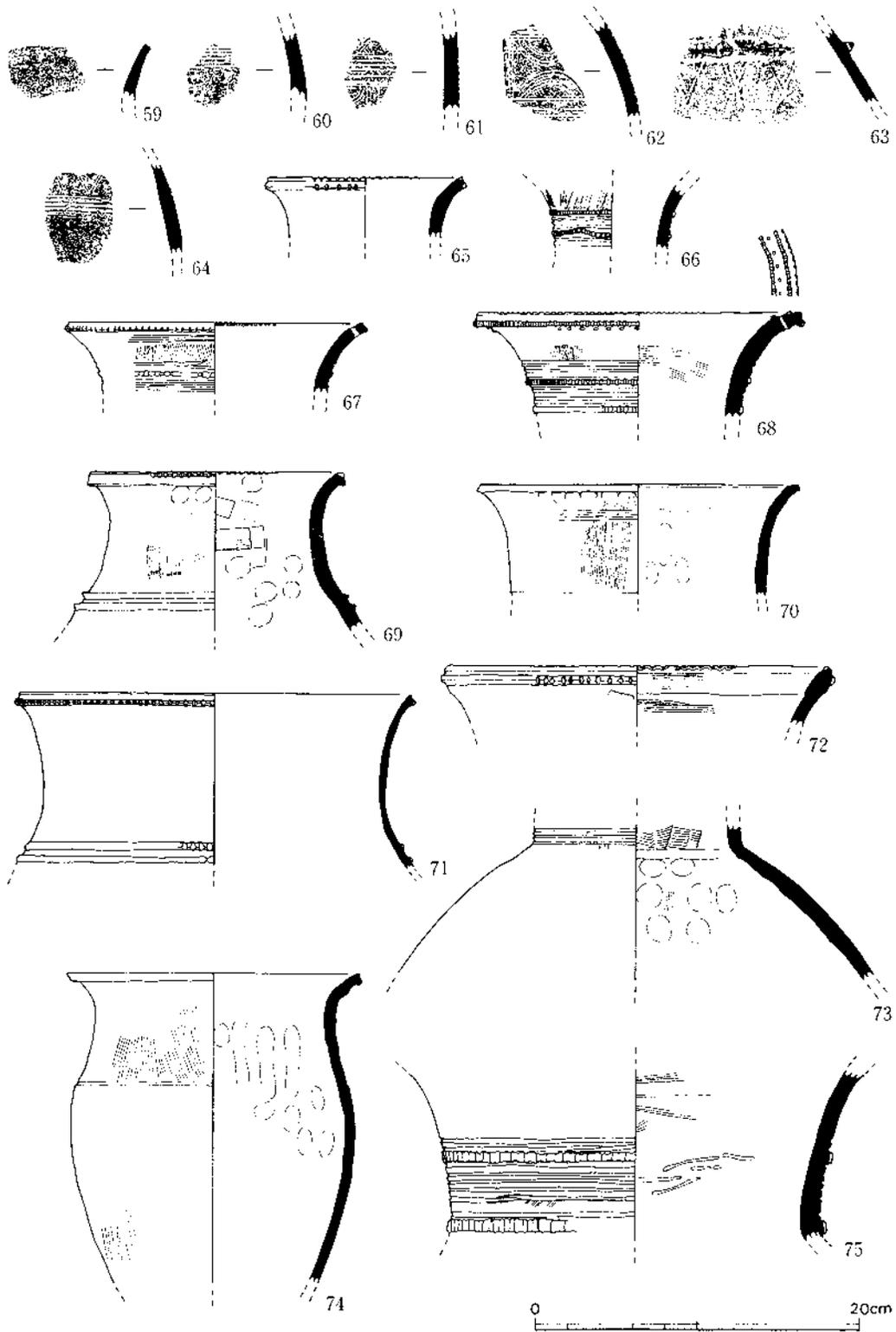


Fig. 19 SD 3 下層出土土器実測図

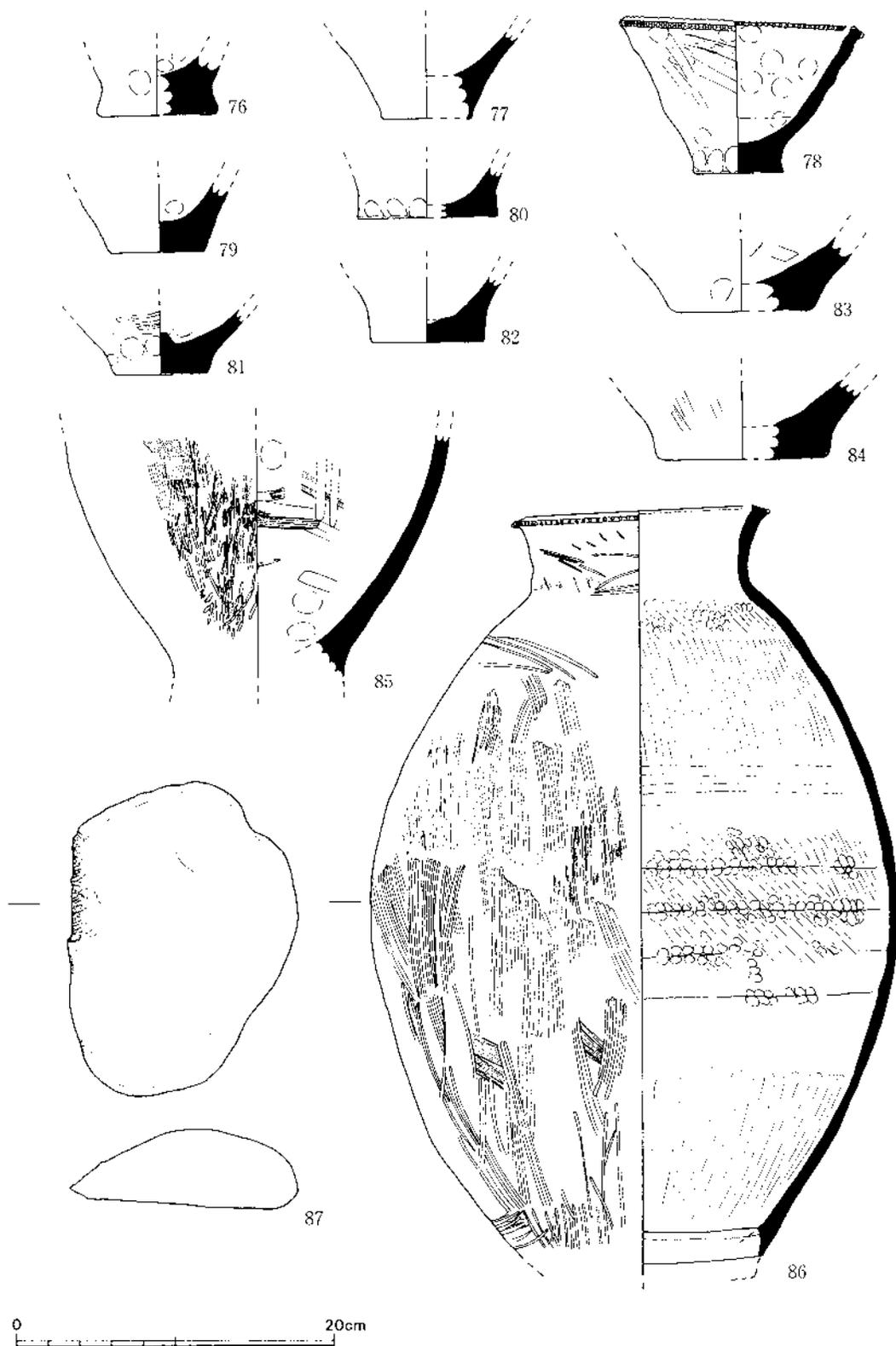


Fig. 20 SD 3 下層・床面出土遺物実測図 (86のスケールは8分の1)

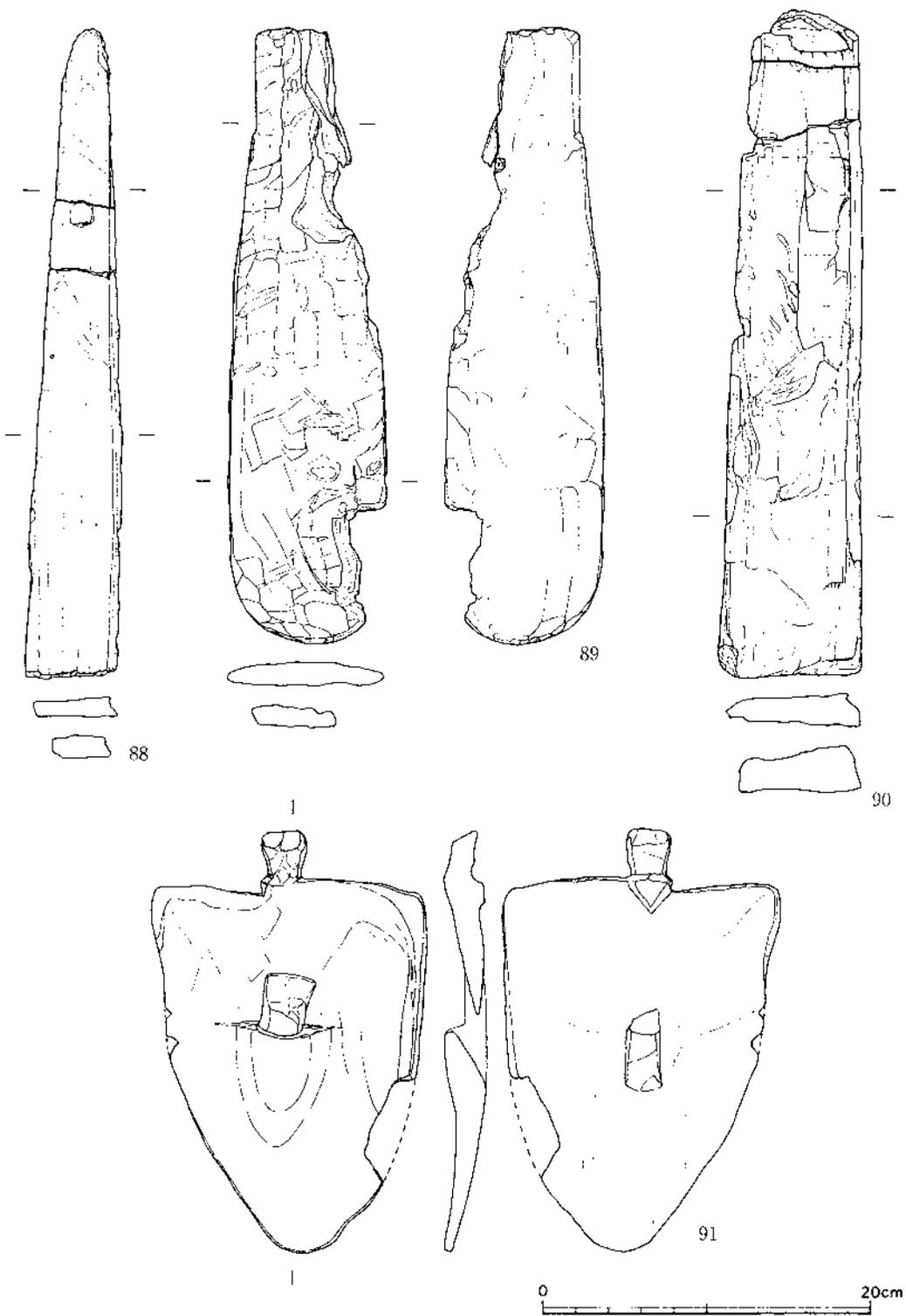


Fig. 21 SD 3 及び 1 区 VII 層出土木製品 (SD 3 : 88, 90, 91, VII 層 : 89)

鋤先 (Fig. 21-91)

着柄鋤先で、全長26cm、肩部幅16.4cm、肩部の厚さ2.4cmで先端に向かって厚を減じ先端部では0.6cm前後となる。材はアカガシ亜属である。平面形はスコップ状で先端に向かってかなり湾曲している。着柄孔は径2～3cmを測り鋭角に穿たれている。全体として左右対称となっておらず、肩部の突起、着柄孔共に表面観では左側に片寄って着いている。また身上半の側縁にみられるドテ状の高まりも右側はしっかり作られているが、左側は上端に痕跡程度しか認めすることはできない。全体に磨耗が激しく使用痕・加工痕を十分に観察することができないが、刃部は右側よりも左側がやや直線化しており、左側刃部の消耗が激しかったことを示している可能性が十分に考えられる。

その他 (Fig. 21-88・90)

88は、長さ40cm、最大幅4.7cm、厚さ1cmを測る板状の木製品である。90は、長さ44cm、幅8.6cm、厚さ2～2.8cmを測る。本例も板状木製品である。両者共に「みかん割技法」によって作られた土留用の矢板として用いられたものと考えられる。共にアカガシ亜属である。

④ 獣骨 (PL 22)

ツキノワグマ、雌、成獣の下顎骨が出土している。残存長14cmを測る。弥生時代の遺構からツキノワグマの骨が出土することは、全国的にも極めて類例が少ない。

### 3. ユニット出土の遺物

(1) ユニット1 (Fig. 3・22～24)

1区西端より16mの地点で検出した。調査区を北東から南西方向に切る帯状の炭化物密集地があり、その中に前期末の土器が多量含まれていた。炭化物の厚さは2～10cmを測り、浅い溝状の遺構となる可能性もある。炭化物の中には少量の炭化材も含まれている。なお94は炭化物の広がり外の外に位置するが、関連の強いものとしてここで取り挙げた。土器の出土状況には、特徴的なものは見受けられず平均的な出土を示し、接合関係もかなり見られた。

壺 (Fig. 23-92～97・99～102)

92・100～102は、4条～6条からなるヘラ描沈線帯を胴部外面に数帯配している。器面は総じて右下りのハケ調整。102は小孔を穿った浮文が2個貼付される。100は赤彩が施されている。93・94は、長頸広口頸の頸部である。ヘラ描沈線を多用し、93は沈線間に圧痕文を3帯、94・95は扁平な刻目突帯を配す。93は赤彩が施される。その他口縁部96・97・99が出土している。三者共に激しく煤けており、96は被熱のために一部海綿状を呈している。

甕 (Fig. 23-98・103・104・106～114)

108は如意状口縁を有する甕の胴底部である。外面は被熱赤変している。109～111・113は、薄手土器で口縁下に1～2条の指頭で摘んだ小突帯を貼付。111は上胴部にも4条の突帯を貼付する。112・114は、口唇部を強く横ナデし上胴部に4条のヘラ描沈線を巡らす。文様帯の上

と下で器面調整が異なる。98も同様の特徴を有する。103・104・106・107は、底部で前二者は薄手土器で、107には下→上の弱いヘラ削りが見られる。甕は例外なく煤けている。

蓋 (Fig. 23-105)

口径27.6cmを測る。甕の蓋であり口縁内面が環状に煤けている。

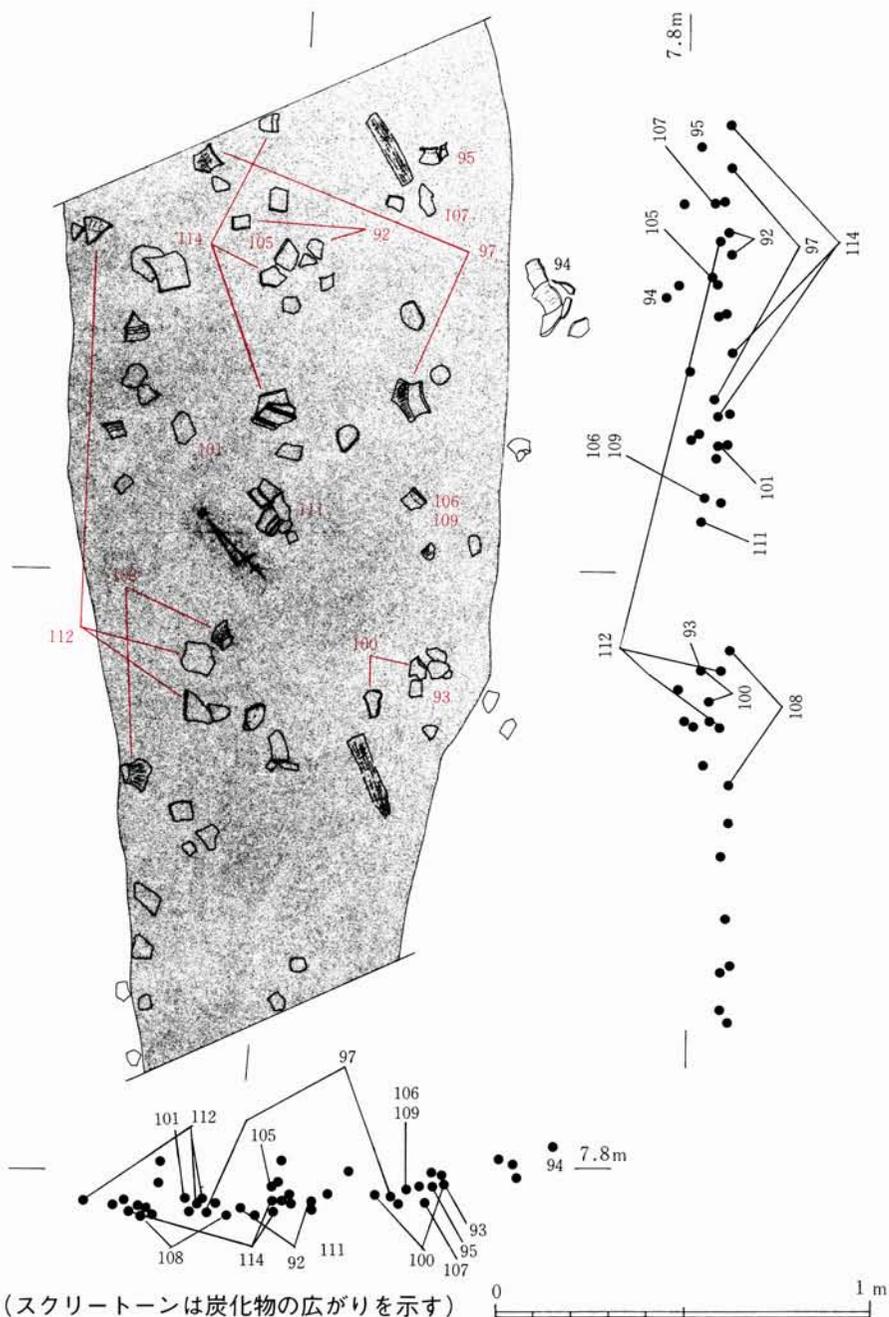


Fig. 22 ユニット1 遺物出土状況平面図及び垂直分布図

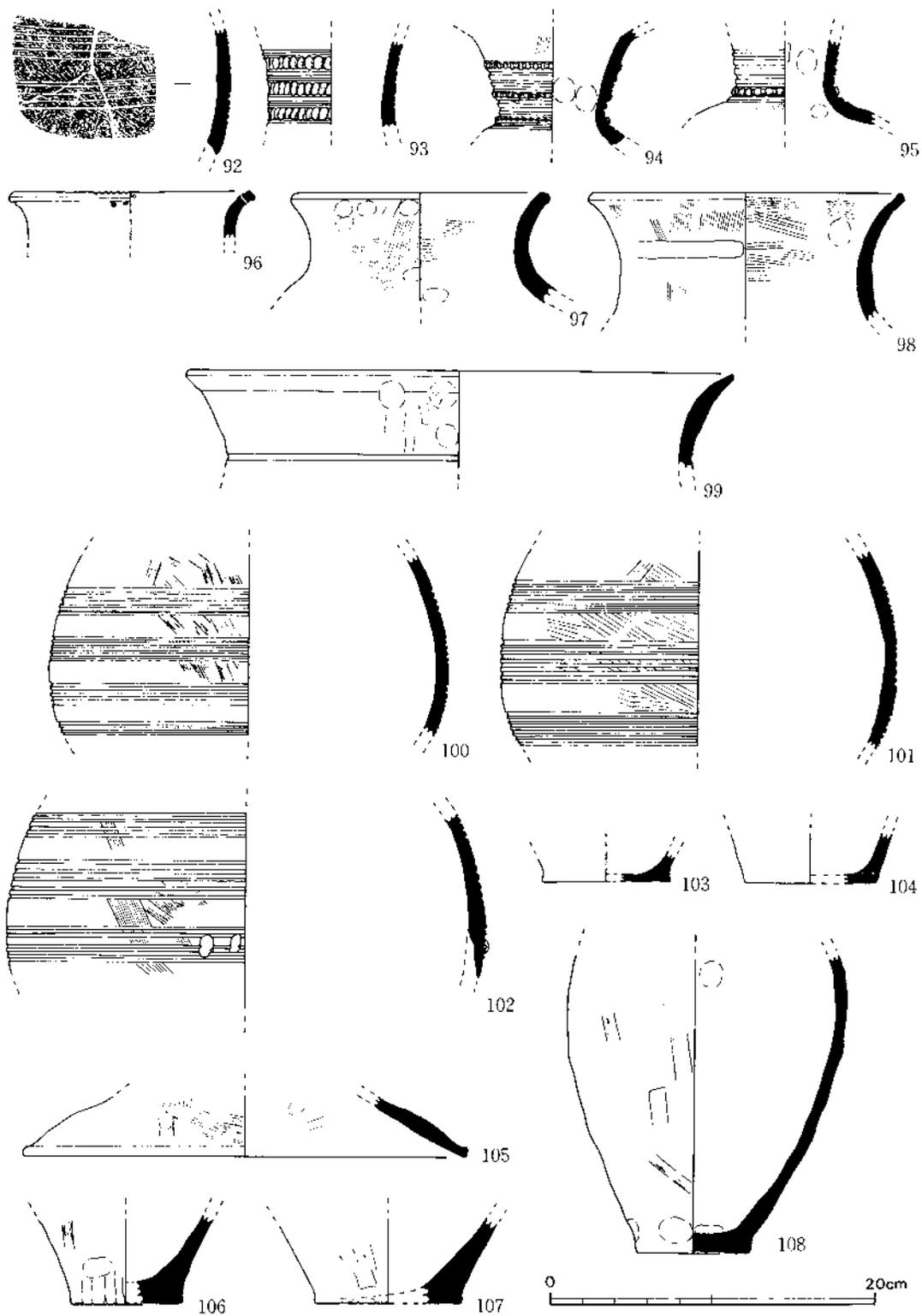


Fig. 23 ユニット1 出土土器実測図

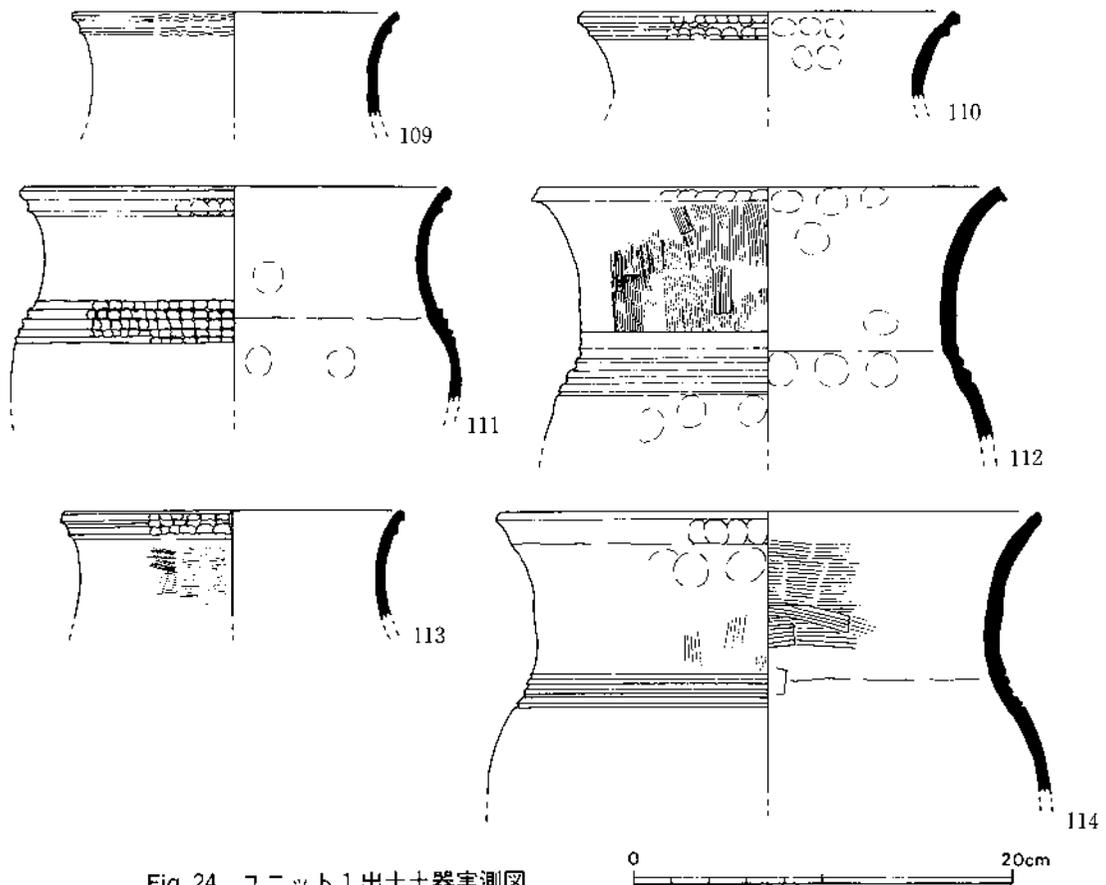


Fig. 24 ユニット1 出土土器実測図

(2) ユニット2 (Fig. 3・25~29)

1区のはほぼ中央部で検出した。土器の密集範囲は東西に長軸を有し、長さ3m、幅1.5mのうちにおさまる。層位はⅥ層とⅦ層とにまたがる。調査時にはほぼⅥ層中に含まれるものを上層、Ⅶ層中に入るものを下層として図示し遺物の取り上げも行った。しかし、上・下で接合関係も見られ、土器も同時期の所産であることから、上・下層共ユニット2として一緒に述べる。

壺 (Fig. 27-115~122・124, Fig. 29-153・154)

広口壺、長頸壺、細頸壺からなる。115・121・122は、頸部外面に多条のヘラ描沈線と扁平な刻目突帯を有す。口縁は横ナデを施し端部に刻目を配す。119・120は口縁部外面に粘土帯を貼付し口唇横ナデ、端部に刻目を配す。120の口縁部内面は4条の扁平な小突帯を貼付し更に列点文及び小孔を巡らす。117は内面に断面三角形の突帯を貼付。内側に小孔列を配す。124は頸部に5~6条のヘラ描沈線帯を施す。116は長頸壺である。口縁部に刻目、頸部に多条のヘラ描沈線と扁平な刻目突帯を貼付する。118は無文の細頸壺である。153・154は底部である。

甕 (Fig. 27-123・125~138, Fig. 28-139~150, Fig. 29-151)

125~127, 139・141・148は、いわゆる如意状口縁を有するタイプで、口唇部は丸くおさめ

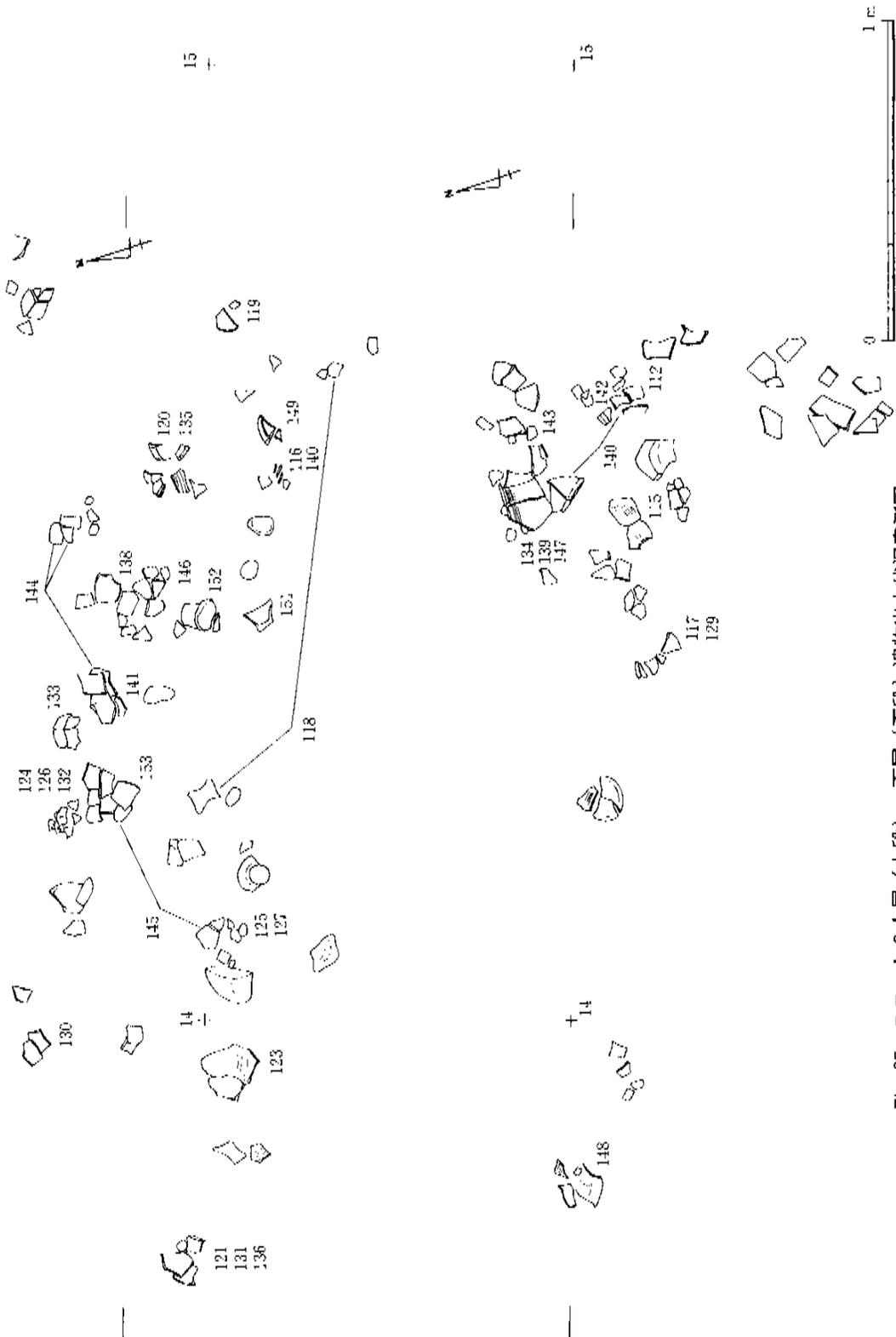


Fig. 25 ユニット2上層(上段)・下層(下段)遺物出土状況実測図

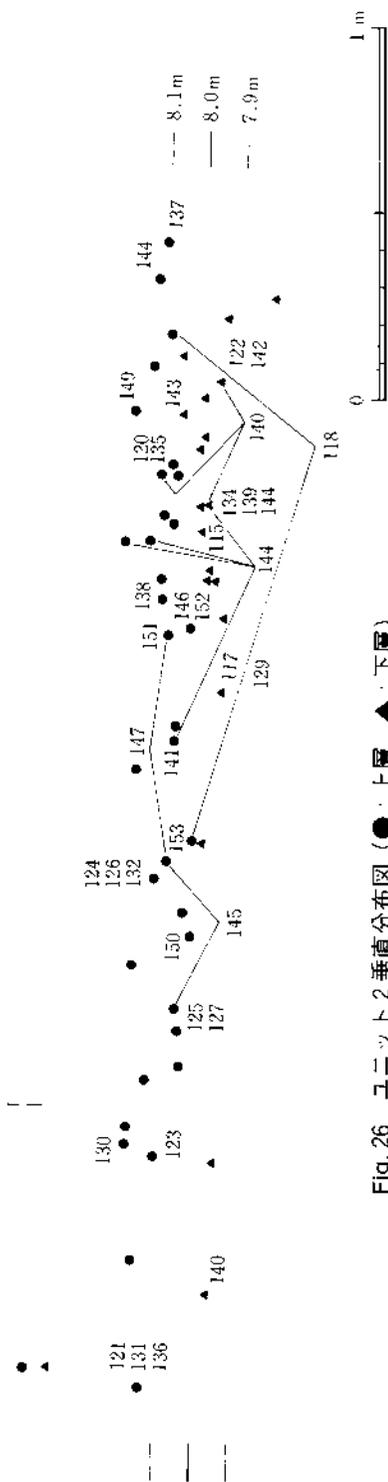


Fig. 26 ユニット2垂直分布図 (●：上層 ▲：下層)

例外なく刻目が施される。139・141・148の上胴部には3～4条のヘラ描沈線が配される。144・147は逆し字状口縁を有するタイプで、口唇に刻目を有する。144は上胴部に6条のヘラ描沈線を配す。他は、すべて後述する土佐型甕に属する。上胴部から頸部に向かってすぼまり、口縁部は外反するカーブを描く。口唇は136を除いてすべて面取る。頸胴部間に小突帯を有するタイプ(134・135・138・142)や多条沈線帯+刺突列点文を施すタイプ(140・145・146)、無文のもの(137・136・143)などのバリエーションが見られる。また文様帯の上と下で器面調整が異なるものが多いのも特徴である。133は薄手土器である。149～151は、底部で151は外面に下→上のヘラ削りが認められる。

鉢 (Fig. 29-152)

底部である。接合部から剝離しており擬口縁を見ることができる。厚い底部で外脇に指頭による圧痕が顕著に着く。

(3) ユニット3 (Fig. 3・30・31)

1区のⅥ層上部で検出した。1.4m×1.1mの範囲から集中して出土した。前期末と中期Ⅰ期の土器が混在している。

前期土器 (Fig. 31-155・159-166)

155は、壺胴部で多条のヘラ描沈線帯を施し、沈線間に刻目を一条配している。159は、頸部に5条の沈線を施し、口縁部を強く揃んでいる。160は、口唇に沈線+刻目を施し頸部には多条のヘラ描沈線を配す。165は壺底部である。

161～163は、ヘラ描沈線を施した甕で、162は逆し字状口縁を有す。164は、上胴部に横位の短沈線を連続施文している。166は甕

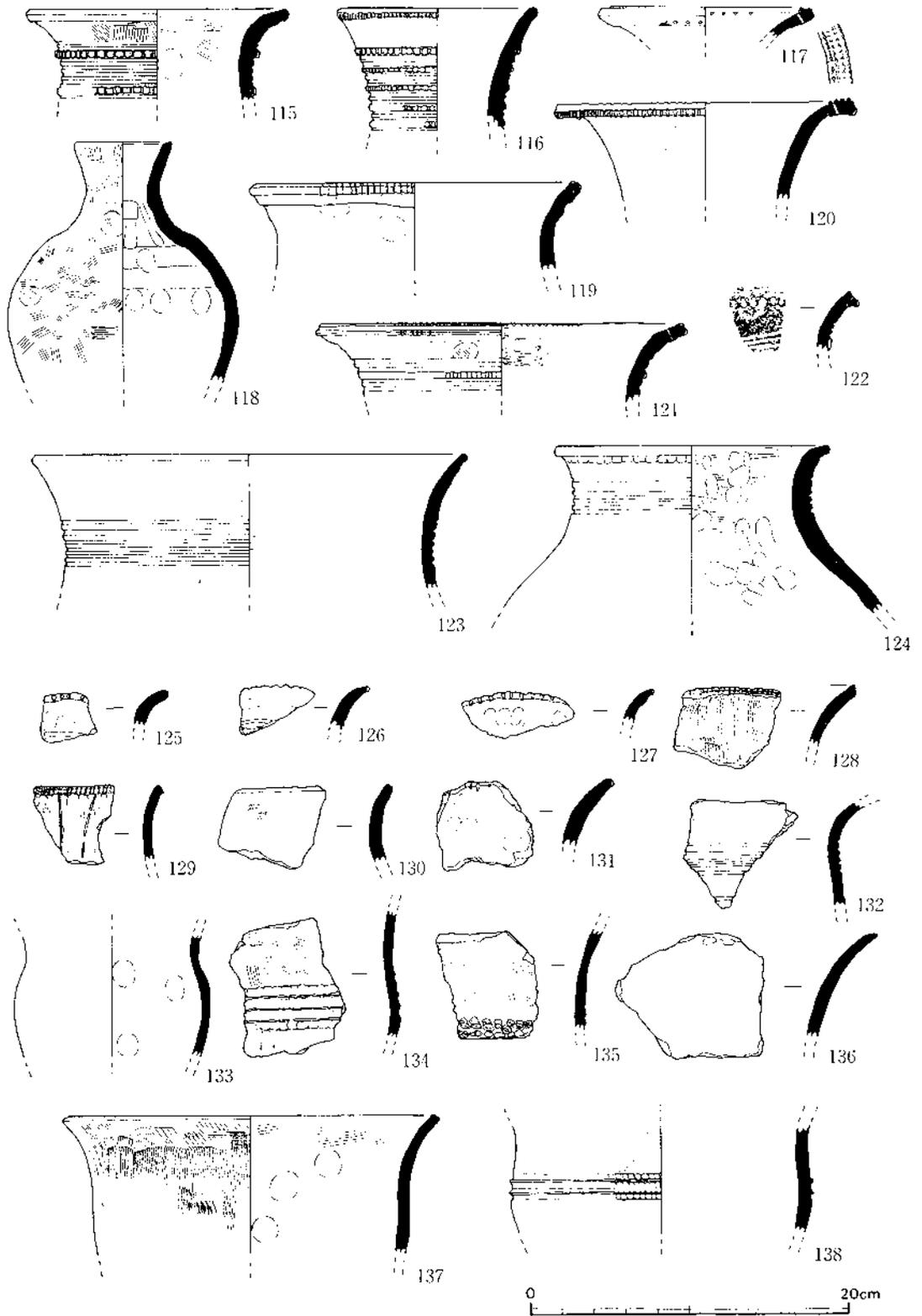


Fig. 27 ユニット 2 出土土器実測図

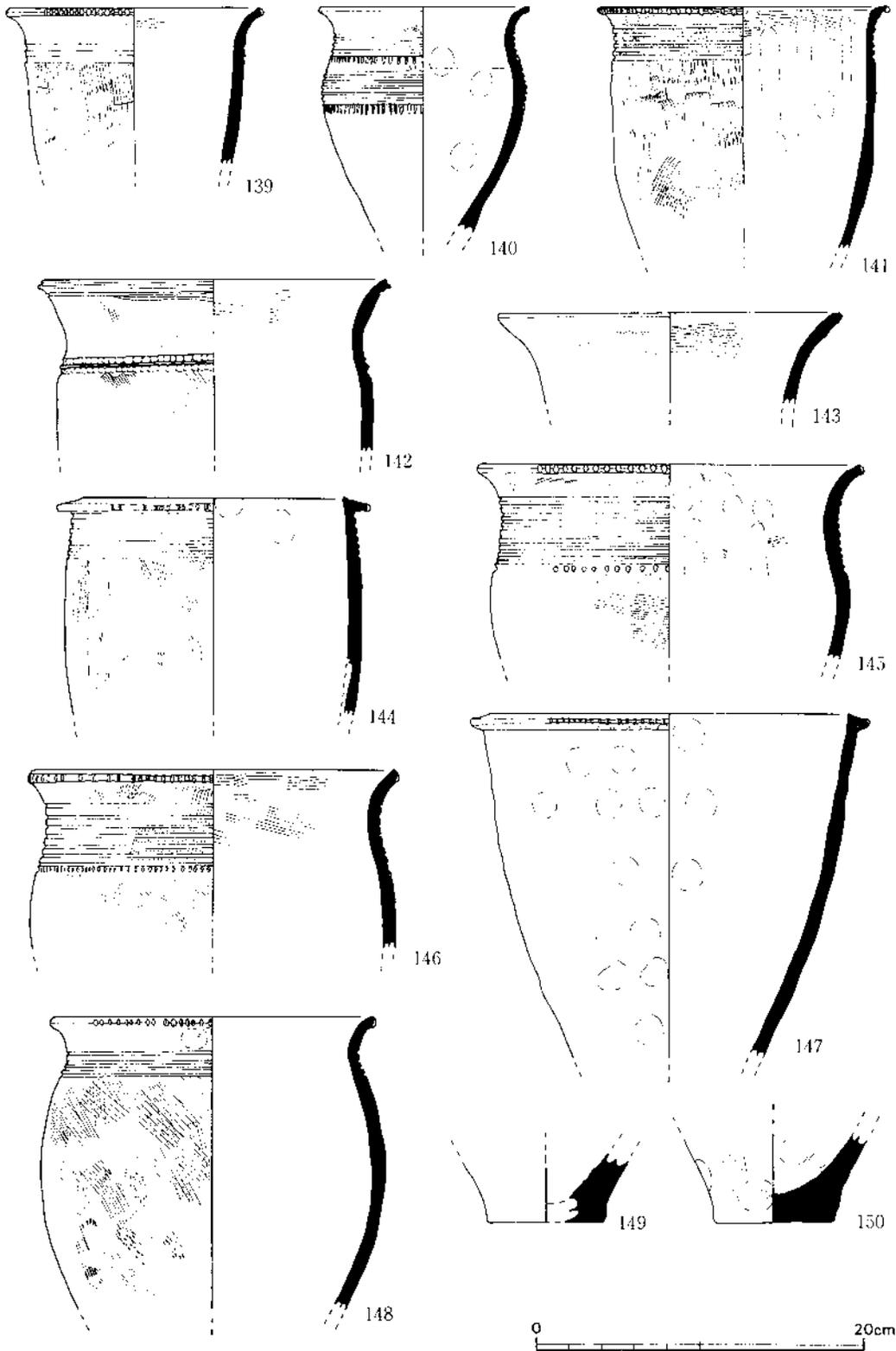


Fig. 28 ユニット 2 出土土器実測図

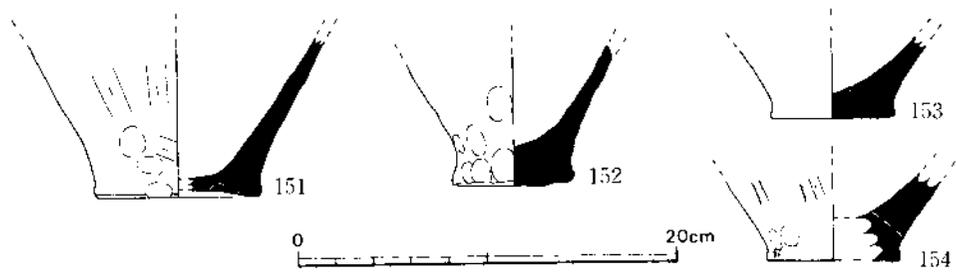


Fig. 29 ユニット2出土土器実測図

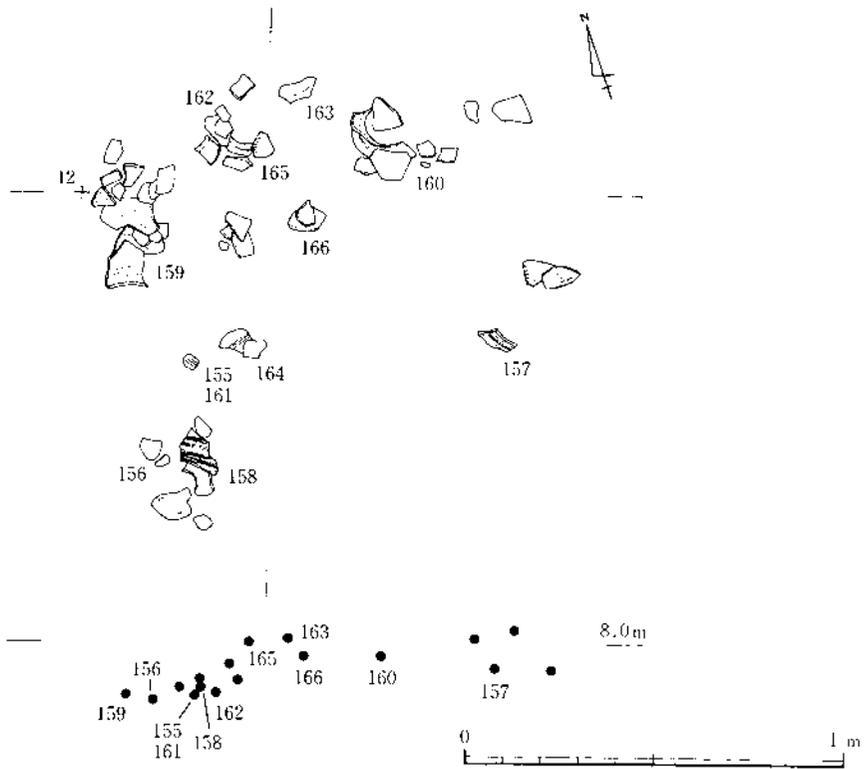


Fig. 30 ユニット3遺物出土状況平面図及び垂直分布図

底部である。

中期土器 (Fig. 31-156~158)

すべて壺である。156は、上胴部で櫛描直線文・同波状文・同籐状文を配す。157・158は頸部である。157は、櫛描直線文と扁平な刻目突帯を配する。158は、櫛描直線文と同波状文を交互に施している。

(4) ユニット4 (Fig. 3・32・33)

1区のⅡ層中で検出した。2m×1mの範囲に集中している。すべて前期末の土器である。

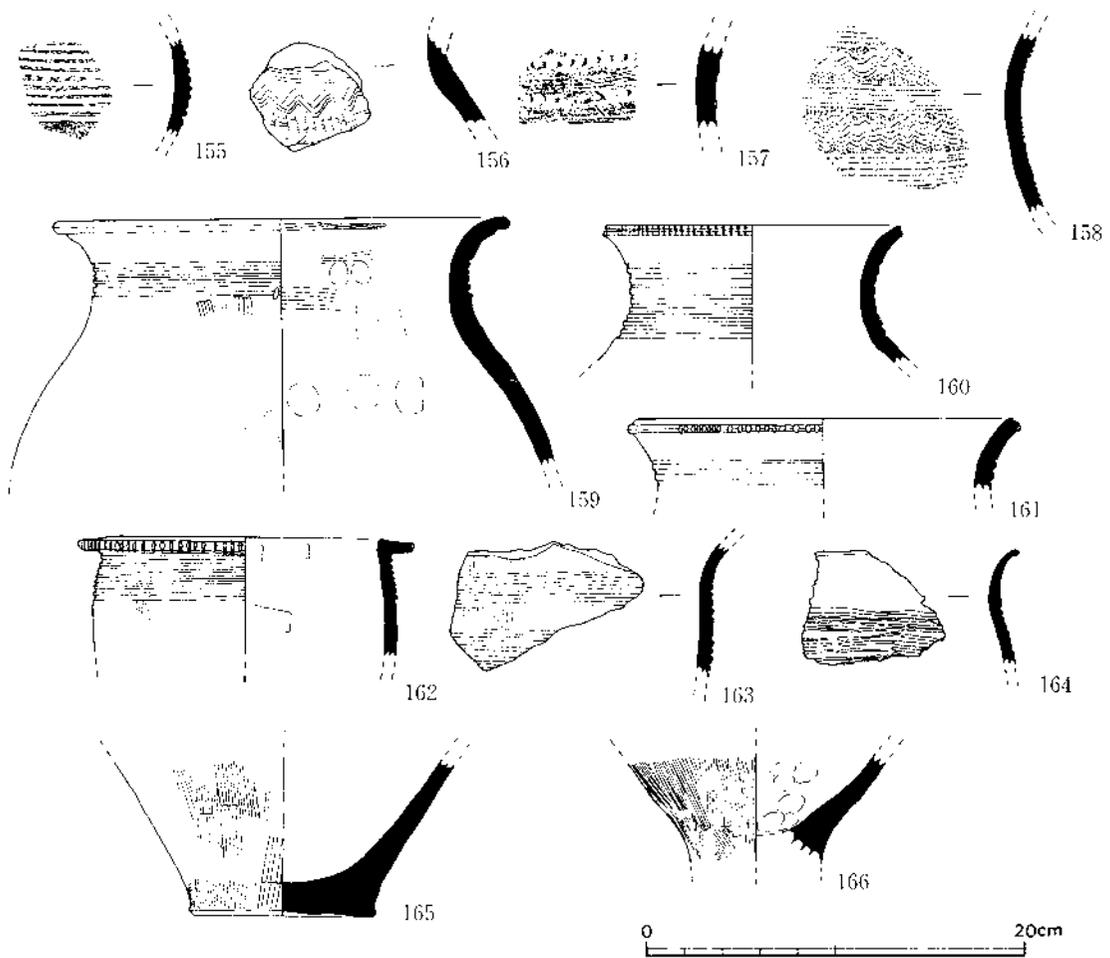


Fig. 31 ユニット3 出土土器実測図

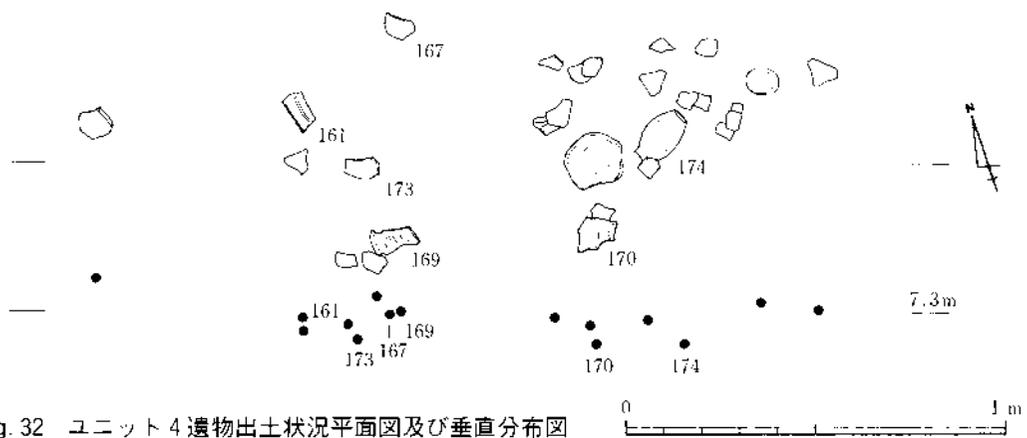


Fig. 32 ユニット4 遺物出土状況平面図及び垂直分布図

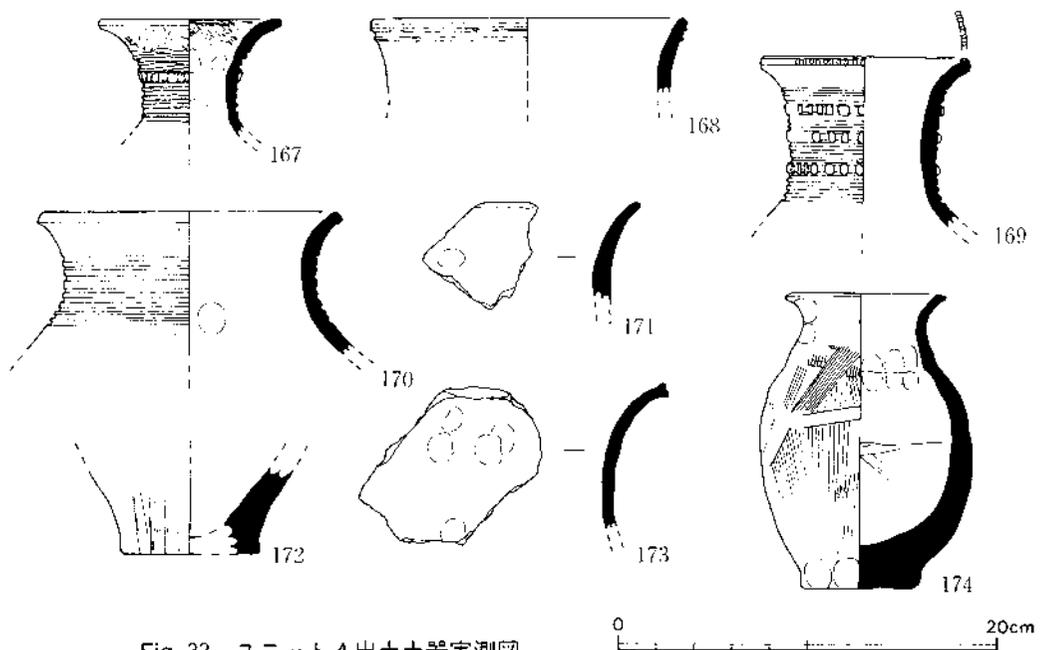


Fig. 33 ユニット4出土土器実測図

壺 (Fig. 33-167・169・170・174)

167・169は長頸広口壺である。両者共頸部に多条のヘラ描沈線を施し扁平な刻目突帯を貼付する。169は、口唇を刻み、口縁部内面にも同種の突帯を貼付する。170は頸部に8条のヘラ描沈線を巡らす。174は最大径を下胴部に有する無文の壺である。

甕 (Fig. 33-168・171~173)

168は口縁下に2条の微隆起帯を貼付。171・173は、口唇を横ナデする。172は底部である。

(5) ユニット5 (Fig. 3・34・35)

S D 3の東にありV層中で検出した。長さ5m、幅1.2mで帯状に分布している。

壺 (Fig. 35-175~178, 180~184・186~189)

175・176・178・180・182は、口縁外面に粘土帯を貼付、口唇を横ナデし、175・178は口唇に刻目を施す。178は口縁内面にハケ状原体で列点文を配し、頸部には櫛描簾状文、上胴部には同波状文を施す。181は長頸壺頸部下端に断面三角形の突帯を貼付する。177は胴部で断面三角形の突帯を貼付し、上下に櫛描波状文を配す。185~189は底部で、186の内面は下→上のヘラ削りが見られる。

甕 (Fig. 35-179)

179は、口縁部が強く外反、外面に粘土帯を貼付し指頭で押圧、口唇は横ナデ。外面は煤けている。



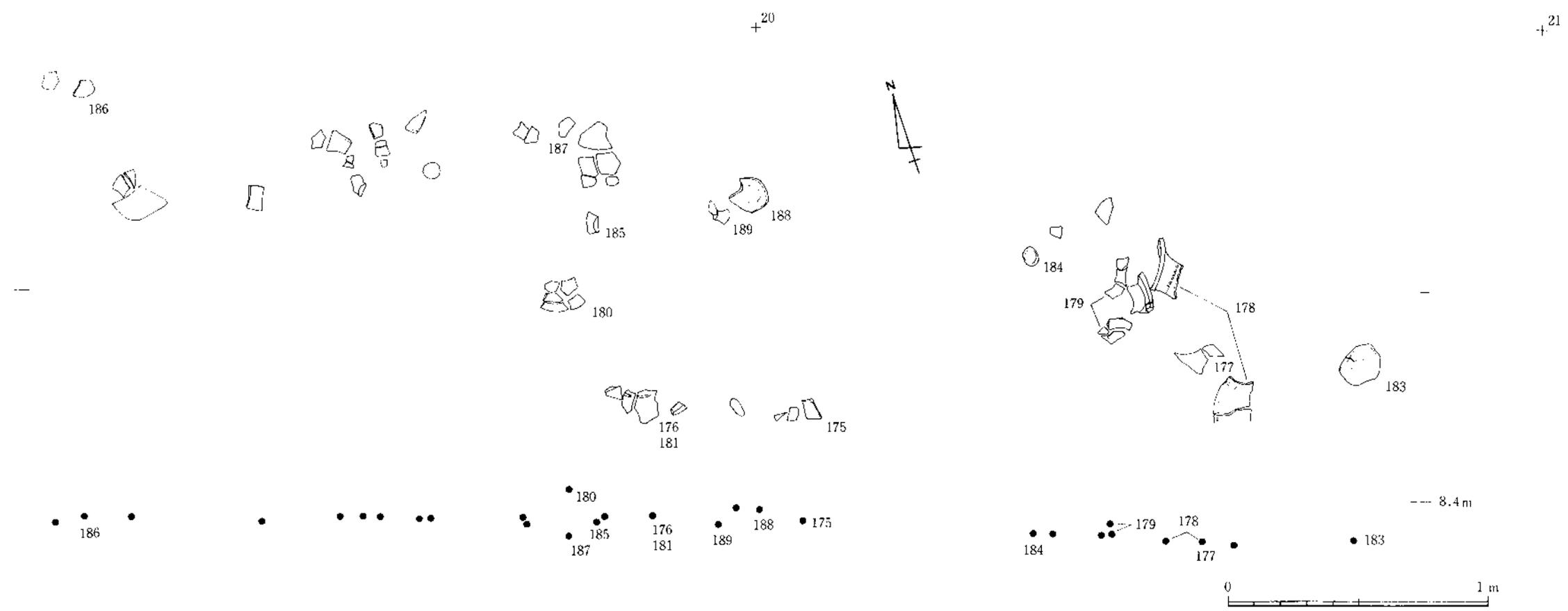


Fig. 34 ユニット5遺物出土状況



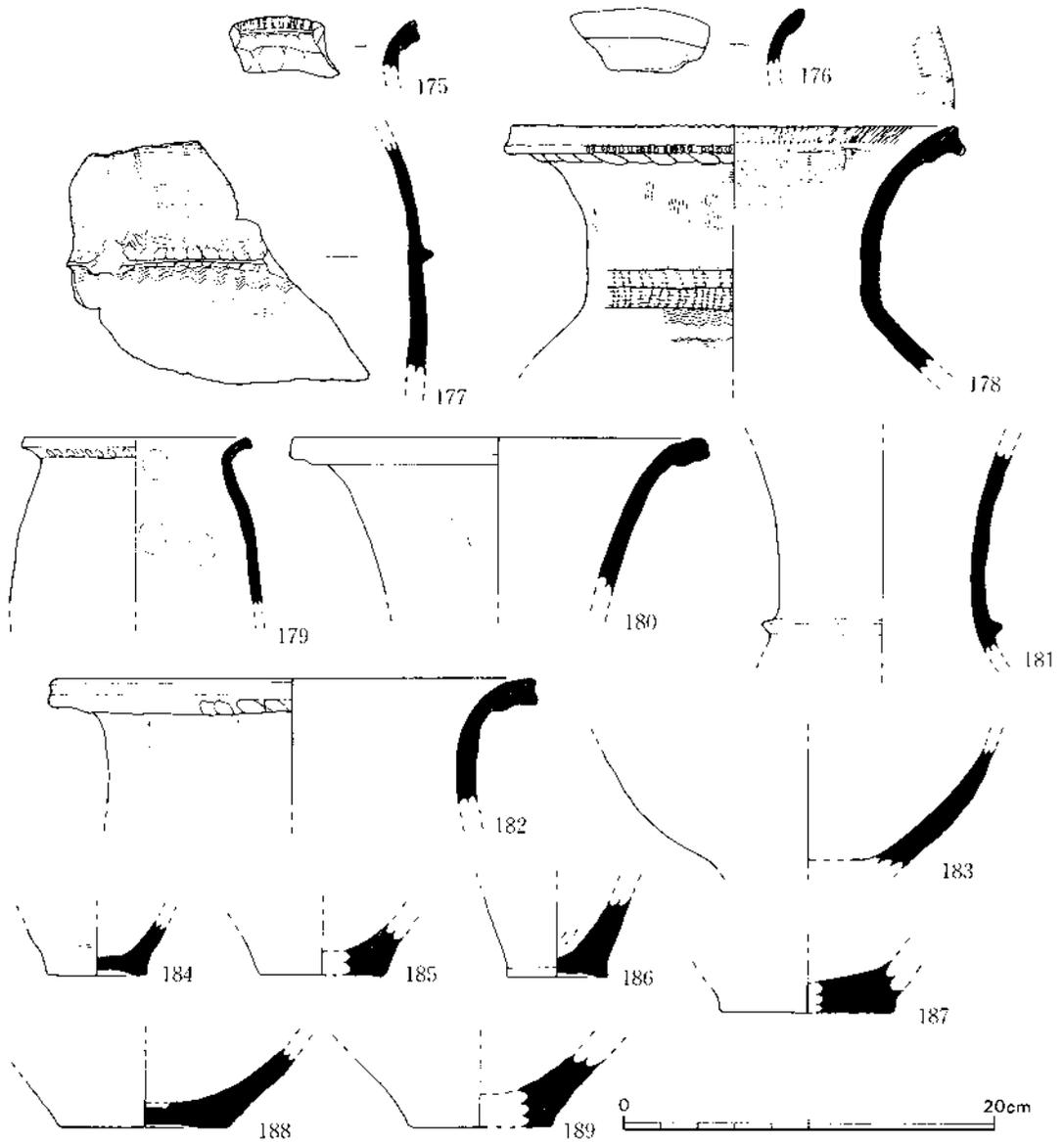


Fig. 35 ユニット5出土土器実測図

#### 4. 包含層出土の遺物

ここでは包含層出土の遺物について主なものを図示し、説明を加える。

##### (1) 1区上層の遺物

##### ① 土器 (Fig. 36)

弥生前期末と中期上期の土器が混在している。190～194は壺胴部の細片である。190は断面三角形の突帯を貼付し、その上に櫛描波状文を配する。191は櫛描波状文と同扇形文を施す。192は櫛描簾状文と同波状文を交互に施す。193は櫛描直線文と同波状文を施す。以上の櫛描原

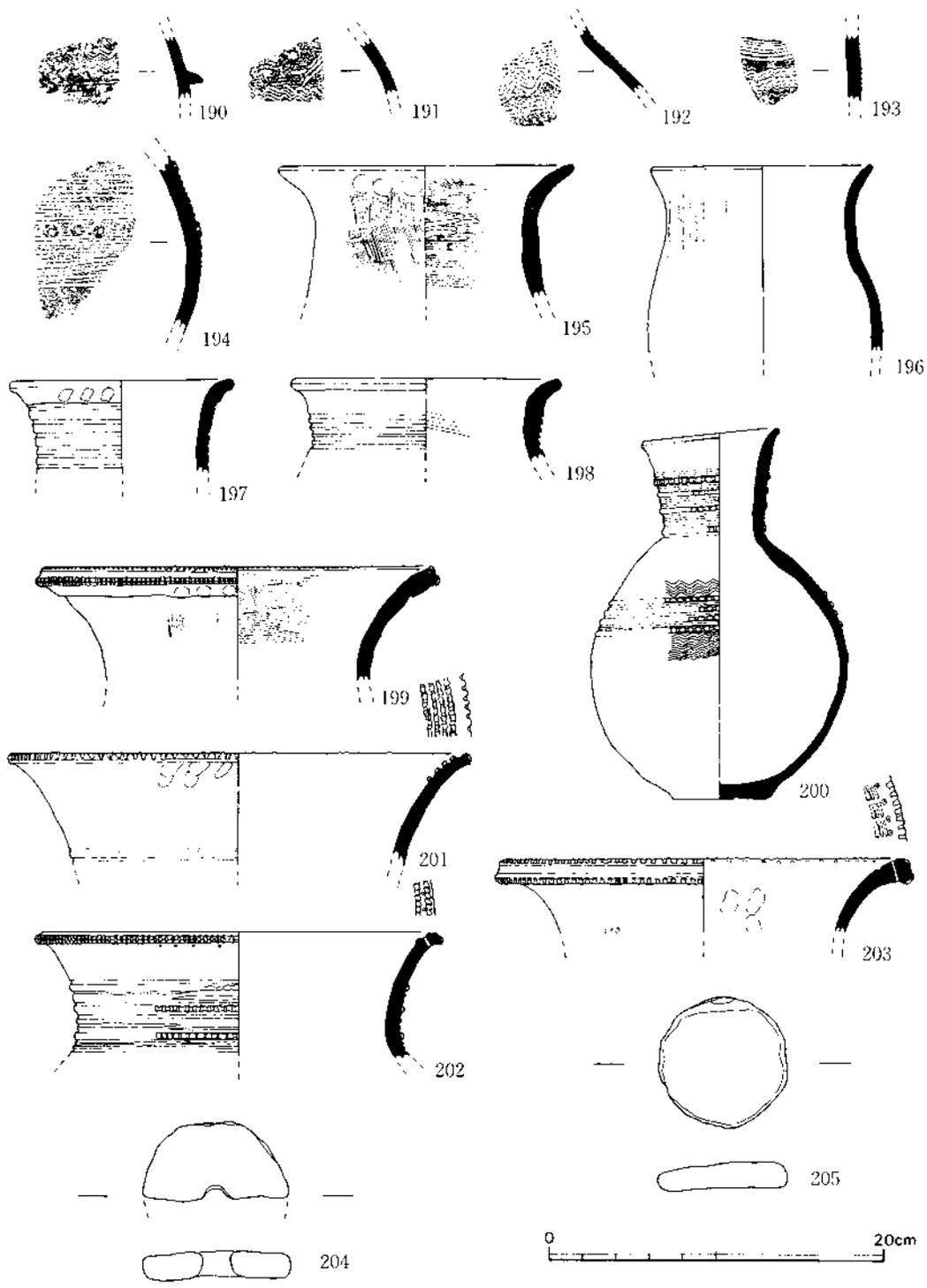


Fig. 36 1区包含層上層出土土器実測図

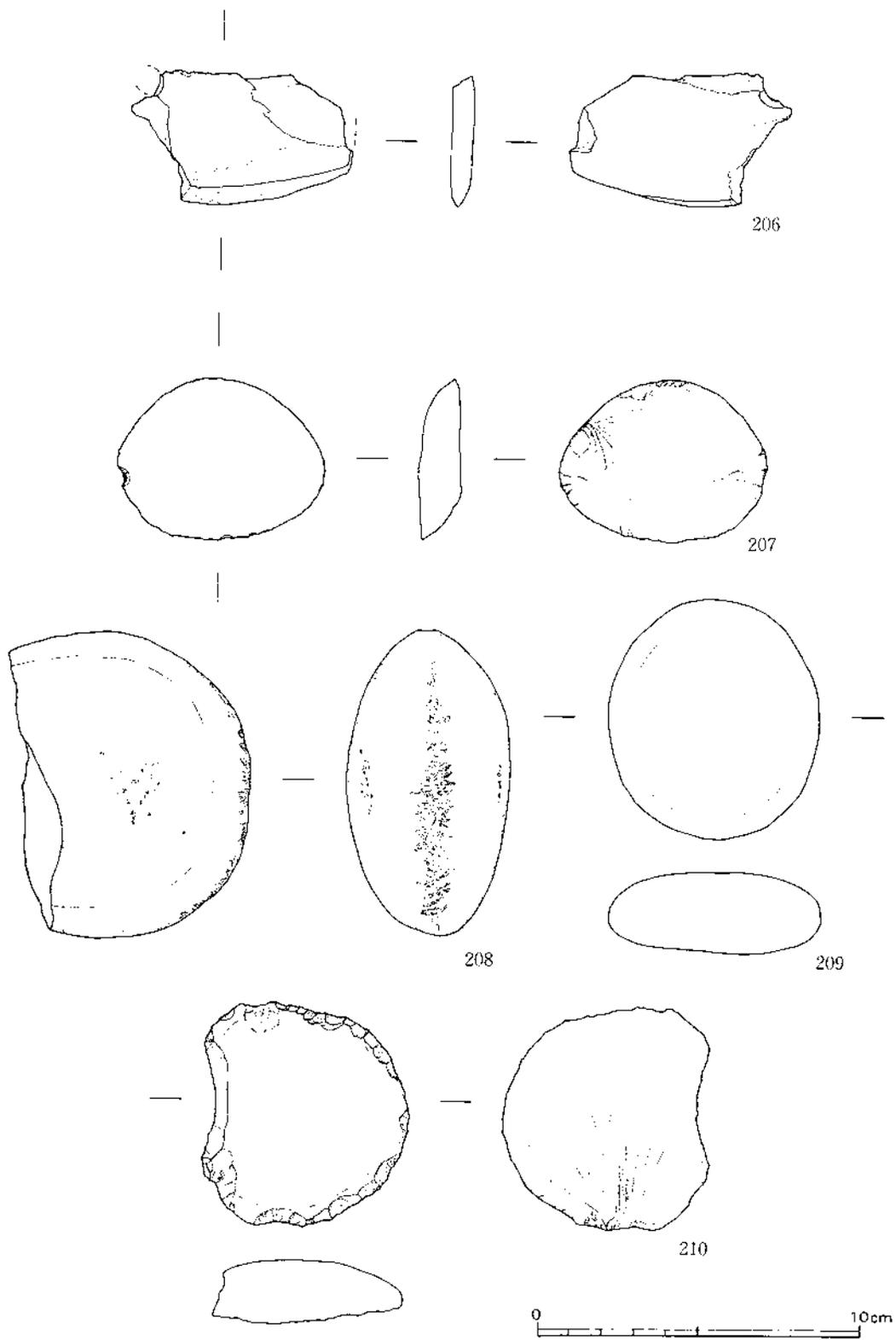


Fig. 37 1区包含層上層出土石器实测图

体は太い。中期Ⅰ期に属す。194は多条のヘラ描沈線帯を有し、中位に刺突を施した凹形浮文、沈線帯の上には双線の山形文を配す。195・196は甕口頸部である。口縁部内外はヨコナデ、頸部外面タテハケ、196は口唇を面取る。中期Ⅰ期に属する。197は長頸広口壺、198は短頸の広口壺、両者共頸部外面に多条のヘラ描沈線を施す。前期末に属する。199・201～203は広口壺である。199は口縁外面に粘土帯を貼付し指頭で押圧、口唇は強いヨコナデ、上下端に刻目を施す。201・202は口縁内面に扁平な刻目突帯を貼付、頸部外面はヘラ描沈線と扁平な刻目突帯を貼付する。203は口縁内面に櫛描簾状文と小孔列を配し、口唇は強いヨコナデを施し上下端

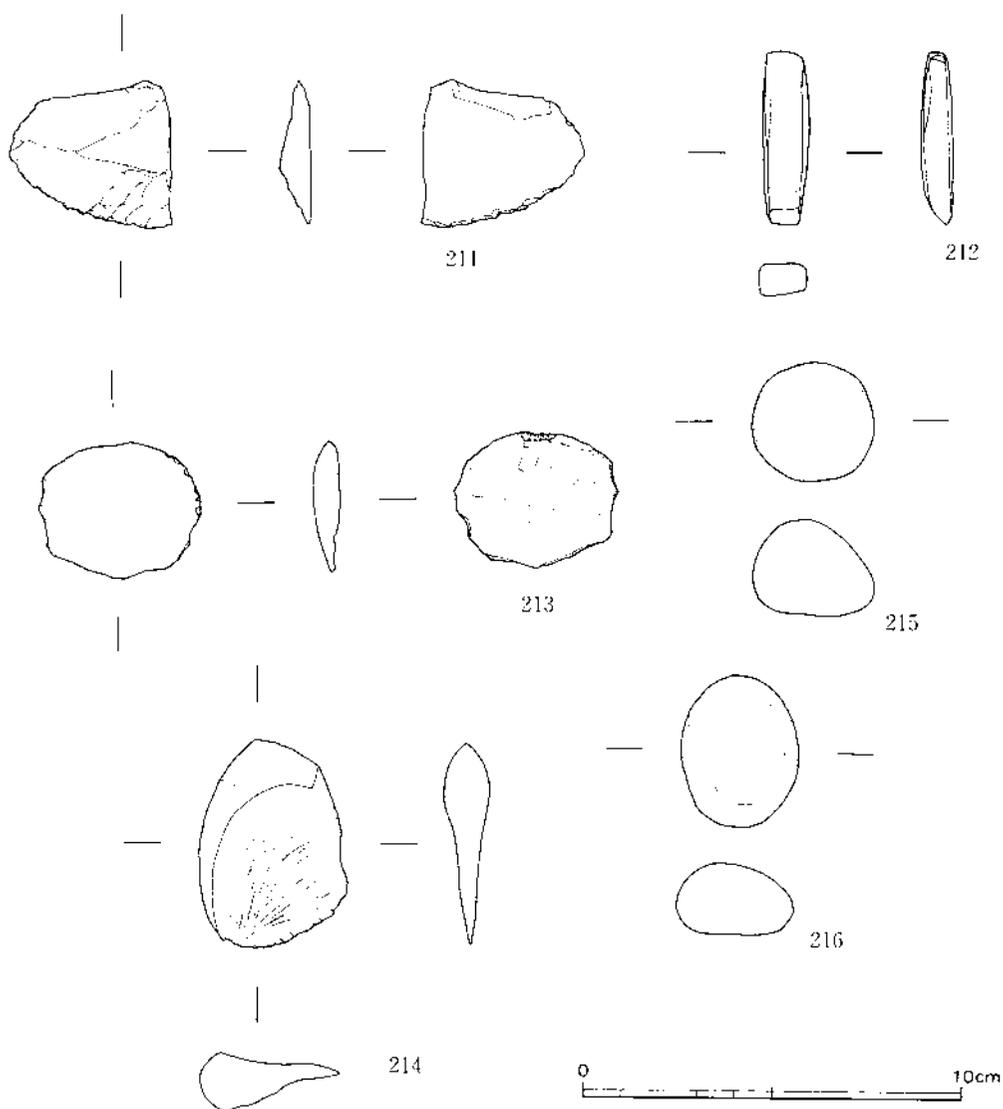


Fig. 38 1区包含層上層出土石器実測図

に刻目。201・202は前期末，203は中期Ⅰ期に属する。200は長頸広口壺である。頸部及び胴部外面に柳描直線帯+扁平な刻目突帯を貼付，胴部には柳描波状文も見られる。中期Ⅰ期に属する。204は紡錘車，205は土製円盤，共に土器転用である。

② 石器 (Fig. 37・38)

206は，石包丁である。外湾刃片刃，背部の形状は不明である。紐孔の一部が認められる。

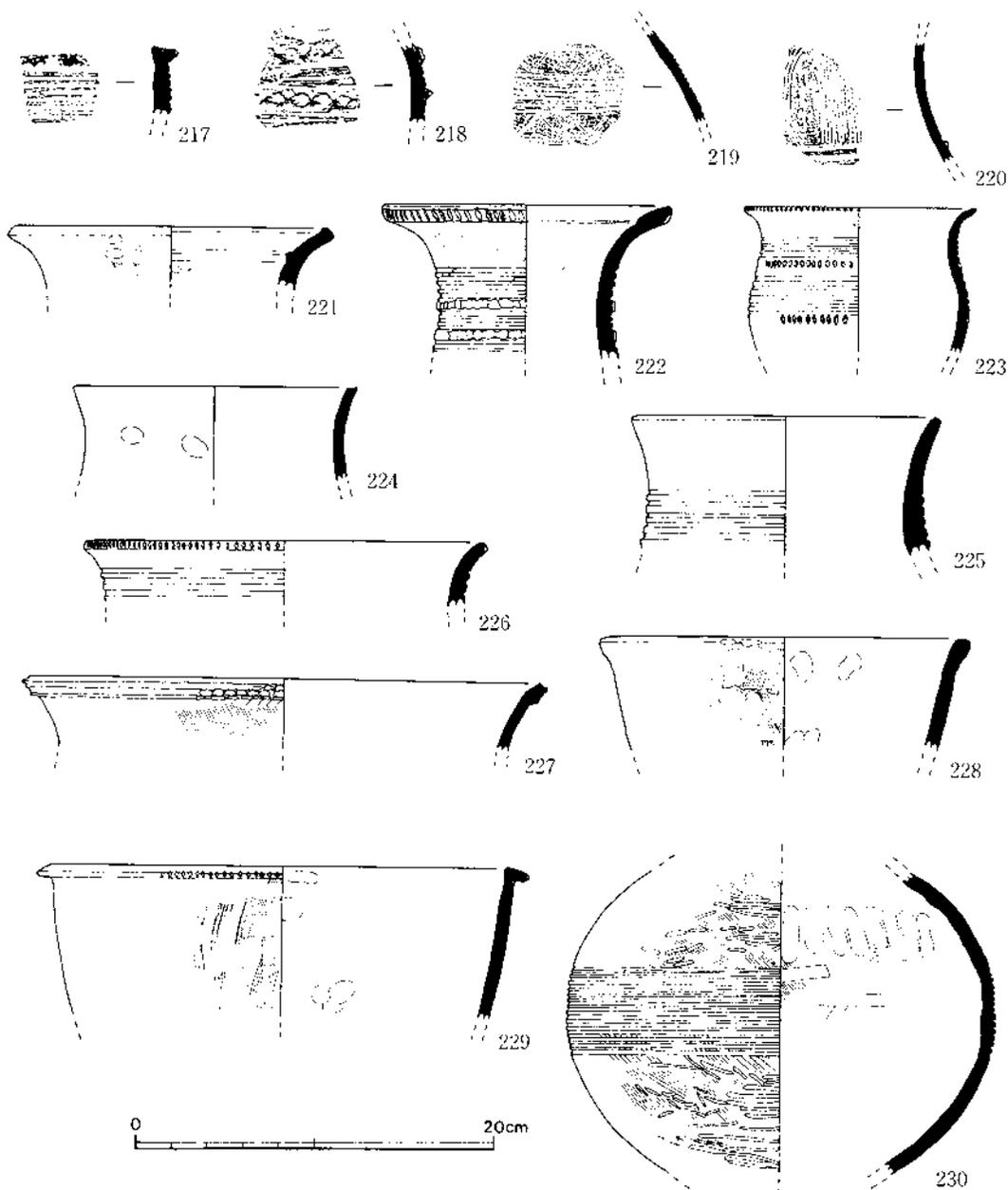


Fig. 39 1区包含層下層出土土器実測図

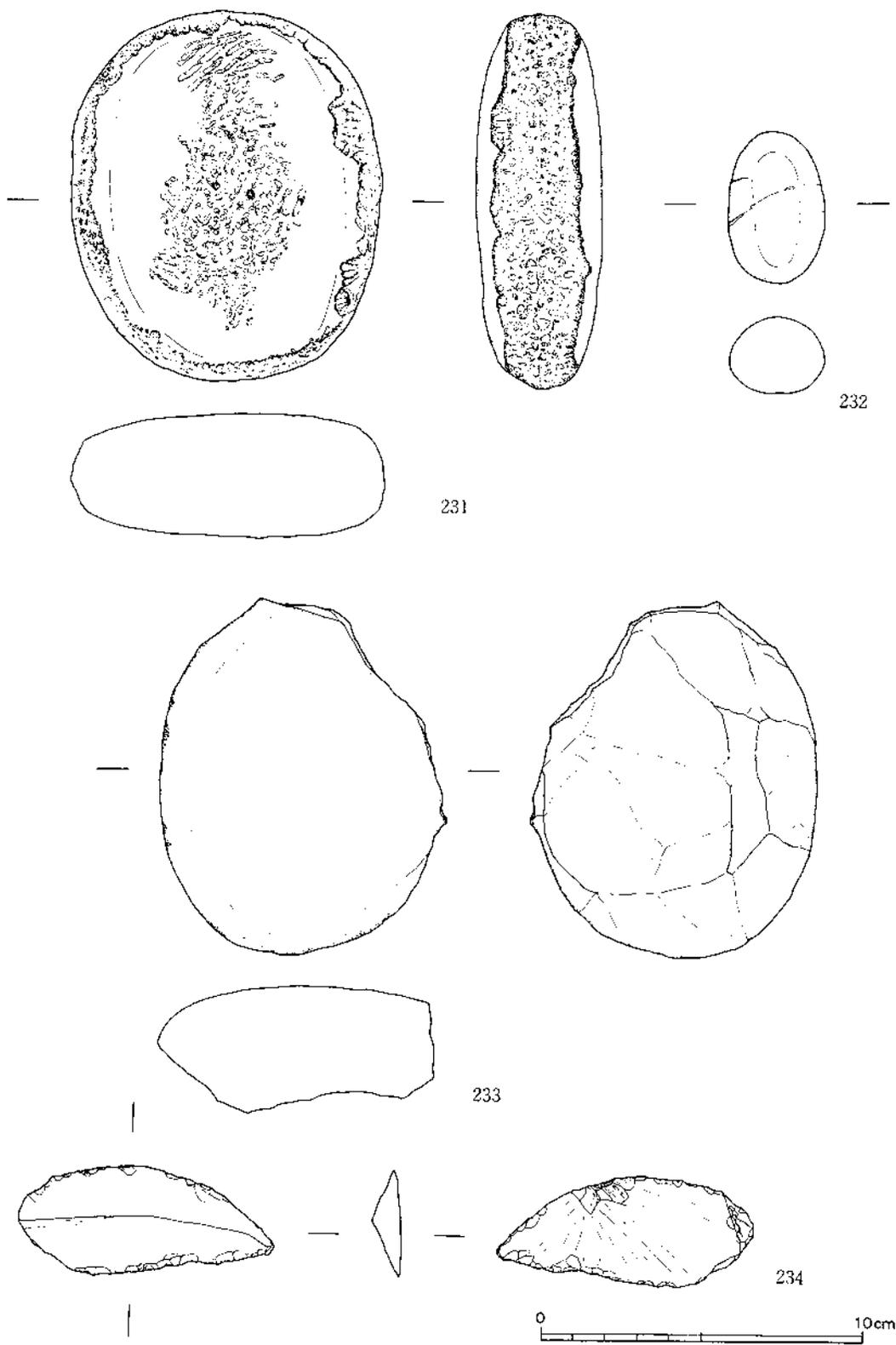


Fig. 40 1区包含層下層出土石器实测图

敲打によらない両面穿孔である。厚さ0.7cm, 頁岩製である。208・210は叩石である。208は河原石をそのまま利用したもので、縁部に顕著な使用痕が認められる。210は河原石を打割したものを利用し、縁部に顕著な使用痕が認められる。207・211・213・214は刃器と考えられる。211は一方の長側縁に刃部をつくり出している。サヌカイト製である。他は河原石の剥片を利用している。209・215・216は磨石である。209は200g, 215・216は30g前後である。共に砂岩の河原石を利用している。212はノミ状の加工斧である。刃部は片刃に研ぎ出しているが稜はあまり明瞭ではない。基部も湾曲気味、断面は長方形である。材は白色の堆積岩である。

(2) 1区下層の遺物

① 土器 (Fig. 39)

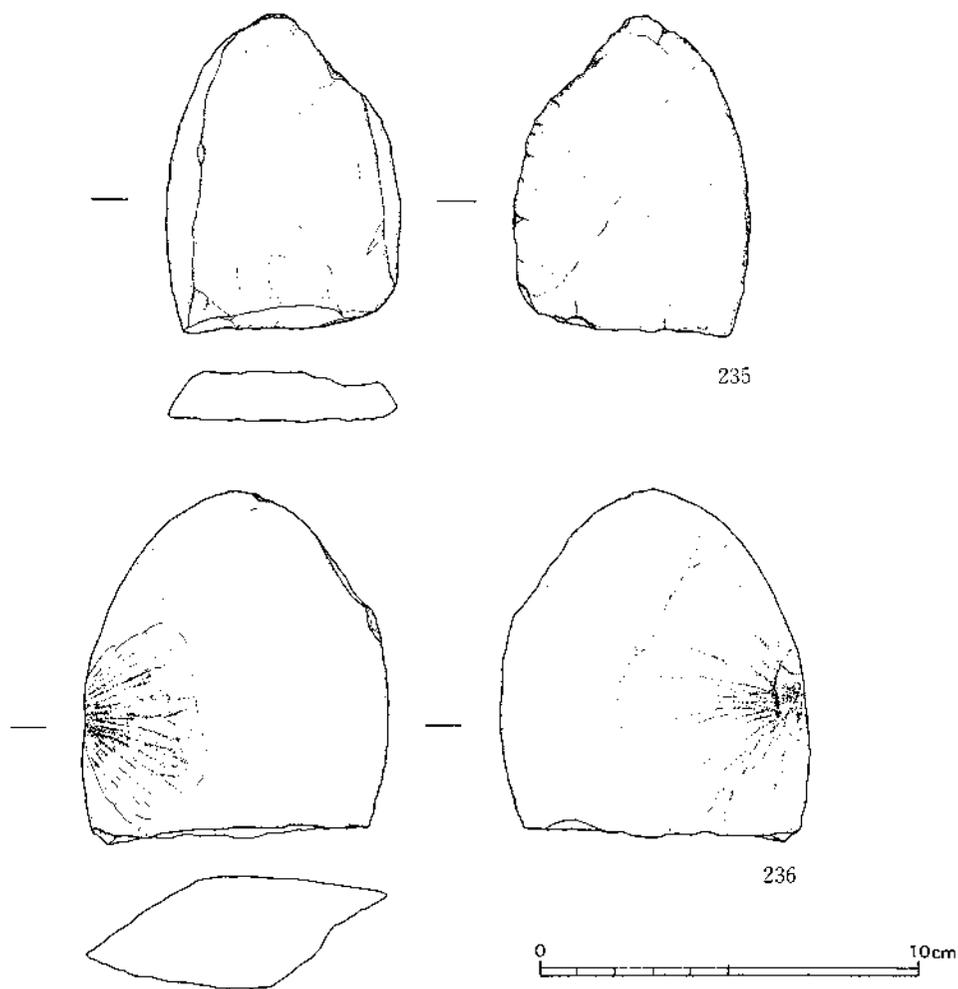


Fig. 41 1区包含層下層出土石器実測図

すべて前期末に属する。

218・219・230は壺胴部片である。共にヘラ描沈線を多様し、218は刻目突帯、219は双線による山形文を配す。221・225は広口壺で、221は口縁内面に三角形の突帯を2条貼付、225はヘラ描沈線帯を有す。222は長頸広口壺である。口縁部内面に扁平な突帯を貼付、口唇刻目、頸部には多条のヘラ描沈線と扁平な刻目突帯を貼付する。

217と229は逆L字口縁の甕で、217は上胴部に多条のヘラ描沈線を施す。226は如意状口縁の甕で上胴部にヘラ描沈線を配す。220・223・224・227は土佐型甕である。220は頸部外面に双線による弧文、頸胴部間に小突帯を貼付する。224は無文、227は口唇を強く横ナデし口縁外面に指頭で摘み出した小突帯を貼付している。223は胴部上半にヘラ描沈線を2帯配し、各々下端に列点文を施す。228は、甕か鉢である。

## ② 石器 (Fig. 40)

231は砂岩の円礫を利用した叩石で、正面及び側縁部に顕著な使用痕を認める。690gである。232は砂岩の磨石で49gを測る。234はサヌカイト製の刃器である。全長8.0cm、全幅3.3cm、全厚0.9cmを測る。石鎌状の形状を呈し断面は三角形、わずかに内湾する刃部は表裏から押圧剝離を加える。背部にも一部押圧剝離痕が見られる。233・235・236の用途は不明であるが、共に砂岩で前二者は被熱赤変している。

## ③ 木器 (Fig. 21-89)

椀状の木器である。柄部は欠損しているが残存長は37cmである。先端部は丸味を帯び、最大幅10cm、厚さ1.2cmを測る。材はアカガシ亜属である。

## (3) 2区上層の遺物

### ① 土器

#### a 壺 (Fig. 42-237-239, 241・242・244-254・256-259)

237-239・241・242・244・246・253・254・258は胴部である。239以外はヘラ描沈線を多様し、加えて刻目突帯・円形浮文・双線による山形文・河波状文を配している。242は耳状の突起を貼付し上下に小孔を穿ち、246は沈線帯下に刺突文を施している。239は双線で擬流水文を描いている。253は頸胴部間に刻目突帯を貼付し、その下に櫛描波状文を施している。245・247は長頸広口壺である。245は頸部外面にヘラ描沈線と扁平な刻目突帯文、247は口縁部内面に微隆起帯を2条貼付、頸部外面には多条のヘラ描沈線を施す。248は口縁内面に粘土帯を249は外面に粘土帯を貼付し、共に口唇に刻目を施す。250・252は頸部外面に多条のヘラ描沈線と扁平な刻目突帯を有す。後者は、口唇を強く横ナデし上下を刻む。口縁内面に扁平な突帯を貼付し押圧を加え、更に小孔を巡らす。251は、口唇に刻目、頸胴部間にヘラ描沈線帯を配す。256・257・259は底部である。

#### b 甕 (Fig. 42-240・243, Fig. 44-260-274)

240は頸部、243は上胴部細片である。240は、双線による垂下条線が顕著に見られる。243は

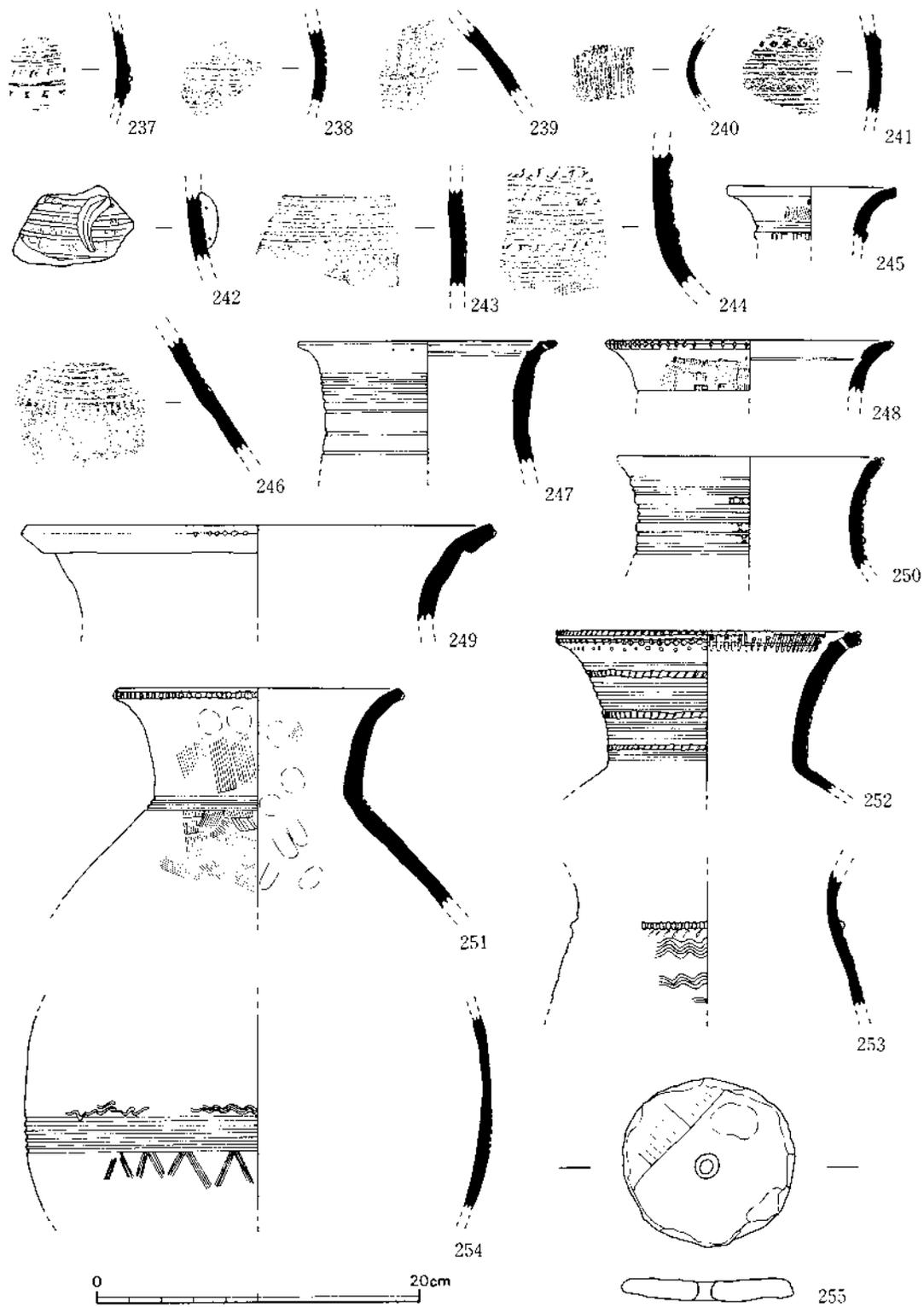


Fig. 42 2区包含層上層出土土器実測図

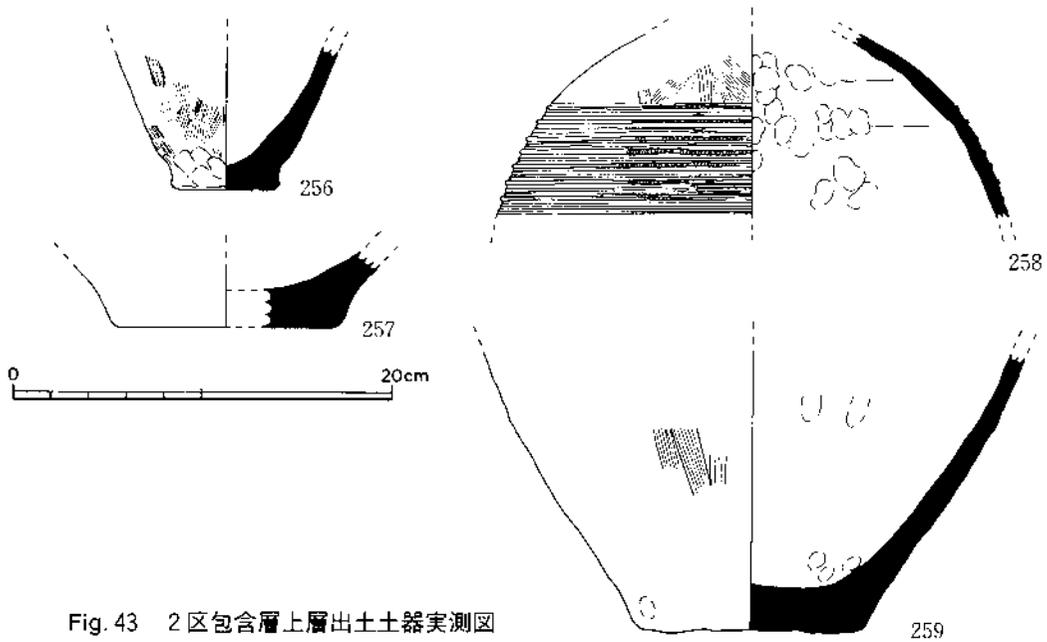


Fig. 43 2区包含層上層出土土器実測図

ヘラ描沈線帯の下に列点文を配している。260・261・263は口縁部に断面三角形の突帯を貼付し逆L字状口縁をなすが、後二者は鉢となる可能性もある。262は口縁部が短く屈曲、267・272は如意状口縁を有し、267は上胴部にヘラ描沈線帯を有す。

264～266・268・269・271・273・274は、土佐型甕に属する。264・268は口縁部外面に、265・271は口頸部間に小突帯を貼付し文様帯の上と下とでは器面調整が異なる。266・269・273・274は無文で共に口唇を強いヨコナデで面取っている。274の外面は荒いヨコナデ、口唇はこのタイプには珍しい刻が施されている。264・265は薄手土器である。275は底部である。270は逆L字状の口縁を呈するが鉢か甕か判断がつかない。

#### (4) 2区最下層 (XII層) 出土の遺物

##### ① 土器 (Fig. 45)

276は壺胴部細片で、多条のヘラ描沈線のうゑに3条の刻目突帯を貼付する。278～280は広口壺である。278は口縁内面に粘土帯を貼付、279は口縁内面に突帯をわらび手状に貼付している。280は頸部に4条のヘラ描沈線を配す。282は大型壺の頸部であり、多条のヘラ描沈線帯の下位に断面台形の太い刻目突帯を貼付、刻み部には布目状の圧痕が見られる。277は甕胴部で、ヘラ描沈線帯下に列点文を巡らす。281は蓋である。口縁端部は反り上がり口唇には刻目を配す。外面タテハケ、内面ヨコハケ調整を施す。283は壺、284は甕底部である。

##### ② 石器 (Fig. 46)

共に河原石 (砂岩) を利用した叩石である。285は半分が欠損している。両主面と縁部の一部に使用痕が認められる。286は縁部の一部に荒い敲打痕が見られる。

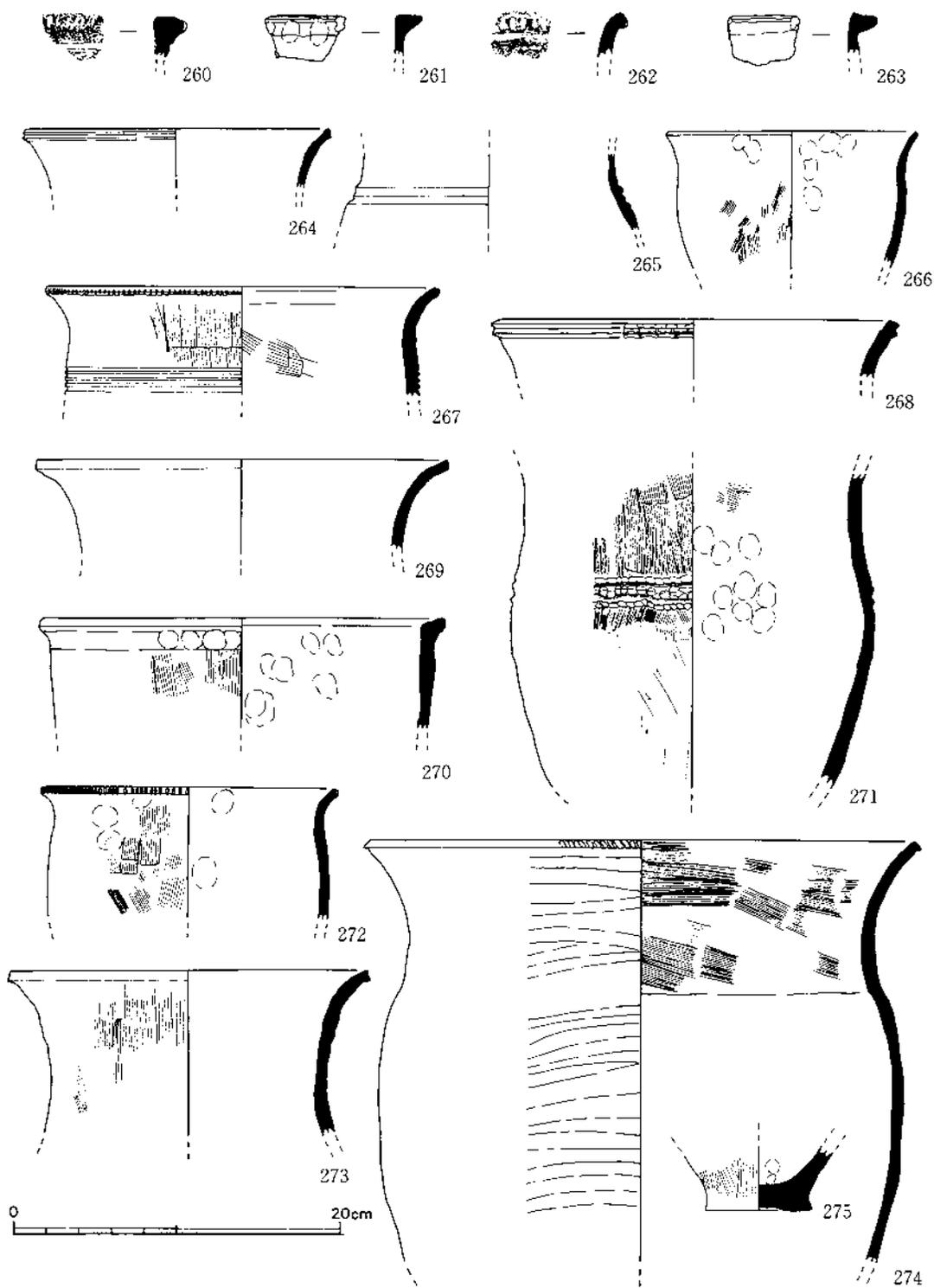


Fig. 44 2区包含層上層出土土器实测图

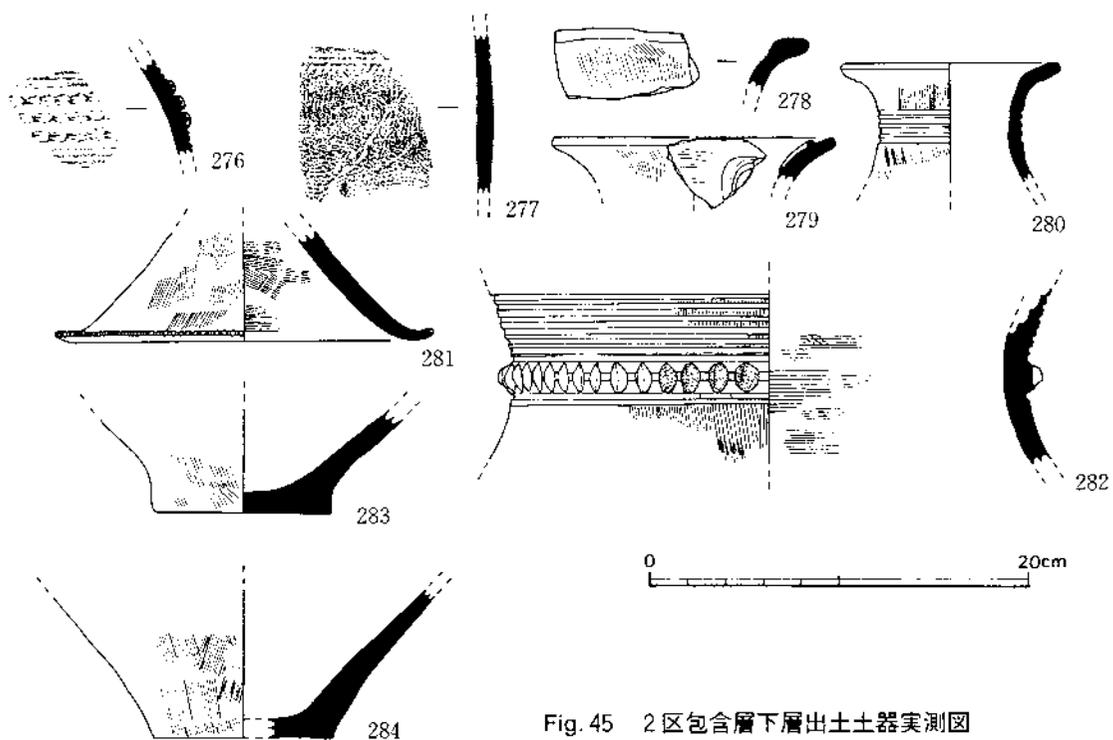


Fig. 45 2区包含層下層出土土器実測図

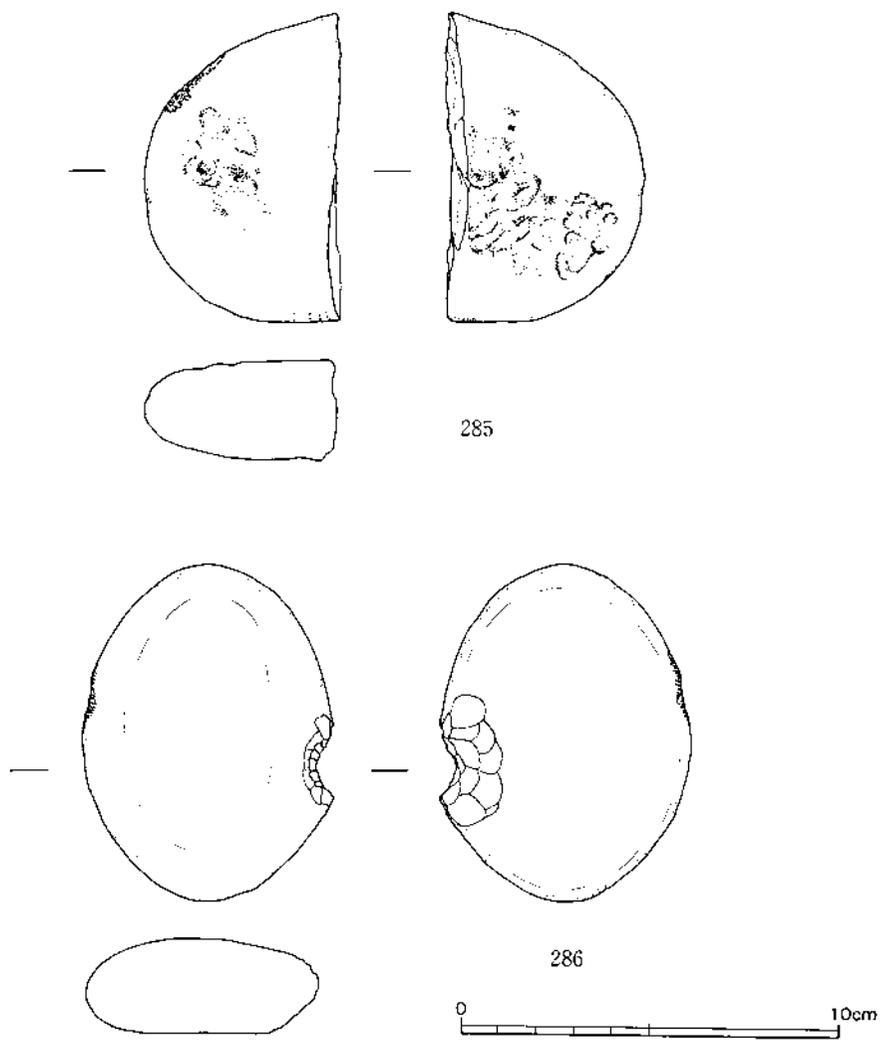


Fig. 46 2区包含層出土石器实测图

# 第IV章 考 察

## 1 土器

今次調査においては、弥生時代前期末から中期前半の土器が出土した。これは過去2回の調査と全く同じ結果であり、下分遠崎遺跡が前期末に成立し中期前半のうちに消滅する比較的短命な遺跡であることを益々証明するものである。以下前期末と中期とに分けて、型態分類を行い、過去の調査との比較検討なども行いながら諸特徴の把握に努めたい。

### (1) 前期土器

#### ① 分類

I区のVI・VII層、SK1、ユニット1～4出土土器及び2区XII層出土土器を対象として挙げる。

#### ② 壺

I類：遠賀川式土器の伝統を残す。(99)

II類：短頸広口壺。主として頸部に数条のヘラ描沈線を施す。

後述のIII数に比べて条数は少ない。(97・122・124・159・160・170・174・198)

III類：長頸広口壺。口縁部内外面や頸部外面に多条のヘラ描沈線、扁平な刻目突帯などの装飾を施す。口縁部の外反度が強いIII A類と比較的外反の弱いIII B類に分けることができる。

III A類：(96・115・117・119～121・221・222・248・251・278～280)

III B類：(116・225)

IV類：細頸広口壺。口縁部が強くと外反するIV A類と直口気味に立ち上がるIV B類とに分けることができる。IV A類は頸部にヘラ描沈線や扁平な刻目突帯を貼付して加飾する。

IV A類：(94・95・167・169)

IV B類：(118)

以上の他、図示し得なかった口縁部細片のうちII A、III類のいずれか判別できなかったものが31点ある。

#### ③ 甕

I類：いわゆる如意状に外反する口縁部を有するもの。(125～127・139・141・146・148・226・272)

器種	型 態	点数	%
壺	I 類	3	4.6
	II 類	8	12.3
	III A 類	15	23.1
	III B 類	2	0.31
	IV A 類	5	7.7
	IV B 類	1	1.5
	分類不可 能な細片	31	47.7
小 計		65	35.9
甕	I 類	25	22.3
	II 類	7	6.3
	III A 類	38	33.9
	III B 類	7	6.3
	III C 類	2	1.8
	III D 類	1	0.9
	III E 類	2	1.8
	IV 類	16	14.3
	V 類	12	10.7
	VI 類	1	0.9
VI 類	1	0.9	
小 計		112	61.9
鉢			0
	小 計	0	
蓋			4
	小 計	4	2.2
合 計		181	100.0

表1 土器分類及び組成比率表

I 類	II 類	III A 類	III B 類	III C 類	III D 類	III E 類	IV 類	V 類	VI 類	VII 類

表2 前期甕分類表

II類：やや膨らんだ上胴部から、口縁部に向かって外反する。III類とI類との中間タイプである。口唇部は丸くおさめ刻目を施す。(140・145・223)

III類：膨らんだ上胴部に、著しく発達した頸部が口縁部に向かって大きく外反する。上胴部径が口径を上回るものもある。口唇部を面取る。文様の有無、文様の種類によってIII A～III Eに分けることができる。

III A類：頸部に文様帯がないもの。(98・128・130・131・136・137・143・171・173・224・273・274)

III B類：頸部・上胴部に多條のヘラ描沈線を施すもの。(112・114・123・161・164)

III C類：上胴部に指頭による摘み出しで沈線状を呈するもの。(142)

III D類：頸部外面にタテ方向のヘラ描沈線を有するもの。(129)

III E類：口縁部・上胴部外面に小突帯を貼付するもの。(168・227)

IV類：III E類と類似した形態を有するが、胎土が全く異なり器壁も他のものに比べて薄手のもの。(109～111・113)

V類：いわゆる逆L字口縁を有するもの。(144・147・162・217・229・270)

VI類：口縁部を短く折り曲げるもの。(262)

VII類：口縁部がわずかに外反し直線的に伸びるもの。(228)

## ② 考察

前期包含層及び遺構・ユニット出土の器種は、壺・甕・蓋である。組成比は壺65点(35.9%)、甕112点(61.9%)、蓋4点(2.2%)である。鉢の出土が認められなかったが、前2回の調査では、少量出土している。今次調査においては、V層中から口縁部外面に断面三角形の突帯を貼付した大型鉢の口縁片が2点(261・263)出土している。高坏は前回の調査においても全く出土していない。器種組成の大半は壺と甕で占められており、その比率はおおよそ壺：甕が1：2である。この数値は1988年度調査(壺41点-31.5%、甕81点-62.3%)の数値ともほぼ一致する。当該期、当地域における器種組成の一般的傾向を示しているものと言えよう。これら前期末の土器は、高知県の土器編年に照応させれば岡本健児氏の大籬式土器、田村遺跡群の前期IVに比定することができる。当該期は、本県においても飛躍的に遺跡数が増加し、同時にそれまで<sup>(1)</sup>強固な斉一性を保って分布していた遠賀川式土器にかわって、地域色の濃厚な土器に<sup>(2)</sup>席卷されるようになる。当遺跡出土の土器においても、かかる様相が典型的に現れている。以下各器種毎に諸特徴について述べる。

壺は、遠賀川式の伝統をとどめるⅠ類は壺全体の中で3点(4.8%)に過ぎず、頸部が著しく発達したⅢ類が最も多くを占め、その中でも口縁部がラップ状に外反するⅢA類が最も多くを占めている。本類は、最も加飾されることが多い。頸部外面は、多条のヘラ描沈線や当該期に初めて出現する扁平な刻目突帯が貼付される。(115・121・222) この種の突帯は、一具引かれた沈線の中に突帯を埋め込むように貼付し、刻目は指頭でつまみ出したりヘラ状原体で押圧して施す。同種の突帯は口縁内面に施す例(120)も多い。当該期の瀬戸内や畿内で見られる断面三角形の刻目突帯も存在するが少数派である。ⅢA類には、中期前半に盛行を見せる口縁部外面に粘土帯を貼付する例が少なからず認められる。(119・120) 分類不可能とした31点の中にも8点がこの種の口縁部を有する。これまでは中期の指標とされてきた手法であったが、今次調査によって当該期から出現することが明らかとなった。口唇部の形態は丸味をもつもの(96・115・119・221・222・248・278・280)と横ナデにより面をなすもの(117・251・279)更に強いナデによって凹状を呈するもの(120・121)とがある。凹状の口唇部は中期前半の特徴であり、新しい要素として理解することができる。この他ⅢA類には、口縁内面に粘土帯を貼付した222・248・278なども見られる。胴部と統一的に把握できる資料が欠けているが、100～102のような球形、またはこれまでの例からして長胴の胴部を有するものが一般的で、扁平に発達した例はほとんど見られない。

Ⅱ類は8点(12.3%)でⅢ類に次いで多い。Ⅲ類に比べると加飾性に乏しく、160を除けばヘラ描沈線のみで、しかもその条数も少ない。口唇部も丸くおさめるものが多い。本類は総じて古い要素を持ち、中期へとは統かないタイプである。

Ⅳ類は6点(9.2%)と少数派であるが、当該期に初めて登場するタイプである。ⅣA類はⅡ類で見たと同様に口縁内面や頸部外面を加飾する。中期に続くタイプである。

筆者はかつて、ⅡA類の280やⅢ類に見られるような沈線條数の少ないもののみで構成された遺構出土の資料があることを根拠に、前期末でも古相に属する型式で構成された独立した一時期のあることを想定した。今次調査の出土状況はその想定を否定するものである。しかし今次調査の結果は、前期末という限定した期間の中にあっても、遺物包含層という一定の時間幅を考慮に入れなければならないものと考えられる。古相の一型式に普遍性があるか否か、今後調査例の増加をまって結論付けなければならないであろう。

次に甕について述べる。如意状口縁を有する遠賀川式土器が25点(22.3%)、頸部の発達が著しいⅢ類が50点(44.7%)、Ⅰ類とⅢ類の中間タイプのⅡ類が7点(6.3%)、薄手のⅣ類が16点(14.3%)、逆L口縁のⅤ類が12点(10.7%)、その他Ⅵ・Ⅶ類が各1点ずつである。地域色の濃厚なⅢ類が最も多く、次いで遠賀川式土器、それに逆L字口縁甕が続くという組成比は88年度の調査結果と同様である。当地域の甕のバリエーションの一般的傾向を示していると言えよう。

Ⅰ類は口唇を丸くおさめ例外なく刻目を有する。上胴部にはヘラ描沈線を有するものと有さ

ないものがあり、沈線数は最大7条まで(146)であり、多条のものに限って沈線帯下に刺突列点文が認められる。調整はハケを主体としヘラミガキは認められない。Ⅱ類も口唇を丸くおさめ刻目を施すが、上胴部の沈線は飛躍的に多条化し、沈線帯下には例外なく刺突列点文が配されている。

Ⅱ類は新しいタイプを指向した甕として位置付けられよう。最も多く占めるⅢ類は、文様などこれまでには見られなかった諸属性を有し、次に述べるⅣ類の強い影響下で成立展開するタイプである。瀬戸内・近畿各地においては、前期末頃から地域性の濃厚な甕が成立し遠賀川式時を払拭するに至るが、Ⅲ類はⅣ類と共に土佐の在地甕として位置付けることができるものである。

Ⅲ類は、143を除いてすべて口唇部を面取り、口唇への刻目は原則として施さない。文様には先述のようにBからEまでのバリエーションがある。口頸部内外面はハケ調整を基本とするが、胴部外面はナデや擦痕が見られる。胴部破片である1・134・138なども本類に属するものであるが、上胴部の文様帯を境に調整手法が異なるものが多いこともⅢ類の特徴である。

Ⅳ類は拗黒色、堅緻、器壁が薄いことを特徴とし、口縁外面や上胴部に各種の突帯を貼付し、基本的にナデ仕上げである。この出自を明らかにすることはできないが、高知平野よりも西部に多く出土することから、岡本健児氏は県西部に発生源を求めている。前期末に出現し中期を通して見られる甕が大半を占め、壺が少量見られるが鉢・高坏(18)・蓋は全く認められない。下分遠崎遺跡の過去の調査や田村遺跡群からは数パーセントの出土に過ぎなかったが、今次調査では14.3%を占めている。遺跡数が飛躍的に増加する時期に本類が出現し、本類の影響下にⅢ類が出現し、甕組成の6割以上を占めることは、弥生文化の浸透を考えるうえで注目しなければならない。

最後にⅤ類(19)について述べる。88年の調査では11.1%を占めており、今次結果と近似している。本類も当該期に新たに出現するものである。突帯はすべて口縁端部に貼付せられ、その断面形状は台形(147・217)と水平に伸びる鐮状のもの(144・162・229)などがある。端部にはほとんど刻目が付く。上胴部には沈線を施すものと施さないものがある。

## (2) 中期土器

中期の土器は1-2区ともにⅤ層から多く出土し、その他1区のS X 1、ユニット5、S D 3からも出土している。ここでは出土状況から一括性が高いと考えられるS D 3下層出土の土器について述べる。壺・甕・鉢からなり高坏は認められない。

壺は前期末のⅠ・Ⅱ類が消え、長頸広口壺(ⅢA類-65・67-69)が多く認められ、新たに口縁部を内外に肥厚させた長胴の86が加わる。今回は出土していないが広口細頸壺も存在するものと考えられる。長頸広口壺は、前期末のものとは比べ口唇部のヨコナデが強くなる点、施文原体がヘラから櫛に変わる点を除けば、他の諸属性はほとんど変化が認められない。S D 3下

層からはヘラ描沈線のものも一緒に出土しており、櫛描文出現直後の資料と考えられる。ヘラから櫛への変換は当地域においてもスムーズに移行していることが窺える。また一般的に初期の櫛描文は太く深いことが指摘されているが、本例（60・64・68など）もそのような傾向が認められる。この他施文様としては双線による弧文や区画文（61・62）、同斜格子文（63）、扁平な刻目突帯、口縁部の刺突文など前代を踏襲する手法で加飾されることが多い。

甕には大きな変化が認められる。すなわち前代まで存在していた如意形口縁甕、逆L字口縁甕が消滅し、「土佐型」甕（59・70・71・74）に統一される。同時に多条沈線が施されることはなくなり、沈線は僅かに1条（74）程度、薄手甕には少条の刻目突帯が貼付される。甕から文様が消える時期である。鉢（78）は厚い底部を有し、口唇部は壺と同様の特徴を有している。

以上述べたSD3下層出土の遺物は、岡本編年の田村式（畿内第Ⅱ様式併行）に属するが、その中でも古相を呈しており、より厳密には筆者の中期Ⅰ-1（同第Ⅱ様式前半併行）に位置付けることができる。当該期の一括性の高い資料は、極めて僅少であり今後の土器編年の指標となろう。中期Ⅰ-2期には、櫛描籐条文が登場するようになり、南四国の土器はより大きく捉えれば和泉地域で盛行を見せる櫛描籐条文地帯の中に包含される。逆L字口縁を有する瀬戸内型甕の消滅に照応した現象として理解することができよう。高知平野における遠賀川式土器の成立過程は、板付遺跡に見られるような状況とは異なり、環瀬戸内で生じた型式の移行を示している。以来前期を通して瀬戸内からの影響を受け続けて来たのである。瀬戸内型甕の消滅や瀬戸内では採用されることのなかった櫛描籐条文の出現に証明されるように、中期に至って瀬戸内とのこれまでのような関係に大きな転換が生じたことを物語っている。

## 2. 下分遠崎遺跡の位置付け

下分遠崎遺跡は、県道野市一線地線の南に展開する低地性の集落遺跡であり、15,000㎡の広がりを見込めることができる。すでに触れたように過去2回及び今次調査の結果、前期末から中期前半に営まれた比較的存続期間の短い遺跡として位置付けることができる。

下分遠崎遺跡は、1986年の調査で1,382㎡、88年の調査で410㎡の面積を調査している。竪穴住居址の検出には至っていないが、2回とも数多くの土坑や柱穴・溝を検出しており、88年の調査では掘立柱建物址4棟を確認している。柱穴には柱根が残っている例も多く、土坑や溝からは炭化米やドングリ・ヒョータン・メロンなどの植物遺体、イノシシ・シカなどの獣骨、更にカツオの腹椎骨も出土している。また農耕具・工具・祭祀具・狩猟具などの木製品は当時としては本県で初めての出土であり、当時の生業や精神生活を知る上で貴重な資料を提供している。

今次調査区からは遺構の検出は少なく、確実に弥生時代に属するものは土坑2基（SK1・2）と溝2条（SD1・2）及びピット2個のみである。今次調査区は当初、山側に近いことから、過去2回の調査区よりも遺構の存在密度が濃厚で、集落の中心部があるのではないかと

予想していた。しかし意に反して検出遺構は僅少であった。基本層序は過去2回の調査と同様であるが、遺構検出面は過去の調査に比べて20～30cmほど低く、旧地形は北に向かって緩傾斜していることが明らかとなった。したがってこのような調査結果から見て、集落の中心地は試掘Aトレンチから東に伸びる88年調査区（Fig. 2）の周辺に求めなければならない。

すでに何度も触れたように、下分遠崎遺跡は短命な遺跡であり、その消長の背景には如何なる原因が横たわっているのであろうか。廃絶後、周辺の平野部には集落遺跡は存在せず、的場遺跡や本村遺跡などのように丘陵上や山丘斜面に集落址が移動する。両遺跡は遠望の効く立地にはあるが、直ちに軍事的緊張関係を背景とする狭義の高地性集落と規定することはできない。集落立地の大きな転換について、木器生産による森林破壊との関係を考えている<sup>(12)</sup>。この消長の原因究明は本県における弥生社会の展開を考える上で大きな課題である。

弥生文化の創造的発展期として位置付けられている前期末、本県においても飛躍的な遺跡の増加が見られ、それまで高知平野では田村遺跡と西分増井遺跡<sup>(13)</sup>でしか確認できていなかった遺跡が、平野部は勿論のこと山間部にまで分布するようになる。これら新たに出現した遺跡は、先行する段階の遺跡がないこと、中期前半で終わる短命な遺跡が多いこと、規模が比較的小規模なことなどいくつかの共通点を持っている。そしてすでに述べたように、強固な斉一性を保った遠賀川式土器とは様相を異にした、極めて地域性の濃厚なまた繁縷なまでに加飾された土器を伴うのである。

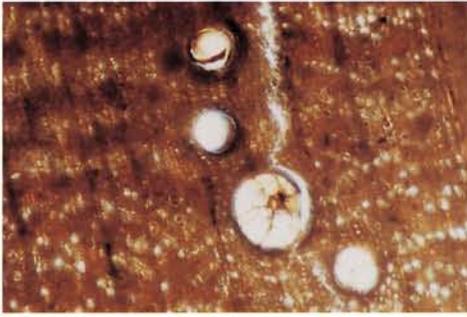
弥生文化の発展期に見られるかかる現象は、地域性が確立する中期の前提として位置付けなければならないと同時に、弥生文化発展期に認められる列島の内面的要因に起因した社会的表現として理解しなければならない。当該期の発展の背景には、青銅器の本格的な流入や製作に認められるように朝鮮半島からの大きなインパクトがあったことは勿論であるが、発展要因の諸側面の一つとして列島内に生じた要因についても、弥生文化の性格を規定した重要な要素として評価しなければならない。

## 註

- (1) 出原恵三・高橋啓明 1989年 『下分遠崎遺跡(1)』 香美郡香我美町教育委員会
- (2) 岡本健児 1968年 『高知県史』考古編 高知県
- (3) 出原恵三・角谷和男 1986年 『前期小結』「高知空港拡張整備事業に伴う田村遺跡群発掘調査報告書」第3分冊 高知県教育委員会
- (4) 出原恵三 1988年 『南四国における弥生中期土器の展開 編年と地域間交流』「遺跡」31号 遺跡刊行会
- (5) 出原恵三 1990年 『西分増井遺跡』 吾川郡春野町教育委員会
- (6) 註(1)の33頁 表-7では、遠賀川式土器（Ⅰ類）とⅡ類（今次分類のⅢ類）の組成比が共に43.2%となっているが、この時のⅠ類の中には、今次調査でⅡ類（中間タイプ）としたものが含まれている。
- (7) 出原恵三 1990年 『土佐型』甕の提唱とその意義』「遺跡」第32号 遺跡刊行会

- (8) 岡本健児 1984年 「中期弥生式土器」『高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書』 葉山村教育委員会
- (9) 出原恵三 1989年 「〈薄手土器〉の展開とその意義」『南国史談』第7号 南国史談会
- (10) 岡本健児 1970年 「南四国における橿日土器の成立」『高知女子大学紀要 人文・社会科学編』第18巻
- (11) 高橋護 1986年 「弥生文化のひろがり」『弥生文化の研究』9 雄山閣
- (12) 出原恵三 1993年 「下分遠崎遺跡(Ⅱ)」 香美郡香我美町教育委員会
- (13) 田辺昭三 佐原真 1966年 「弥生文化の発展と地域性 近畿」『日本の考古学』Ⅲ 弥生時代 河出書房

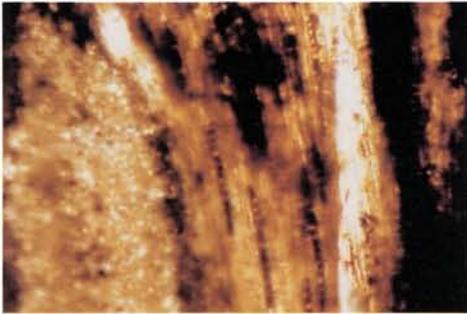
許諾手続き中



1. 木口 (20×)



2. 杵目 (20×)



3. 板目 (20×)

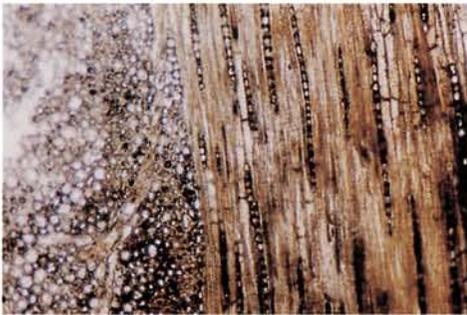
1, 2, 3, アカガシ亜属  
器種 着柄鋤



4. 木口 (20×)



5. 杵目 (20×)



6. 板目 (20×)

4, 5, 6, アカガシ亜属  
器種 矢板

Fig. 47 出土木製品顕微鏡写真

遺物観察表 (土器)

種別番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 8-1	■ 堀 (SK1の内側)	甕			結晶片岩・砂岩の小礫・粗粒砂を多く含む。灰褐色。 上胴部に3条の微起帯を貼付。文様帯の上と下で調整が全く異なる。上部はナデ。下は微起風の荒いナデ。外面煤ける。	
Fig. 8-2	SK1	◇		36.0	チャートの小礫を含む。浅黄褐色。 上胴部に6条のヘリ描沈線。頸部にもヘリ描沈線があったことが分る。 胴部外面は右下りのハケ。頸部外面ヨコナデナデハケ。頸部内面横筋のハケ。胴部内面はナデ。外面煤ける。	
Fig. 8-3	SK1周辺	◇		8.0	チャートの小礫を多く含む。褐灰色。 外面タテハケ。外底ミガキ。	
Fig. 8-4	◇	◇		9.2	チャート・砂岩の小礫を多く含む。灰褐色。 外面木目の荒い原体によるタテハケ。外面煤ける。	
Fig. 8-5	◇	◇		7.2	チャート・砂岩の小礫を多く含む。淡灰色。 外面木目の荒い原体によるタテハケ。器長の割増が激しい。 外面煤ける。	
Fig. 8-6	SK1	壺		7.6	チャートの細・粗粒砂を含む。外面灰白色。内面黒色。 外面タテ方向のミガキ。	
Fig. 8-7	◇	◇			チャートの小礫を多く含む。灰白色。 外面横方向のヘリミガキ。	
Fig. 12-8	SX1	鉢		5.8	精選された粘土。灰白色。底部付近に大きな黒斑あり。 底部は台形状につまみ出す。	
Fig. 12-9	◇	壺			チャート・風化礫の小礫・細・粗粒砂を含む。外面淡黄褐色。内面黒色。 胴部外面に断面三角の粘土帯を貼付。その上・下に楕圓波状文を施し。上には更に双線による山形文を配す。	
Fig. 12-10	◇	◇		29.4	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい褐色。 口縁外面に三角形の粘土帯を貼付。口唇部ナデ。上下端に太い刻目。 口縁部内面にハケ原体で山形文を配す。	
Fig. 12-11	◇	◇		25.8	チャートの粗粒砂を多く含む。橙褐色に発色するが、芯は黒色。 口唇は強いヨコナデ。上下に強い刻目。外面ハケ調整。	
Fig. 12-12	◇	◇		18.4	チャートの細粒砂を含む。灰茶色。 口縁部外面に粘土帯を貼付。外面に刻目。上胴部に小指山形浮文を貼付。 外面は激しく煤ける。外面はタテ方向のハケ。(ハケ調整後粘土帯を貼付)	
Fig. 12-13	◇	◇		12.3	チャートの小礫。粗粒細を多く含む。破損後に被熱赤変。	
Fig. 12-14	◇	◇		24.0	チャート。長石他の粗粒砂を多く含む。黄褐色。 口縁部外面に粘土帯を貼付。	
Fig. 14-15	SD1	甕		18.6	チャート。風化礫の小礫・粗粒砂を含む。淡黄色。 口唇部ヨコナデ。内面ヨコハケ。外面タテハケ。	
Fig. 14-16	◇	壺			チャートの小礫を含む。外面浅褐色。内面灰色。 上胴部に楕圓波状文を貼付し。その上を刻む。貼付文下に楕圓直線文(原体は5本の単位)1原体は左一右。土器は左廻り。外面タテハケ。	
Fig. 14-17	◇	甕			チャート・他の粗・細粒砂を多く含む。外面黒色。内面灰茶色。 上胴部に3条の小突起を貼付。頸部外面丁寧なナデ。胴部外面荒い楕圓状のナデ。	

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 14-18	SD1	壺	—	—	チャートの小礫・粗粒砂を含む。淡黄色。 — 上胴部に帯幅直線文。(原休は7本以上の単位) — —	
Fig. 14-19	〃	〃	—	—	チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい褐色。 — 上部部に断面三角形の粘土帯を貼付し、小孔を穿つ、中粒にて条からなる — ヘラ描洗線を配しその下に双線の弧文を施す。 — —	
Fig. 15-22	SD2	甕	—	—	チャートの小礫を含む。橙色。 — 口唇は丸くおさめ、下半に刻目。上胴部にヘラ描洗線1条。 — —	
Fig. 15-23	〃	壺	—	—	チャートの小礫、長石の細粗粒砂を含む。外面灰色、内面褐色。 — 扁平な粘土帯を3条、粘土帯間に帯幅波状線を配す、下部には断面三角の — 粘土帯を貼付。 — —	
Fig. 15-24	〃	〃	—	13.8	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。灰白色。 — 胴上半に、上から帯幅直線文1帯、同波状文1帯、突帯1条、帯幅波状文 — 1帯を施す。調整不明、下部部に大きな黒斑あり。 — —	
Fig. 15-25	〃	鉢	15.0	—	チャートの小礫・粗粒砂を含む。淡褐色。 — 口唇面取り。口縁下に焼成前の小孔を穿つ。内面ナデ、外面ハケ調整か、 — —	
Fig. 15-26	〃	甕	12.0	14.0	チャート、砂岩の小礫・粗粒砂を含む。灰褐色。 — 外面は水平の彫き、口縁部叩き出し。肩部は尖り気味、上腹部に接合痕を — 認む。外面煤ける。 — —	
Fig. 15-27	〃	〃	—	6.8	チャート・砂岩の小礫を含む。外面灰色、内面黒色。 — 外面タテハケ調整。 — —	
Fig. 15-28	〃	鉢	—	4.2	チャート・砂岩の細・粗粒砂を含む。灰黄色。 — 内・外面ナデ調整。外面煤ける。 — —	
Fig. 15-29	〃	壺	—	6.2	チャート、頁岩の小礫。淡茶灰色。 — 調整不明。底部付近に小黒斑あり。 — —	
Fig. 17-30	SD3 上層	〃	—	—	チャート・頁岩の砂粒。外面橙色、内面灰色。 — 小突部の上にヘラ描洗線2条、下に双線による山形文を重複させて施す。 — その下に双線による洗線文。 — —	
Fig. 17-31	〃	〃	—	—	チャートの細・粗粒砂。黄褐色。 — 頸部下端に刺突文。上胴部に帯幅波状文と同隣文を配す。 — —	
Fig. 17-32	〃	〃	—	—	角閃石、長石の粗粒砂を含む。外面灰茶色、内面黒色。 — 頸部下端に帯幅波状文2帯(細い原休)、その下に円形浮文を貼付し、刺 — 突文を施す。内面にしほり目あり。 — —	搬入品の可 能性大
Fig. 17-33	〃	〃	—	—	チャート・砂岩の粗粒砂。灰色。 — 外面多条洗線を配し、3本間隔で扁平な粘土帯を貼付し知む。粘土帯の下 — に洗線あり。 — —	
Fig. 17-34	〃	〃	—	—	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。淡褐色。 — 頸部外面にヘラ描洗線4条まで認む。二次的な火を受けている。 — —	
Fig. 17-35	〃	〃	—	—	チャート・風化礫の小礫・粗粒砂を多く含む。黄色。 — 刺突文、帯幅波状文を配す。 — —	
Fig. 17-36	〃	〃	—	—	チャート、風化礫の小礫・粗粒砂。灰褐色。 — 帯幅波状文を1帯まで認む。 — —	

遺物観察表 (土器)

挿入番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備考 (分類)
Fig. 17-37	SDD 土層	壺	— — — —	— — — —	チャート・砂岩の小礫・赭白色。 — 多条沈線帯の上に扁平な粘土帯を4条貼付し、刻む。 — 外面ハケ調整。二次的な火を受ける。	
Fig. 17-38	〃	〃	— — — —	— — — —	砂粒をほとんど含まない。灰色。 — 外面にヘラ描沈線を4条まで認める。外面煤ける。	
Fig. 17-39	〃	〃	— — — —	— — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。灰白色。 — 口縁部外面に粘土帯を貼付。外縁に1cm間隔で小孔を穿つ。内面に扁平な — 粘土帯を貼付し、刻む。	
Fig. 17-40	〃	甕	— — — —	— — — —	石英・チャートの細粒砂を含む。灰褐色。上胴部と小突帯を貼付し、つま — む。頸部外面ヨコナデ。煤ける。	
Fig. 17-41	〃	〃	— — — —	— — — —	チャートの小礫・粗粒砂を含む。暗灰色。 — 上胴部に3条の小突帯を貼付しつまむ。内・外面煤ける。	
Fig. 17-42	〃	壺	— — — —	— — — —	チャート、他の礫・粗粒砂を含む。外面茶灰色。内面灰色。 — 口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付し、ヘラ状原体で刻む。その下に小突帯 — を貼付。ハケ状原体で刻む。内外面ナデ調整。	
Fig. 17-43	〃	甕	— — — —	— — — —	チャートの粗粒砂を含む。黄褐色。 — 上胴部に3条の小突帯を貼付し、つまむ。内・外面煤ける。外面ナデ調整。	
Fig. 17-44	〃	〃	— — — —	— — — —	チャート・風化礫の小礫・粗粒砂を多く含む。淡黄色。 — 上胴部に3条のヘラ描沈線。頸部外面タテハケ。胴部外面ナデ。	
Fig. 17-45	〃	壺	— — — —	— — — —	チャート・砂岩、風化礫の小礫を多く含む。外面桃色。内面黒色 — 頸部に5条までヘラ描沈線を認める。二次的な火を受ける。	
Fig. 17-46	〃	〃	15.7 — — —	— — — —	チャート、風化砂岩の粗粒砂を含む。シャーロットを含む。黄白色。 — 口唇部ヨコナデ。上・下に刻目。頸部外面ヨコナデ。	
Fig. 17-47	〃	〃	17.6 — — —	— — — —	チャートの小礫粗粒砂を含む。淡茶色。 — 口縁部外面に粘土帯を貼付。口唇部ヨコナデ。上・下刻目。	
Fig. 17-48	〃	〃	21.2 — — —	— — — —	チャートの小礫・粗粒砂を含む。黄灰色。 — 口唇部外面にヨコナデ。口縁内面に扁平な粘土帯を3条貼付し、ハケ状原 — 体で刻む。頸部外面タテ方向のハケ。内面右下りのハケ調整。	
Fig. 17-49	〃	甕	27.0 — — —	— — — —	チャート、風化礫の粗粒砂を多く含む。淡黄色。 — 口唇部ヨコナデ。口唇下半に刻目。頸部外面タテハケ。内面ヨコハケ。	
Fig. 17-50	〃	〃	18.4 — — —	— — — —	細・粗粒砂を多く含む。褐灰色。 — 口縁外面に扁平な粘土帯を貼付。沈線を配した後、ヘラ状原体で刻む。 — 内・外面煤け。口縁内面には炭化物が広く付着。	
Fig. 17-51	〃	壺	20.2 — — —	— — — —	チャートの小礫・粗粒砂を含む。淡黄灰色。 — 口唇部ヨコナデ。上・下に刻目。内・外面ヨコナデ。	
Fig. 17-52	〃	〃	— — — —	— — — —	チャート砂岩の小礫を多く含む。淡褐色。 — 頸部に10条のヘラ描沈線を配し、その間に刺突列点文を3帯配す。	
Fig. 17-53	〃	〃	— — 28.0 —	— — — —	チャート・砂岩の小礫を多く含む。淡黄白色。 — 胴部下半に最大径を有す。最大径付近にヘラ描沈線5条。その上に双線に — による斜格子文。更に上位に管状原体による刺突文。	

遺物観察表 (土器)

種別番号	出土地点	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 18-54	SD3 上層	甕	26.8 — — —	チャート・砂岩の小礫を含む。淡黄白色。 口縁部外面は粘土帯を貼付し、指頭で押付、口唇面取る。頸部外面タテハケ。	
Fig. 18-55	〃	釜	18.6 — — —	チャートの小礫を多く含む。桃褐色。 口唇は強いヨコナデ、端部が上に肥厚気味、内外面煤ける。	
Fig. 18-56	SD3 下層	鉢	— — 5.6 —	チャート・砂岩の粗粒砂を多く含む。 駝い底部、外面は被熱赤変し、内面は全面煤が付着、外面は2次的な加熱によるものと思われる。	
Fig. 18-57	SD3 上層	壺	— — — 10.0	チャートの小礫を多く含む。外面灰白色、内面橙色。 外面ハケ調整。2次的な火を受けている。	
Fig. 18-58	〃	〃	— — — 10.2	チャートの小礫を多く含む。淡灰白色。 駝い底部。外面は明るいナデ、内面ハケ調整。2次的な火を受ける。	
Fig. 19-59	SD3 下層	甕	— — — —	チャートの小礫を多く含む。淡灰褐色。 口唇部面取り。口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面タテハケ。外面全面煤ける。	
Fig. 19-60	〃	壺	— — — —	チャートの小礫、粗粒砂を含む。内面茶色、外面黒色。 柵縞直線文。外面は黒色顔料塗付か。	
Fig. 19-61	〃	〃	— — — —	チャートの小礫を多く含む。黄褐色。7条からなるヘラ柵縞線帯、その上下に双線による弧文・区画文を配す。	
Fig. 19-62	〃	〃	— — — —	チャート・砂岩の小礫を含む。外面あせた茶色、内面灰黒色。 沈線帯の間に、双線による弧文・区画文。	
Fig. 19-63	〃	〃	— — — —	風化礫の砂粒を多く含む。外面黄褐色、内面灰色。 断面三角形の粘土帯を貼付し、小孔を貫通させる。その下に双線による斜格子文を配す。	
Fig. 19-64	〃	〃	— — — —	チャートの小礫を多く含む。灰色。 6-7条を単位とする柵縞直線文を1条配し、その下に双線による山形文を施す。外面は煤け、赤変。	
Fig. 19-65	SD3 上層	〃	12.2 — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。外面橙色、内面暗灰色。 口唇はヨコナデ、上下にしっかりした刻目。2次的に被熱赤変。	
Fig. 19-66	SD3 下層	〃	— — — —	チャート・砂岩の小礫を多く含む。灰白色。 頸部外面に多条沈線帯を配し、その上に扁平な粘土帯を貼付、指頭でつまむ。 外面黒色顔料を塗付か。	
Fig. 19-67	〃	〃	18.3 — — —	チャート、砂岩の粗粒砂を含む。暗茶色。 口唇部ヨコナデ、下端に細かい刻目。頸部に柵縞直線文を配し、その上に扁平な粘土帯を貼付し、指頭でつまむ。口縁部外面ヨコハケ。頸部外面タテハケ。 内・外面煤ける。	
Fig. 19-68	〃	〃	20.0 — — —	チャート・砂岩の小礫を多く含む。黄褐色。 口唇部ヨコナデ、上下に刻目。頸部外面柵縞直線文帯を配しその間に扁平な粘土帯を貼付し、刻む。口縁内面にも同様な粘土帯を貼付し、ハケ状原体で刻む。口縁内面より外面に向けて8個を単位とする小孔を穿つ。内面ヨコハケ、外面タテハケ。口縁部内外面ヨコナデ。	
Fig. 19-69	〃	甕	15.6 — — —	チャート・砂岩の小礫を多く含む。淡黄褐色。 口唇部ヨコナデ、上端刻む。上胴部と断面三角の突帯を2条貼付。 頸部外面タテハケ、内面ヨコハケ。口縁部内外面ヨコナデ。 外面全面及び口縁部内面全面激しく煤ける。	

遺物観察表 (土器)

挿図番号	出土地点	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 19-70	SD3 下層	甕	19.6 — — —	チャートの小礫。長石・雲母細粒砂を含む。灰色。 口唇部面取り、口縁部は内・外から指頭でおさえる。頸部下端にヘラ描沈 線を1条認める。外面タテハケ、口縁内面ヨコハケ。	
Fig. 19-71	〃	〃	24.4 — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。外面淡茶色、内面黒色。 口縁部外面に断面三角形の刻目突帯。上胴部に小突帯を貼付し、竹筴状原 体で組む。内・外面ナデ調整。	
Fig. 19-72	〃	壺	23.4 — — —	チャートの小礫を多く含む。淡黄白色。 口縁内面に粘土帯を貼付し、口唇部に1条の沈線を配し、上下に刻目を施す。 内面ヨコハケ、外面左下りのハケ調整。2次的に火を受ける。	
Fig. 19-73	〃	〃	— — — —	チャートの粗粒を多く含む。茶灰色。 頸部にヘラによる多条沈線。胴部外面ハケナデ調整。胴部断面の2ヶ所 に接合部を認める。(約3cmの粘土帯)	
Fig. 19-74	〃	甕	18.4 — 17.3 — —	チャート、砂岩の小礫・粗粒砂を含む。淡褐色。 口唇部ヨコナデ、口縁部を内・外から指頭でつまむ。頸部領域にわずかな 段が生じる。そこを境に調整が異なる。頸部外面タテハケ、胴部外面荒 いナデ、胴部中央から上は、全面に激しく煤ける。下半は、被熱赤変が顕 著。 内面指頭によるナデ、圧痕が顕著。	上・下層及 び床面出土 が母体合
Fig. 19-75	〃	壺	— — — —	チャート・砂岩の小礫を多く含む。灰黄色。 ヘラによる多条沈線を施し、2条の扁平な粘土帯を貼付し、指頭でつまむ。 外面タテハケ、内面ヨコハケ+ヘラミガキ。	
Fig. 20-76	SD3 床面	〃	— — — 7.2	チャートの小礫を多く含む。灰黄色。 厚い底部。	
Fig. 20-77	SD3 下層	甕	— — — 5.6	チャートの粗粒砂を多く含む。灰褐色。 厚い底部。内外面被熱赤変。内面には炭化物が付着。	
Fig. 20-78	〃	鉢	14.4 9.5 — 5.6	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。淡褐色。 口唇部ヨコナデ、上・下に刻目。厚い底部。底部脇、内面に指頭圧痕顕著。 外面右下りのハケ調整。外面黒色顔料塗付。	
Fig. 20-79	〃	甕	— — — 5.8	チャート・砂岩の小礫を多く含む。暗灰色。 内・外面煤け、調整不明。	
Fig. 20-80	〃	〃	— — — 8.8	チャートの小礫を多く含む。灰白色。底部調縁に指頭圧痕顕著。2次的な 火を受けている。	
Fig. 20-81	〃	壺	— — — 9.0	チャートの小礫を多く含む。灰黄色。外面の器表完全に剥離。	
Fig. 20-82	〃	〃	— — — 6.0	チャートの小礫を多く含む。黄灰色。底部内面に瘤状の突起あり。外面ヘ ラミガキ。	
Fig. 20-83	〃	甕	— — — 7.0	砂岩・チャートの小礫。灰茶色。 内・外面煤け、外面は被熱赤色。	
Fig. 20-84	〃	壺	— — — 7.0	砂岩・チャートの小礫を多く含む。暗灰色。 外面ハケ調整。外面煤ける。	
Fig. 20-85	〃	〃	— — — —	チャートの小礫、粗粒砂を含む。灰褐色。 外面ハケ+ヘラミガキ、内面ハケ+ナデ調整。 下胴部に大きな黒斑あり。	

遺物観察表 (土器)

標記番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 20-86	SD3 下層及び 床面出土	壺	— — — —	29.0 96.0 66.0 (20.0)	チャートの小礫を多く含む。桃褐色。 底部のみ接合部から剥離欠損。最大径を胴部下半に有す。口唇はわずかに 凹状を有する幅広い面をなし、両端に拡張し刻目を施す。外面ハケ+ヘラ ミガキ、内面は指頭によるナデ。胴部中位内面には、粘土帯の接合痕が認 められる(5~6cm)。接合部は指頭による押圧が顕著。頸部外面にヘラ による右下りの沈線帯が描かれる。	
Fig. 23-92	ユノット1	〃	— — — —	— — — —	チャートの小礫、粗粒砂を含む。外面淡褐色、内面黒色。 5条を1帯とするヘラ描沈線帯を2帯まで認む。右下りのハケ調整。 外面は煤ける。	
Fig. 23-93	〃	〃	— — — —	— — — —	チャートの砂粒を含む。淡黄色。 2~3条を単位とするヘラ描沈線帯間に、楕円形の押し文帯を配す。赤彩。	
Fig. 23-94	〃	〃	— — — —	— — — —	チャートの小礫を多く含む。桃褐色。ヘラによる双条沈線帯に扁平な粘土 帯を貼付し、刻目を施す。外向タテハケ、内面ナデ調整。外面煤ける。胴 部とは接合部で剥離。	
Fig. 23-95	〃	〃	— — — —	— — — —	チャートの小礫を多く含む。外面褐色、内面黒色。 上胴部から頸部にヘラ描沈線帯を配し、頸部下端に扁平な粘土帯を貼付し、 指頭で押圧、刻目状を呈す。外面タテハケ調整。	
Fig. 23-96	〃	〃	— — — —	15.0 — — —	チャートの小礫を含む。黒色。 口唇部面取り、上端に細い刻目。口縁部に小孔が1孔認められる。 外面タテハケ調整。強い熱を受け一部凹面状を呈す。	(ⅡA類)
Fig. 23-97	〃	〃	— — — —	14.6 — — —	チャート・砂岩の小礫を多く含む。灰褐色。 口唇は丸くおさめる。外面タテハケ、内面ヨコハケ調整。全面煤け、一部 被熱赤変。	(Ⅱ類)
Fig. 23-98	〃	甕	— — — —	19.6 — — —	チャートの小礫を多く含む。 外面タテハケ+ナデ調整。内面ヨコハケ調整。 外面は全面煤け、一部炭化物が貼り付着。	(ⅢA類)
Fig. 23-99	〃	点	— — — —	34.0 — — —	チャートの小礫を多く含む。黄褐色。 口頸部にヘラ描沈線1条。口縁部断面に、粘土組の接合部を認める。 口縁部内・外面ヨコナデ、以下タテハケ調整。全面煤け、一部被熱赤変。	(Ⅰ類)
Fig. 23-100	〃	〃	— — — —	— — 24.6 —	チャートの小礫を含む。暗灰色。 5条と4条を単位とするヘラ描沈線帯を4帯配す。赤彩。 右下りのハケ調整。	
Fig. 23-101	〃	〃	— — — —	— — 24.4 —	チャートの小礫を多く含む。暗灰色。5条と6条を単位とするヘラ描沈線 帯を3帯まで認める。 右下りを基調とするハケ調整。	
Fig. 23-102	〃	〃	— — — —	— — 29.6 —	チャートの小礫を多く含む。黒灰色。 5条を1単位とするヘラ描沈線帯を3帯まで認める。中央の沈線帯上に一 対の楕円形赤文。煤ける。	
Fig. 23-103	〃	甕	— — — —	— — 8.0 —	チャート・砂岩の粗粒砂。暗灰色。器壁がうすい。外底に木製圧痕。2次 的な火を受ける。	
Fig. 23-104	〃	〃	— — — —	— — 8.2 —	チャート、結晶片岩の粗粒砂を多く含む。外面黒色、内面灰白色。 内・外面広いナデ調整。2次的な火を受ける。	
Fig. 23-105	〃	釜	— — — —	27.6 — — —	チャートの小礫を多く含む。暗灰色。 口縁部面取り、外面広い、無雑作なハケ調整。口縁内縁に煤が付着。	
Fig. 23-106	〃	甕	— — — —	— — 7.0 —	チャートの小礫を多く含む。黄褐色。 外面ハケ調整後に、指頭によるタテ方向の強いナデ。内・外面煤け、外面 は被熱赤変。	
Fig. 23-107	〃	点	— — — —	— — 9.2 —	チャートの小礫を多く含む。灰白色。 外面擦痕状のナデ調整。内・外面煤ける。	

遺物観察表 (土器)

挿図番号	出土地点	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	特 徴	備考 (分類)
Fig. 23-108	ユニット1	甕	— — — 7.0	チャートの小礫を多く含む。外面桃褐色、内面暗褐色。 外面タテ方向のハケが部分的に認められる。外面は、激しく熱を受け赤く変色。	
Fig. 24-109	〃	〃	17.4 — — —	砂岩の小礫を多く含む。灰色。 口縁下に、2条の小突帯を貼付し、指頭でつまむ。 外面ヨコナデ。	(B類)
Fig. 24-110	〃	〃	19.8 — — —	砂岩の小礫を多く含む。暗灰色。 口縁下に2条の小突帯を貼付し、指頭でつまむ。内・外面煤ける。	(B類)
Fig. 24-111	〃	〃	22.6 — 24.0 —	チャート・砂岩の小礫を多く含む。黒灰色。 口縁下、上胸部に小突帯を貼付し、指頭でつまみ出す。上胸部の突帯を境に調整が異なる。頸部外面ヨコナデ、胴部外面荒いナデ。 外面煤ける。	(B類)
Fig. 24-112	〃	〃	24.4 — — —	チャートの小礫を多く含む。淡灰茶色。 口径部面取り。上胸部に凹線状の沈線を3条配し、ドテを強くナデつぶす。 文様帯を境に調整が異なる。口頸部外面タテハケ、胴部外面擦痕状の荒いナデ。2次的な熱をうけて部分的に赤変する。	(B B類)
Fig. 24-113	〃	〃	18.0 — — —	砂岩・頁岩、チャートの小礫を含む。暗灰色。 口縁部外面に2条の小突帯を貼付し、つまみ出す。外面ヨコハケ、内面ナデ。	(B類)
Fig. 24-114	〃	〃	28.8 — — —	チャートの小礫を多く含む。淡灰黄色。 口径部面取り、上胸部に4条のヘラ描沈線。文様帯を境に口頸部と胴部の調整が異なる。頸部外面タテハケ後、1弯なナデ、胴部外面擦痕状の荒いナデ。頸部内面ヨコハケ調整。	(B B類)
Fig. 27-115	ユニット2	甕	16.2 — — —	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。灰茶色。 口縁丸くおさめる。ヘラによる多条沈線帯に、2条の扁平な粘土帯を貼付し、指頭でつまみ出し、刻目状を呈す。外面タテハケ、内面ヨコハケ。 外面は煤ける。	(B A類)
Fig. 27-116	〃	〃	12.2 — — —	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。淡茶色。 口縁端部に刻目。頸部外面にヘラ描沈線2条つつ測を置いて、扁平な粘土帯を沈線内にうめ込む。	(B B類)
Fig. 27-117	〃	〃	13.4 — — —	チャート・風化礫の粗粒を多く含む。 口縁内面に断面三角の突帯を貼付、その内側に、小孔を4個穿つ。	(B A類)
Fig. 27-118	〃	〃	6.0 — 28.8 —	チャートの小礫を多く含む。茶色。 無文；外面ハケ調整。胴部の2個所に黒炭あり。	(B B類)
Fig. 27-119	〃	〃	20.0 — — —	チャートの細・粗粒砂を多く含む。淡黄灰色。 口縁外面に粘土帯を貼付。口径上・下に刻目を施す。	(B A類)
Fig. 27-120	〃	〃	18.8 — — —	チャートの小礫を多く含む。淡茶色。 口縁外面に粘土帯を貼付。口径下端に刻目。口縁部内面に扁平な粘土帯を4条貼付し、ハケ状原体で刻む。小孔を穿らす。 外面わずかにタテハケを認む。	( 〃 )
Fig. 27-121	〃	〃	23.0 — — —	砂岩・チャートの小礫・粗粒砂を含む。茶灰色。 口径部上・下刻目。4個を単位とする小孔を穿つ。頸部外面ヘラ描沈線と扁平な粘土帯を施す。口縁部内外面ヨコ方向のナデ、頸部内面ヨコハケ+ヘラミガキ。	( 〃 )
Fig. 27-122	〃	〃	— — — —	チャートの小礫を多く含む。棕色。 口縁に断面三角の刻目突帯を貼付。頸部外面に3条のヘラ描沈線、その下に扁平な粘土帯を貼付し、指頭でつまみ刻目状を呈す。	(B類)
Fig. 27-123	〃	甕	27.4 — — —	チャートの小礫を多く含む。黄茶色。 頸部に6条のヘラ描沈線。外面タテハケの上を部分的にヨコナデ調整。	(B B類)
Fig. 27-124	〃	甕	17.2 — — —	チャート・風化砂岩の小礫を含む。黄白色。 口縁端を外方に強く屈曲させる。頸部外面5条のヘラ描沈線。頸部内面ヨコハケ、上胸部断面に明瞭な接合痕あり(外類)。接合部内面は、指頭圧痕が集中する。	(B類)

遺物観察表 (土器)

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 27-125	ユニット 2	甕	—	—	チャートの小礫を多く含む。灰白色。 口唇部は丸くおさめ、全面に刻目。わずかにヘラ描洗線を認める。 口縁部内面ヨコハケ+ヨコナデ、外面はヨコハケ+ナデ。	(I類)
Fig. 27-126	〃	〃	—	—	チャート、頁岩の小礫、粗粒砂を含む。茶色。 口唇丸く、刻目。ヘラ描洗線を2条まで確認。口縁部外面煤ける。	(〃)
Fig. 27-127	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 口唇を丸くおさめ、刻目。被熱赤変。	(〃)
Fig. 27-128	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 口唇部面取り、刻目+ヘラ描洗線。外面タテハケ、内面ヨコナデ。 外面煤ける。	(III A類)
Fig. 27-129	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。淡茶色。 口唇面取り、刻目+ヘラ描洗線。外面に2条のヘラ描洗線。タテハケ調整。	(III D類)
Fig. 27-130	〃	〃	—	—	チャートの小礫を含む。淡茶色。 口唇面取り、外面タテハケ。	(III A類)
Fig. 27-131	〃	〃	—	—	チャートの小礫を含む。淡茶色。 口唇面取り下端に刻目。ナデ調整。	(〃)
Fig. 27-132	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 上胴部にヘラによる多条沈線。外面タテハケ。	
Fig. 27-133	〃	〃	—	—	チャートの粗粒砂を多く含む。茶灰色。被熱により器表剝離。	
Fig. 27-134	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 上胴部に3条の微隆起帯を形成。(貼付によらず上・下から粘土を刮り集める) 頸部外面タテハケ、胴部外面擦痕。(砂粒が動いている) 胴部外面煤ける。	
Fig. 27-135	〃	〃	—	—	チャート、頁岩の小礫を含む。暗茶色。 上胴部に134と同じ隆帯を形成。外面タテハケ。外面煤ける。	
Fig. 27-136	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。淡茶色。 口唇部は丸くおさめ、口縁部部をつまむ。内面ヨコハケ、外面ナデか。	(III A類)
Fig. 27-137	〃	〃	23.2	—	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。茶灰色。 口唇部面取り、外面タテハケ、口縁部内・外面強いヨコナデ。	(〃)
Fig. 27-138	〃	〃	—	19.0	チャートの小礫を含む。淡茶色。 上胴部に2条の小突帯を貼付。頸部外面タテハケ、胴部外面ナデ。 胴部外面煤ける。	
Fig. 28-139	〃	〃	15.6	—	チャートの小礫を多く含む。暗褐色。 口唇は丸くおさめ、刻目。上胴部にヘラ描洗線2条。口縁部内外面ヨコハケ、胴部外面タテハケ。外面煤ける。	(I類)
Fig. 28-140	〃	〃	12.8	—	チャートの小礫を多く含む。暗褐色。 口唇は丸くおさめ。刻の有無不明。上胴部に4条のヘラ描洗線帯と刺突列点文1条、胴部最大径付近に6条のヘラ描洗線帯と刺突列点文。 外面煤け、激しく熱をうける。	(II類)
Fig. 28-141	〃	〃	18.0	—	チャートの小礫、長石の細粒砂を含む。暗茶色。 口縁部を強く外に折り返す。口唇は丸く全面に刻目。上胴部に5条のヘラ描洗線。外面ハケ調整。口縁部内面ヨコハケ。胴部内面は指頭によるナデ。外面は激しく煤ける。下半は被熱赤変している。	(I類)

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 28-142	ユニット2	甕	21.2 — 19.4 —	チャートの小礫を多く含む。黒茶色。 口唇はにぶい沈線。口縁外面1~2条のヘラ描沈線。上胸部に上・下から 押圧を加えて2条の沈線を描く。外面タテ方向のハケ、口縁内面横方向の ハケ調整。 外面は激しく燻ける。	(ⅢC類)
Fig. 28-143	〃	〃	21.0 — — —	チャートの砂粒を多く含む。茶黄色。 口唇は丸くおさめる。口縁部内・外面ヨコナデ、肩部外面タテハケ。	(ⅢA類)
Fig. 28-144	〃	〃	16.2 18.4 — —	チャートの小礫を多く含む。 逆し字口縁。口唇刻、上胸部に6条のヘラ描沈線。外面タテハケ。外面燻 ける。	外面文様帯 を除いて燻 ける。 (Ⅴ類)
Fig. 28-145	〃	〃	23.2 — 22.2 —	チャートの小礫を多く含む。長石粒含む。 口唇は丸く、全面に刻目。上胸部に10条のヘラ描沈線。その下に軸突支列 を配す。外面胸部中位までタテハケ。中位以下右下りのハケ。口縁部内外 面ヨコナデ、文様帯より下は激しく燻ける。	〃 (Ⅲ類)
Fig. 28-146	〃	〃	22.4 — 22.4 —	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 口唇面取り、下唇に刻目。上胸部に7条のヘラ描沈線。その下に軸突支列 を配す。上胸部タテハケ、胸部中位は右下りのハケ。口縁部内面ヨコ及び 右下りのハケ調整。	〃 (Ⅰ類)
Fig. 28-147	〃	〃	23.2 — — —	石英・長石の小礫、粗粒砂を含む。黄褐色。 逆し字口縁、断面台形の刻目突帯。外面指頭圧痕顕著、わずかにタテ方向 のハケ調整。外面激しく燻ける。下唇は被熱赤変。	輸入品 (Ⅴ類)
Fig. 28-148	〃	〃	20.0 — 21.2 —	チャートの小礫を多く含む。淡黄褐色。 口唇は丸く全面に刻目。口縁下に4条のヘラ描沈線。口縁部外面ヨコ方向 胸部外面右下りのハケ。	外面文様帯 を除いて燻 ける。 (Ⅰ類)
Fig. 28-149	〃	〃	— — — 7.2	チャートの小礫を多く含む。桃褐色。 調整不明。被熱赤変	
Fig. 28-150	〃	〃	— — — 7.2	チャートの小礫、長石粗粒砂を含む。 外面ハケ調整、内面燻け、外面被熱赤変。	
Fig. 29-151	〃	〃	— — 8.6	チャートの小礫を多く含む。黄茶色。 外面下→上への摺痕あり。上底状のうすい底部。外面燻ける。	
Fig. 29-152	〃	鉢	— — — 6.6	チャートの小礫を多く含む。黄灰色。 厚い底部。底部脇に指頭圧痕顕著。粘土接合部で割離。	
Fig. 29-153	〃	甕	— — — 6.6	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 外面燻ける。	
Fig. 29-154	〃	〃	— — — 7.0	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 内・外面燻け、一部赤変。	
Fig. 31-155	ユニット3	〃	— — — —	チャート、その他の粗粒砂を多く含む。外面淡桃色。内面灰色。 太いヘラ描沈線を10条まで認める。中央部に刻目を1条配す。 ハケ調整。外面燻け、一部赤変。	沈線のドテ で「寧」にナ テ取る。 輸入品か。
Fig. 31-156	〃	〃	— — — —	チャートの小礫を多く含む。外面黄白色。内面灰色。 上からヘラ描沈線、櫛櫛波状文、同籐状文、同波状文を配す。 外面燻ける。	
Fig. 31-157	〃	〃	— — — —	チャートの小礫を多く含む。外面黄褐色。内面灰茶色。 頭部外面櫛櫛直線文と指頭でつまみ出した扁平な突帯を2条まで認める。 2次のな火をうけて変色。	
Fig. 31-158	〃	〃	— — — —	チャートの小礫を多く含む。淡茶色。 頭部外面に、櫛櫛直線文と同波状文を交互に配す。原体は太く6条を1単 位とする。	

遺物観察表 (土器)

種別番号	出土地点	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 31-159	ユニット3	壺	24.0 — — —	チャートの小礫を含む。淡茶色。 口縁端部を強くおさえる。頸部にヘラ描沈線5条。外面タテハケ+ヘラミガキ。頸部内面ヨコハケ、口縁部内面ヘラミガキ。胴部断面に粘土接合痕を認める。	(Ⅱ類)
Fig. 31-160	〃	〃	15.8 — — —	チャートの小礫を多く含む。淡茶色。 口唇部に沈線+刻目。頸部外面に7条のヘラ描沈線。器表の剝離が激しい。	(Ⅱ)
Fig. 31-161	〃	甕	20.0 — — —	チャートの小礫を多く含む。灰茶色。 口唇部は面をなし、下端に刻目。頸部外面にヘラ描沈線を3条まで認める。外面煤ける。	(ⅢB類)
Fig. 31-162	〃	〃	14.4 — 16.2 —	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 逆十字口縁、口唇部を細く刻む。胴部に8条のヘラ描沈線を配す。外面タテハケ。外面煤ける。	(Ⅳ類)
Fig. 31-163	〃	〃	— — — —	チャートの小礫を多く含む。淡黄色。 外面に5条を1単位とするヘラ描沈線帯を2帯施す。外面煤ける。	
Fig. 31-164	〃	〃	— — — —	チャートの小礫を多く含む。淡棕色。 胴部に沈線帯を多量に配す。外面煤ける。	(ⅢB類)
Fig. 31-165	〃	壺	— — — 9.4	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 外面タテハケ、内面ナデ調整。外底は削りによって砂粒が激しく動いている。外面煤ける。	
Fig. 31-166	〃	甕	— — — —	チャートの小礫を多く含む。黄灰色。 外面ナデ調整、内・外面煤け、外面は一部赤変。	
Fig. 33-167	〃	壺	9.6 — — —	チャートの小礫を多く含む。暗褐色。 頸部に8条のヘラ描沈線と1条の扁平な刻目突帯。外面タテハケ、口縁内面ヨコハケ。外面煤ける。	(ⅣA類)
Fig. 33-168	〃	甕	17.0 — — —	チャートの砂粒を多く含む。灰色。 口縁部外面に2条の小突帯を貼付。	(ⅣB類)
Fig. 33-169	〃	壺	11.0 — — —	チャートの砂粒を多く含む。棕色。 口縁部内面に扁平な刻目突帯、口唇刻目。頸部外面に11条のヘラ描沈線。更に3条の間隔をおいて扁平な刻目突帯を貼付。	(ⅣA類)
Fig. 33-170	〃	〃	15.6 — — —	チャートの小レキを多く含む。桃白色。 頸部に8条のヘラ描沈線を配す。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	(Ⅱ類)
Fig. 33-171	〃	甕	— — — —	チャートの小レキを多く含む。棕色。 二次的な火を受ける。	(ⅢA類)
Fig. 33-172	〃	〃	— — — 7.0	チャートの小レキを多く含む。淡黄白色。 外面タテハケ、外面煤ける。	
Fig. 33-173	〃	〃	— — — —	チャートの小礫を多く含む。灰茶色。 口唇部面取り、外面ナデ、内面ヨコハケ。	(ⅢA類)
Fig. 33-174	〃	壺	8.5 15.7 11.3 5.8	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 最大径を胴部に有する。外面タテハケを基調とする。底部付近指頭母痕顕著。外面煤ける。	(Ⅱ類)
Fig. 35-175	ユニット5	〃	— — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。黄褐色。 口縁部外面に粘土帯を貼付し、指頭で押圧。口唇に刻目。外面ナデ調整。	

遺物観察表 (土器)

挿図番号	出土地点	器種	口径 法量 [cm]	器高 胴径 原径	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 35-176	ユニット5	壺	—	—	チャート風化礫の粗・細粒砂を含む、桃色。 口縁部外面に粘土帯を貼付。頸部外面木理の残い原体によるハケ調整。	
Fig. 35-177	〃	〃	—	—	チャートの粗粒砂を多く含む。淡茶色。断面三角形の突帯を貼付し、上・下から指頭で押圧。突帯の上下に櫛歯波状文を配す。外面はコを基調とするハケ調整。	
Fig. 35-178	〃	〃	24.0	—	チャートの小礫・粗粒砂を含む。 口縁部に粘土帯を貼付し、指頭で押圧。口縁部ヨコナデ。口縁内面ハケ原 体による連続圧痕。頸部下端に2条の櫛歯波状文を配す。 上胴部は同波状文を配す。外面タテハケ、口縁内面ヨコハケ調整。	
Fig. 35-179	〃	甕	12.2 — 13.5	—	チャートの細・粗粒砂を含む。外面淡茶色、内面灰色。 口縁部は強く外反。外面に粘土帯を貼付し、指頭で押圧。外面タテハケ 外面激しく熱を受けて変色。	
Fig. 35-180	〃	壺	22.4	—	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。灰白色。 口縁外面に粘土帯を貼付。外面タテハケ調整。器表の剥離が激しい。	
Fig. 35-181	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。外面黄桃色、内面灰色。 頸部下端に断面三角形の突帯を貼付。	
Fig. 35-182	〃	〃	26.0	—	チャートの粗粒砂を多く含む。灰白色。 強く外反する口縁部外面に粘土帯を貼付し、指頭で押圧。口縁強くヨコナ デ。外面タテハケ。	
Fig. 35-183	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。暗灰色。 外面タテ調整。	
Fig. 35-184	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。灰茶色。 上1/3底、外面タテ調整。外面煤ける。	
Fig. 35-185	〃	甕	—	—	チャートの小礫を多く含む。灰茶色 外面煤ける。	
Fig. 35-186	〃	壺	—	—	チャートの小礫を多く含む。 激しく熱を受け、変色。	
Fig. 35-187	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。	
Fig. 35-188	〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。外面淡褐色、内面灰色。 二次的に火をうけて赤く変色。	
Fig. 35-189	〃	〃	—	—	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。	
Fig. 36-190	1区包含層 V層	〃	—	—	チャートを主体とする細・粗粒砂。灰黄色。 断面三角形の突帯を貼付し、上・下から指頭で押圧する。上下に櫛歯波状 文を配す。	
Fig. 36-191	〃 IV層	〃	—	—	砂粒を殆ど含まない。灰黄色。 外面に櫛歯波状文その上に同扇形文、また同原体による山形文の一部が認 められる。	
Fig. 36-192	〃 V層	〃	—	—	チャート、砂岩の小礫を含む。黄桃色。 外面に櫛歯直線文、同波状文、同扇状文を配す。二次的に被熱赤色。	

遺物観察表 (土器)

図号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 36-193	1区包含層 V層	壺	—	—	砂粒をほとんど含まない。淡褐色。 外面襷輪直線文と同波状文。原体は太目。	
Fig. 36-194	〃 〃	〃	—	—	チャートの小礫を多く含む。灰茶色。 外面にヘラによる多条沈線帯を有し、中央部に山形文列を1帯配し、刺突を施す。 外面ヨコ及び右下りのハケ調整。外面は激しく煤ける。	
Fig. 36-195	〃 〃	壺	17.6 — — —	—	チャート、風化礫の小礫を含む。黄褐色。 口径を丸くおさめ、口縁部内・外面ヨコナデ。頸部外面タテハケ、内面ヨコハケ。	
Fig. 36-196	〃 〃	〃	7.2 — 14.2 —	—	チャート・砂岩の小礫を多く含む。淡灰褐色。 口唇面取り、頸部外面タテハケ、胴部外面ナデ。外面煤ける。	
Fig. 36-197	〃 〃	壺	13.2 — — —	—	チャートの小礫・粗粒砂を含む。灰白色。 口縁部外面に粘土帯を貼付、指頭で押し。頸部外面に6条までヘラ描沈線帯を認める。外面ハケ調整。	
Fig. 36-198	〃 〃	〃	16.0 — — —	—	チャートの小礫を多く含む。淡黄色。 頸部外面に4条までヘラ描沈線帯を認める。	(Ⅲ類)
Fig. 36-199	〃 〃	〃	23.4 — — —	—	チャート・砂岩の小礫を含む。淡黄褐色。 口縁部外面に粘土帯を貼付、口唇部ヨコナデ、上・下に刻目。 口頸部内面ハケ調整。外面の調整不明。	
Fig. 36-200	〃 〃	〃	8.2 22.0 15.5 5.6	—	チャートの小礫を多く含む。棕色。 頸部に襷輪直線文帯と扁平な刻目突帯を4条配す。 胴部中央に、上から襷輪波状文、同直線文帯、同波状文を施し、直線文帯中に扁平な刻目突帯文を4条配す。器表の割離が激しい。	
Fig. 36-201	〃 〃	〃	27.5 — — —	—	チャート・風化礫の小礫を多く含む。桃色。 口径に太い刻目。口縁内面に4条の扁平な刻目突帯を貼付。	
Fig. 36-202	〃 〃	〃	23.8 — — —	—	チャートの小礫を含む。灰白色。 口唇部ヨコナデ、下端に刻目。内面に2条の扁平な刻目突帯を貼付し、突帯間に小孔を並べる。外面ヘラによる多条沈線。沈線帯中に指頭でつまみ出した扁平な粘土帯を貼付。	
Fig. 36-203	〃 上層	〃	24.0 — — —	—	チャートの小礫・粗粒砂を含む。灰桃色。 口唇部ヨコナデ、上・下に刻。内面は貫通する小孔列を配しその内側に襷輪状文を1条施す。外面ハケ調整。	
Fig. 36-204	〃 V層	紡錘車	径 4.2 厚さ 0.7 孔径 0.9 重量 7.8g	—	チャート、他の粗粒砂を含む。外面桃褐色、内面暗灰色。 土器転用。	
Fig. 36-205	〃 IV層	土製円板	径 3.8 厚さ 0.8 重量 12.6g	—	チャートの粗粒砂を多く含む。明茶色。 土器転用。	
Fig. 39-217	〃 III層	甕	— — — —	—	チャートの小礫を多く含む。灰褐色。 逆し字山縁。口縁に断面三角の刻目突帯、上腹部にヘラによる多条沈線帯。外面煤ける。	(V類)
Fig. 39-218	〃 〃	壺	— — — —	—	チャートの小礫・粗粒砂を含む。外面灰茶色、内面灰色。 ヘラによる多条沈線帯。断面三角の刻目突帯を2条まで認める。刻目原体は半截竹管状の原体。	
Fig. 39-219	〃 〃	〃	— — — —	—	チャートの小礫を含む。淡茶色。 ヘラによる多条沈線帯を配し、沈線帯の間に半截竹管による山形文を施す。	
Fig. 39-220	〃 〃	甕	— — — —	—	チャートの小礫を多く含む。灰白色。 上腹部に小突帯、頸部外面反線による多条の垂下沈線と弧文を施す。 外面は激しく煤ける。	

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	口徑 器高 胴径 底径 法量 (cm)	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 39-221	1区包含層 Ⅳ層	壺	17.4 — — —	チャート・砂岩の小礫を多く含む。灰白色。 口縁内面に2条の断面三角突帯を貼付。外面タテハケ調整。内面ヨコナデ。	(ⅢA類)
Fig. 39-222	〃 〃	〃	16.0 — — —	チャートの小礫粗粒砂を含む。茶色。 口唇ヨコナデ、下端にハケ原体による太い刻目。口縁内面に粘土帯を貼付。頭部外面へらによる多条沈線、扁平な刻目突帯を2条まで認める。	(〃)
Fig. 39-223	〃 〃	甕	13.0 — 12.4 —	チャートの小礫を含む。黄茶色。 口唇は丸くおさめ刻目。上胴部に4条、胴部中位に5条のヘラ描沈線帯を配し、それぞれ下端にハケ状原体で刺突列点文を巡らす。	(Ⅱ類)
Fig. 39-224	〃 〃	〃	16.0 — — —	チャート・長石の粗粒砂を多く含む。黄茶色。 口唇部ヨコナデ、内外面ヨコナデ。外面煤ける。	(ⅢA類)
Fig. 39-225	〃	点	17.0 — — —	チャートの小礫を含む。明茶色。 口唇は丸くおさめ、頭部外面にへらによる多条沈線帯を有す。外面タテハケの上をヨコナデ調整。二次的な火を受け変色。一部海綿状を呈す。	(ⅢB類)
Fig. 39-226	〃 〃	甕	22.2 — — —	砂岩、チャートの小礫を含む。茶色。 口唇は丸くおさめ、刻目。口縁部内外面ヨコナデ。上胴部にへらによる多条沈線。外面煤ける。	(Ⅰ類)
Fig. 39-227	〃 〃	〃	28.8 — — —	チャート、風化礫の粗粒砂、雲母を含む。 口唇ヨコナデ、口縁部外面に小突帯を貼付。頭部外面タテハケ。外面煤ける。	(ⅢE類)
Fig. 39-228	〃 〃	鉢	20.0 — — —	チャートの小礫を多く含む。灰茶色。 口縁部内外面ヨコナデ。外面タテハケ、外面激しく煤ける。	(Ⅳ類)
Fig. 39-229	〃 〃	甕	26.0 — — —	チャートの小礫を含む。黄茶色。 逆し字口縁。口縁に断面三角の刻目突帯を貼付。外面タテハケ調整。外面激しく煤ける。	(Ⅴ類)
Fig. 39-230	〃 Ⅴ層	壺	— — 24.0 —	砂岩、チャートの小礫を多く含む。灰茶色。 胴部最大径付近に14条のヘラ描沈線、外面はハケ+ヘラミガキ、内面は右より及びヨコ方向のハケ。上胴部に指頭圧痕顯著。	
Fig. 42-237	2区包含層 Ⅴ層	〃	— — — —	チャートの細粒砂を含む。灰茶色。 へらによる多条沈線、胴部最大径付近に断面台形の突帯を貼付。 上・下に扁平な刻目突帯。刻は指頭による押圧。	
Fig. 42-238	〃 〃	〃	— — — —	チャートの小礫、粗粒砂を含む。茶灰色。 4条を単位とするヘラ描沈線を2帯、その間に双線による波状文を配す。 二次的な火をうけ変色。	
Fig. 42-239	〃 〃	〃	— — — —	チャートの細・粗粒砂を含む。外面淡褐色、内面灰色。 双線による沈線帯の末端を弧状にくくり、流水文風を呈す。 二次的な火を受けて変色。	
Fig. 42-240	〃 〃	甕	— — — —	チャート、風化礫の粗粒砂。外面褐色、内面灰褐色。 頭部外面双線による多条の垂下沈線を配す。	
Fig. 42-241	〃 〃	壺	— — — —	チャートの小礫を多く含む。灰白色。 上から円形浮文、ヘラ描沈線6条、双線による山形文、ヘラ描沈線帯。	
Fig. 42-242	〃 〃	〃	— — — —	チャートの粗粒砂を多く含む。茶灰色。 ヘラ描沈線帯の中に2条の扁平な刻目突帯、更に日月状の浮文を貼付し、上下に小孔を穿つ。	
Fig. 42-243	〃 〃	甕	— — — —	チャートの小礫を多く含む。外面茶色、内面灰色。 多条のヘラ描沈線、下端に刺突列点文。右下りのハケ調整。	

遺物観察表（土器）

図号	出土地点	器種	口径 法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 42-244	2区包含層 V層	壺	— — —	— — —	チャート、砂岩の小礫を多く含む。茶色。 頭部外面多条沈線帯の中に扁平な刻目突起帯を埋め込むように貼付、3条まで認め、刻目には布目状の痕跡が見られる。外面タテハケ	
Fig. 42-245	〃 〃	〃	— — —	10.6 — —	チャートの小礫を含む。灰黄褐色。 口縁部面取り頭部にヘリ描沈線2条と扁平な刻目突起帯を1条まで認める。	
Fig. 42-246	〃 〃	〃	— — —	— — —	チャート・頁岩の小礫を多く含む。淡黄色。 上腹部に6条のヘリ描沈線、下部に刺突列点文。二次的な火を受け変色。	
Fig. 42-247	〃 〃	〃	— — —	16.0 — —	チャート・砂岩・風化礫の小礫を多く含む。棕色。 口縁内面に2条の小突起帯を貼付、1号の小孔を穿つ。頭部外面多条のヘリ描沈線帯。器表の荒れが激しい。	
Fig. 42-248	〃 〃	〃	— — —	18.0 — —	チャートの小礫を含む。淡茶色。 口縁部内面に粘土帯を貼付、口縁は丸くおさめ刻目。口縁部内外面ヨコナデ、外面タテハケ。	(III A類)
Fig. 42-249	〃 〃	〃	— — —	29.0 — —	チャートの細粒粗砂を多く含む。明茶色。 口縁部ヨコナデ下に刻目。内外面器表の荒れが激しい。	
Fig. 42-250	〃 〃	〃	— — —	16.4 — —	チャートの砂粒を多く含む。淡茶灰色。 口径の形状不明。頭部にヘリによる多条沈線と扁平な刻目突起帯を3条まで認め。	
Fig. 42-251	〃 〃	〃	— — —	17.6 — —	チャート、砂岩の小礫を多く含む。暗灰白色。 口縁部ヨコナデ、下部に太い細目。頸部腹面に3条のヘリ描沈線、頭部外面右下りのハケ、口縁部内面ヨコハケ、頭部内面右下りのハケヨコナデ。	(III A類)
Fig. 42-252	〃 〃	〃	— — —	18.8 — —	チャートの小礫を多く含む。棕色。 口縁部ヨコナデ、上下に刻目。口縁内面は扁平な粘土帯を埋め込むように2条貼付し、更にハケ状原体で突起帯を隠らす。また突起帯間に小孔を穿らす。頭部外面は、多条沈線を描し、沈線内に扁平な粘土帯を埋め込むように貼付。突起帯には爪状の列点文を穿らす。	
Fig. 42-253	〃 〃	〃	— — —	— — —	チャート、風化礫の小礫、粗粒砂を多く含む。外面淡茶色、内面灰色。 頸部腹面に刻目突起帯、その下に彫描波状文を認む。	
Fig. 42-254	〃 〃	〃	— — —	— — 28.4	チャートの小礫を多く含む。棕色。 6条のヘリ描沈線文の上に反線による波状文、下部に反線による山形文	
Fig. 42-255	〃 〃	紡錘車	径 5.4 厚さ 0.7 孔径 0.5 重量 23g	— — —	砂岩・その他の小礫、粗粒砂を含む。淡褐色。 土器転用。	
Fig. 43-256	〃 〃	壺	— — —	— — 5.8	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 外面タテハケ、底部付直指頭印痕顕著、わずかに上底。	
Fig. 43-257	〃 〃	〃	— — —	— — 12.0	チャート、砂岩の小礫を多く含む。灰白色。	
Fig. 43-258	〃 〃	〃	— — —	— — —	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄灰色。 ヘリによる多条沈線帯に3条明瞭で扁平な刻目突起帯を貼付。外面タテハケ調整。内面指印痕顕著。	
Fig. 43-259	〃 〃	〃	— — —	— — 12.2	チャート、砂岩の小礫を多く含む。外面黄灰色。内面灰色。 外面タテハケ調整。器表の剥離が激しい。	
Fig. 44-260	〃 〃	壺	— — —	— — —	チャートの小礫を多く含む。淡茶灰色。 逆十字口縁。断面三角形の刻目突起帯。上腹部にヘリ描沈線	

遺物観察表 (土器)

挿入番号	出土地点	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 44-261	2区包含層 V/W	甕	— — — —	チャートの小礫を含む。褐色。 通し字口縁。断面：角形の突帯を貼付。無刻。	鉢の可能性あり
Fig. 44-262	〃 〃	〃	— — — —	チャートの小礫。粗粒砂を多く含む。茶灰色。 口縁部を強く折り曲げ、刻目を施す。	口類
Fig. 44-263	〃 〃	〃	— — — —	チャートの小礫を含む。褐色。 通し字口縁。断面：角形の突帯を貼付。無刻。	鉢の可能性あり
Fig. 44-264	〃 〃	〃	18.8 — — —	砂岩。チャートの小礫を多く含む。灰色。 口縁外面に小突帯を貼付。	
Fig. 44-265	〃 〃	〃	— — — —	砂岩の小礫を多く含む。灰黒色。 頸部境に3条の小突帯を貼付。	
Fig. 44-266	〃 〃	〃	15.2 — 14.0 —	チャートの小礫を多く含む。淡茶色。 口唇面取り。口頸部内外面ナデ。胴部外面タテハケ調整。外面煤ける。	
Fig. 44-267	〃 〃	〃	24.0 — — —	チャートの小礫を多く含む。灰茶色。 口唇部面取り。下半に刻目。口縁部内外面ヨコナデ。外面タテハケ調整。 上部部にヘラ描洗線。	
Fig. 44-268	〃 〃	〃	24.0 — — —	チャートの小礫を含む。灰茶色。 口唇面取り。口縁外面に小突帯を貼付。内外面ヨコナデ。	
Fig. 44-269	〃 〃	〃	23.4 — — —	チャートの小礫。粗粒砂を多く含む。褐色。 口唇部面取り。器面調整不明。	
Fig. 44-270	〃 〃	甕	24.6 — — —	チャートの小礫・粗粒砂を含む。茶灰色。 口縁外面に断面カマボコ状の楕上帯を貼付。外面激しく煤ける。 外面タテハケ調整。	鉢の可能性もある。 (口類)
Fig. 44-271	〃 〃	〃	— 22.2 — —	チャートの小礫を多く含む。灰茶色。 頸・胴境に小突帯を3条貼付し、上・下から爪で押える。 頸部外面タテハケ。胴部外面上→下、下→上の擦痕あり。外面煤ける。	
Fig. 44-272	〃 〃	〃	18.0 — — 17.2	チャートの砂粒を多く含む。灰茶色。 口唇は丸くおさめ、刻目を施す。口縁内外面ヨコナデ。胴部外面タテハケ。 外面は煤け、一部変色。	口類
Fig. 44-273	〃 〃	〃	22.0 — — —	チャートの小礫を多く含む。灰白色。 外面タテハケ調整。口縁内面ヨコハケ調整。	皿A類
Fig. 44-274	〃 〃	〃	33.8 — 32.0 —	チャートの小礫。粗粒砂を多く含む。茶灰色。 口唇部面取り。外面はヘラ状原体で荒いヨコナデ。口頸部内面ヨコ。右下りのハケ調整。胴部内面ヨコハケ調整。	(口類)
Fig. 44-275	〃 〃	〃	— — — 6.6	チャート砂岩の小礫を多く含む。淡褐色。 外面ハケ調整。わずかに土灰。	
Fig. 45-276	〃 〃	甕	— — — —	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 ヘラによる多条洗線帯中に、3条の刻目突帯を貼付。刻目原体は半截竹筒状をなす。	
Fig. 45-277	〃 最下層	甕	— — — —	チャートの小礫。粗粒砂を含む。灰色。 ヘラ描洗線の下に刺突列点文を配す。外面ハケ調整。外面煤ける。	

遺物観察表 (土器)

挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考 (分類)
Fig. 45-278	2区包含層 Ⅲ層	壺	— — —	— — —	チャート、砂岩の風化小礫を多く含む。黄白色。 口縁部内面に粘土帯を貼付。外面ハケ調整。	(ⅢA類)
Fig. 45-279	〃 最下層	〃	— — —	14.7 — —	チャートの小礫を多く含む。黄白色。 口縁内面に突起を貼付。口縁部内外面ヨコナデ。外面タテハケ調整。	( 〃 )
Fig. 45-280	〃 〃	〃	— — —	11.4 — —	砂岩、チャートの小礫を多く含む。黄白色。 頸部に4本のヘラ溝沈線。口縁部内外面ヨコナデ。頸胴部外面タテハケ。	( 〃 )
Fig. 45-281	〃 Ⅲ層	蓋	— — —	20.2 — —	チャート、砂岩の小礫を含む。灰褐色。 口縁部が反り気味。口唇は刻目。外面タテハケ。内面ヨコハケ。	
Fig. 45-282	〃 最下層	壺	— — —	— — —	チャートの小礫を多く含む。茶灰色。 頸部に双条のヘラ溝沈線。頸・口縁に太い突起を貼付。D形の太い刻目を 配し、刻目には布目の圧痕がつく。外面ハケ調整。内面ヨコハケ調整。	
Fig. 45-283	〃 Ⅲ層	〃	— — —	— — 9.4	チャート、砂岩の小礫粗粒砂を含む。 外面タテハケ。内面ナデ。	
Fig. 45-284	〃 〃	甕	— — —	— — 9.6	チャートの小礫を多く含む。灰茶色。 外面タテハケ調整。全面煤け。一部変色。	

遺物観察表（石器）

挿図番号	出土地点	器種	長軸 短軸 厚さ 法量 (cm) 重さ(g)	石 材	特 徴	備 考
Fig. 14-20	SD1	叩石	— — 4.1 (102)	砂 岩	自然礫を利用。 大部分が欠損。縁部に使用痕あり。	
Fig. 14-21	◇	石包丁	— 3.9 0.8 (23.1)	千枚岩	直線刃、片刃、背部は湾曲。 粗孔は敲打によらない向面穿孔。孔径8mm、孔間8mm。研磨 の擦痕が見られる。	
Fig. 20-87	SD3 下層	叩石	9.5 7.1 2.5 210	砂 岩	自然礫をそのまま利用。 一方の長側縁に使用痕	
Fig. 37-206	I区包含層 上層 (V層)	石包丁	— — 0.7 (34.5)	頁 岩	外湾刃、片刃、大部分が欠損。 粗孔の一部が認められる。敲打によらない向面穿孔。 礫所に研磨の擦痕。	
Fig. 37-207	◇ (V層)	刃器	6.5 5.0 1.3 47.9	砂 岩	剥片を利用。 打点の反対側の縁部を刃部として利用。	
Fig. 37-208	◇ ◇	叩石	9.5 (7.1) 5.1 480	◇	自然礫をそのまま利用。3分の1が欠損。 縁部と向上面中央部に使用痕あり。	
Fig. 37-209	◇ ◇	磨石	7.5 6.5 2.5 200	◇		
Fig. 37-210	◇ V層	叩石	7.0 (6.1) 2.0 (105.7)	◇	自然礫を打割し、縁部全面に使用痕。	
Fig. 38-211	◇ ◇	刃器	— 4.0 0.8 12.8	サヌカイト	外湾状の刃部を有す。断面三角形。 片面から押し剥離によって刃部をつくる。	
Fig. 38-212	◇ ◇	ノミ状 片刃石斧	4.6 1.2 0.8 8.4	白色の堆積 岩(泥岩か)	刃部の縁は明瞭でない。基部は湾曲気味。 断面長方形	
Fig. 38-213	◇ ◇	刃器	4.3 3.5 0.7 11.9	砂 岩	剥片を利用。	
Fig. 38-214	◇ IV層	◇	5.6 3.8 1.6 30.8	◇	◇	
Fig. 38-215	◇ III層	磨石	3.2 — 2.6 37.2	◇		
Fig. 38-216	◇ IV層	◇	4.0 3.1 1.9 34.8	◇		
Fig. 40-231	◇ III層	叩石	11.6 9.8 3.8 690	◇	自然礫をそのまま利用。 向上面、縁部全面に使用痕。	
Fig. 40-232	◇ ◇	磨石	4.8 3.0 2.4 49.1	◇		
Fig. 40-233	◇ ◇	不明	11.0 3.9 3.8 478.0	◇	一方の上面に著しい剥離痕が見られる。 被熱変色、煤け。	

遺物観察表（石器）

採回番号	出土地点	器種	法量 (cm) 長さ 重量	石材	特徴	備考
Fig. 40-234	1区包含層 Ⅲ層	刃器	8.0 3.3 0.9 24.5	サスカイト	断面三角、石鎌状の形をなし、刃部はわずかに内湾。両面から押圧剥離。	
Fig. 40-235	〃 〃	不明	8.4 6.2 1.3 81.7	砂岩	両上面が剥離面。 被熱変色。	
Fig. 40-236	〃 〃	〃	9.2 8.0 3.0 270	〃		
Fig. 46-285	2区包含層 Ⅲ層	叩石	8.2 — 2.7 70	〃	自然礫を利用。半分が欠損。 両上面と縁部の一部に使用痕。	
Fig. 46-286	〃 〃	〃	9.0 6.6 2.5 210	〃	自然礫を利用。 長側縁の一部に鈍い打痕。	

# 圖 版



PL 1



1区調査前全景（西から）

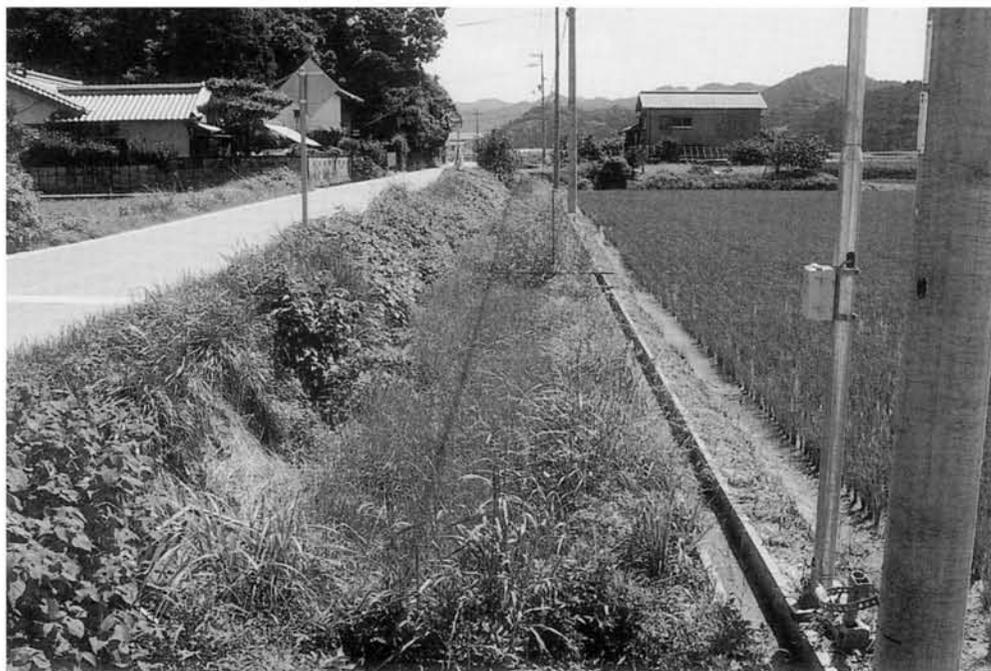


1区調査前全景（東から）

## PL 2



2区調査前全景（東から）



2区調査前全景（西から）



1区南壁セクション (SD 2付近)



1区南壁セクション (17付近)

PL 4



1区南壁セクション (5～6付近)



2区南壁セクション



1区完掘状況（西から）



1区完掘状況（東から）

PL 6



SK 1 検出状況



SK 1 完掘状況

PL 7



SD 1 (北から)



SD 2 (東北側から)

PL 8



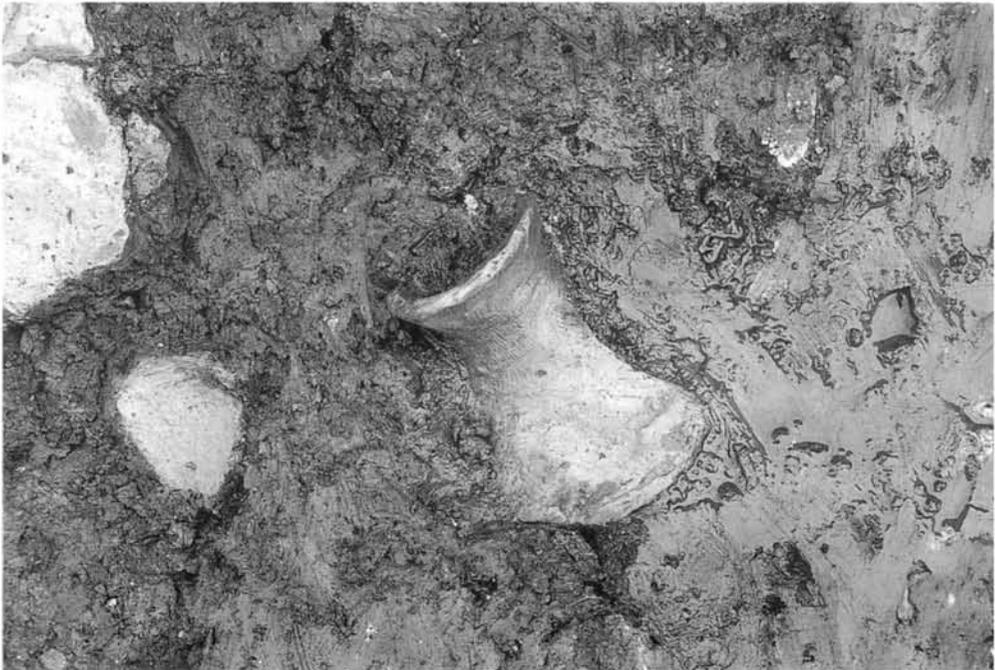
ユニット1 検出状況（北から）



ユニット1 壺 (97) 出土状況

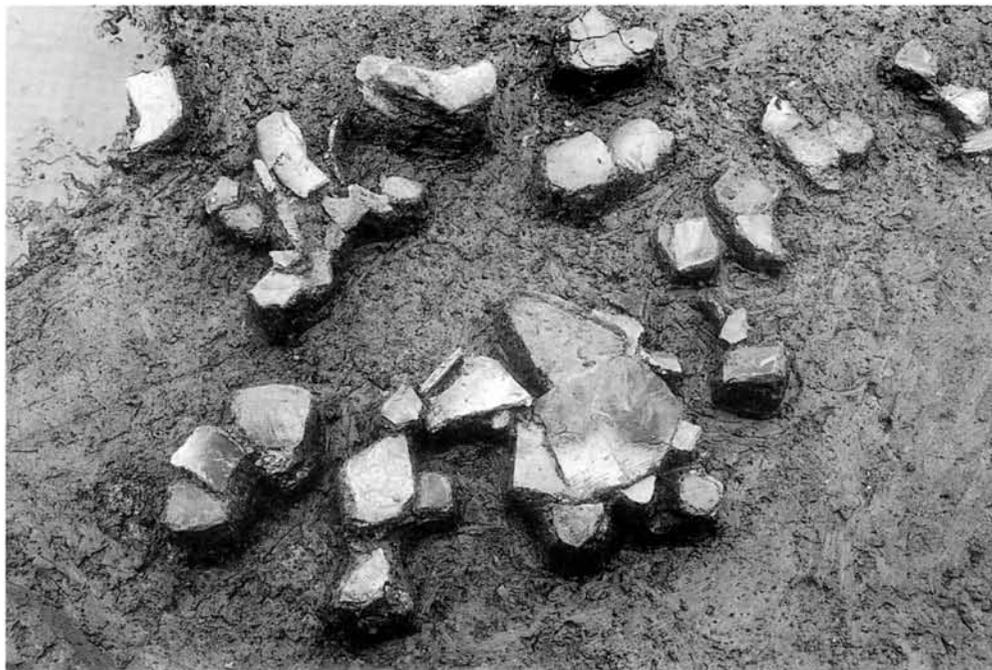


SX 1 遺物出土状況（北から）



壺（118，ユニット2）出土状況

PL 10



ユニット2 遺物出土状況



ユニット3 遺物出土状況



SD 2 下層遺物出土状況（北から）



ユニット3 遺物出土状況（壺159）

PL 12



1区南壁セクション及び遺物出土状況（V層中の壺198）



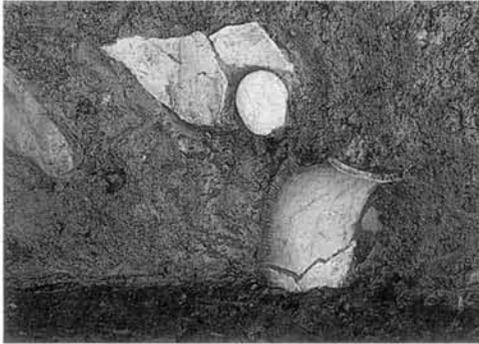
1区南壁セクション及び遺物出土状況（V層中の壺198）



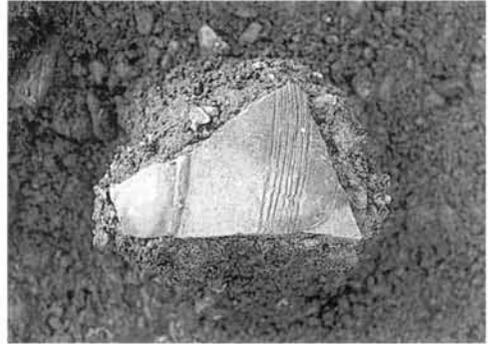
178 (ユニット 5)



160 (ユニット 3)



178 (ユニット 5)



19 (SD 1)



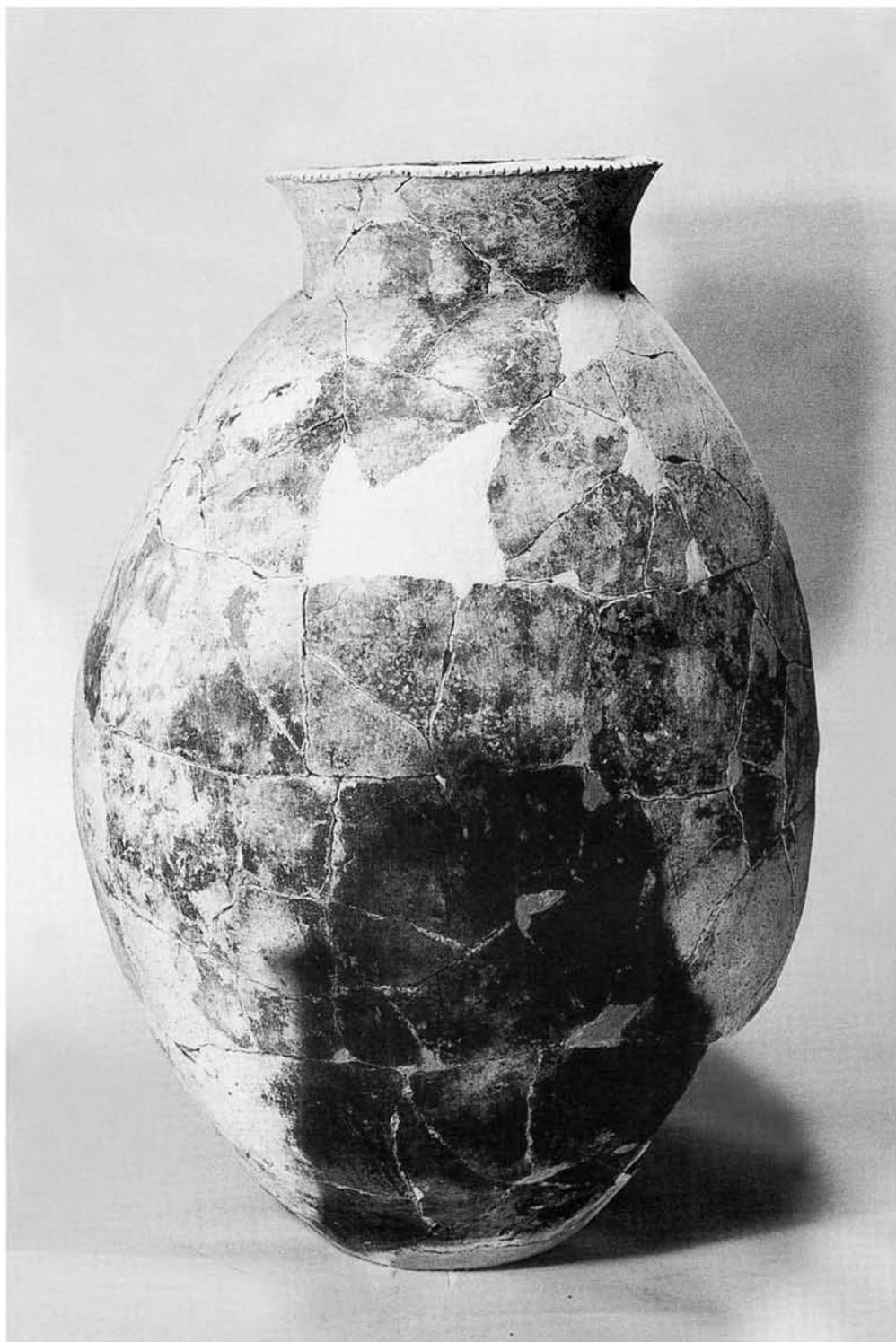
68 (SD 3)



165 (ユニット 3)

遺物出土状況

PL 14



SD3出土土器 壺



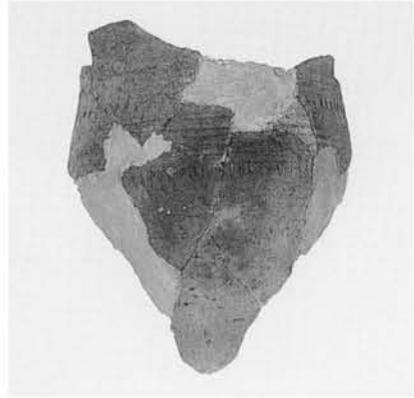
53



74



108



140



144



145

SD 3 (53・74)・ユニット1 (108)・同2 (140・144・145) 出土土器

PL 16



147



148



174



178



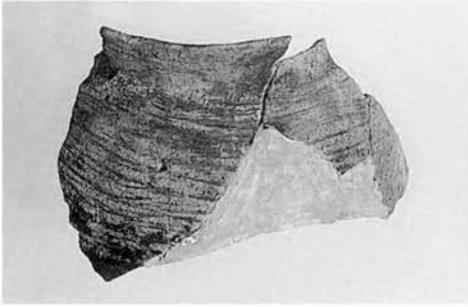
200



217

ユニット2 (147・148)・ユニット3 (174)・ユニット5 (178)・

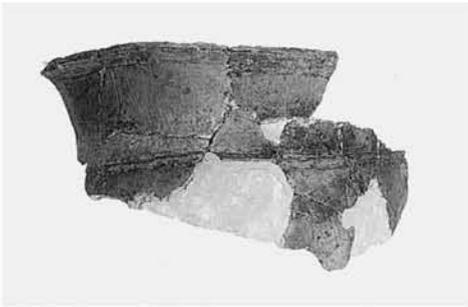
1区V層 (200)・1区VII層 (217) 出土土器



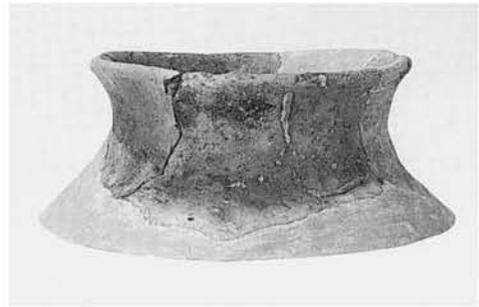
26



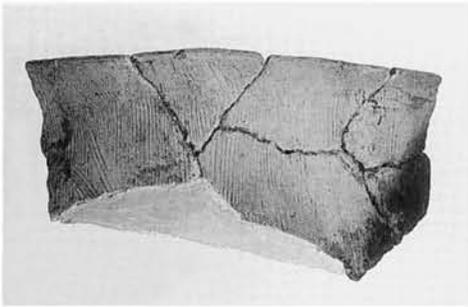
52



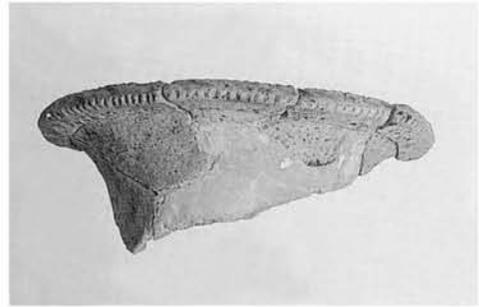
142



97



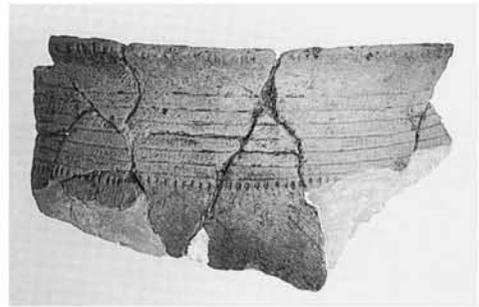
137



120



259



146

SD 2 (26)・SD 3 (52)・ユニット1 (97)・ユニット2 (120・137・142・146)・2区V層出土土器

# PL 18



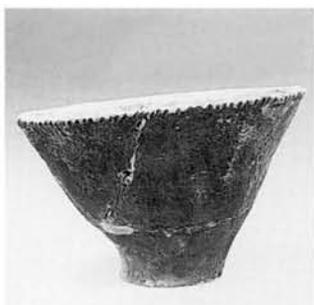
24



71



75



78



112



118



124



141



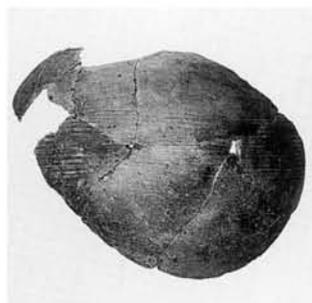
159



160

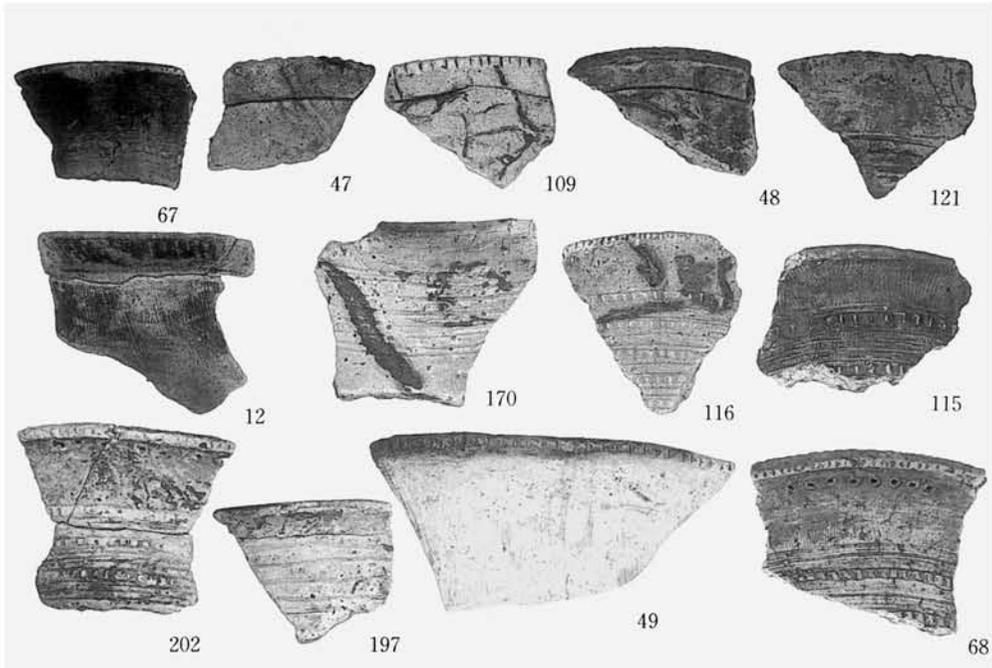


179

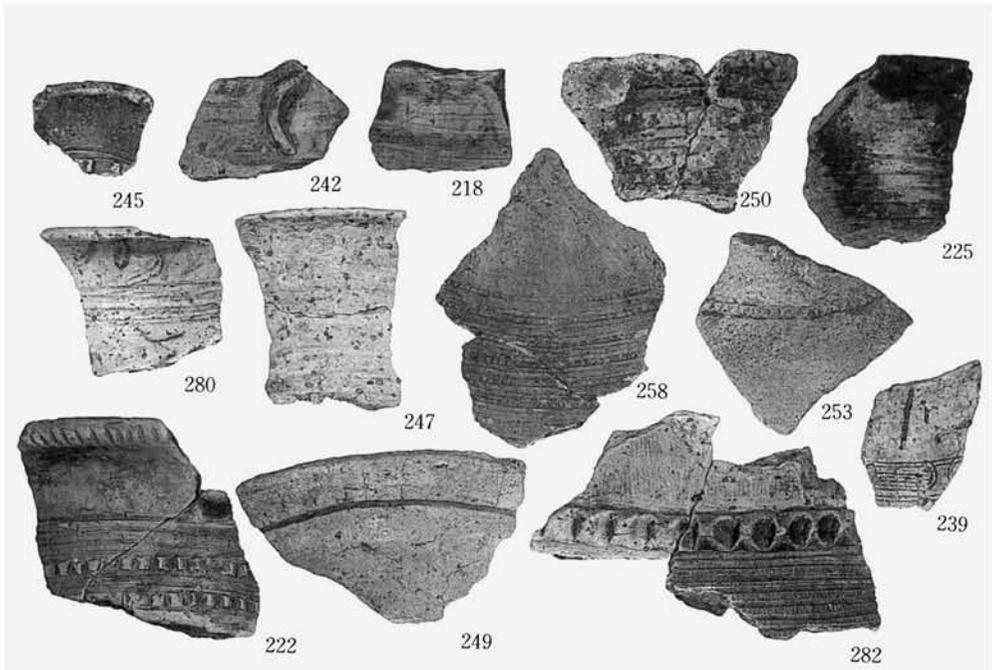


230

SD 2 (24)・SD 3 (71・75・78)・ユニット1 (112)・ユニット2 (118・124・141)・  
 ユニット3 (159・160)・ユニット5 (178)・1区X層 (230) 出土土器

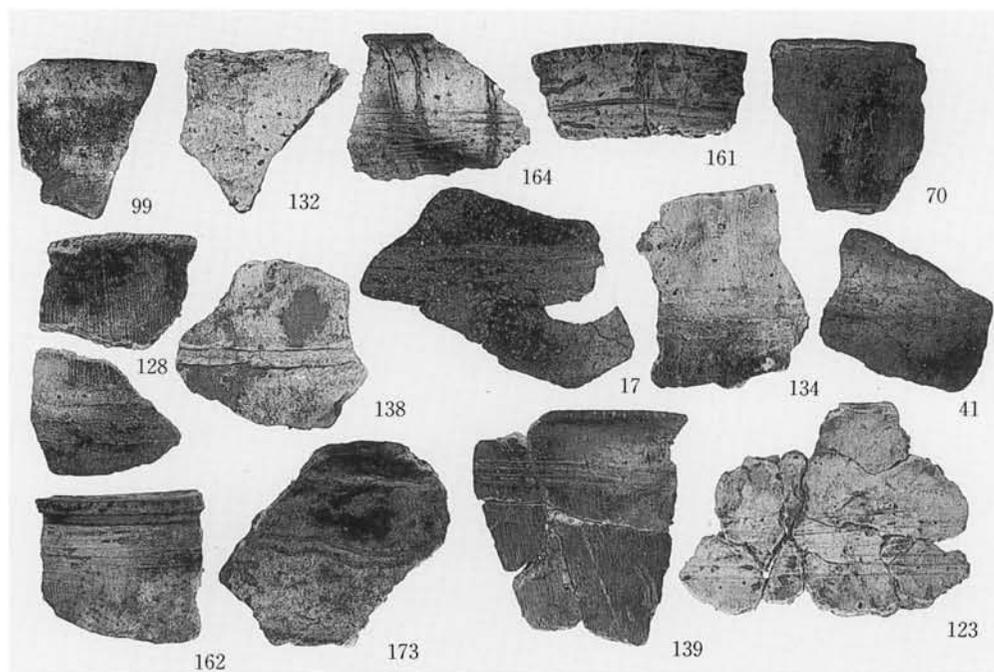


SD 3 (47~49・67・68)・ユニット1 (109)・ユニット2 (115・116・121)・ユニット3 (170)・  
SX 1 (12)・1区V層 (197・202) 出土土器

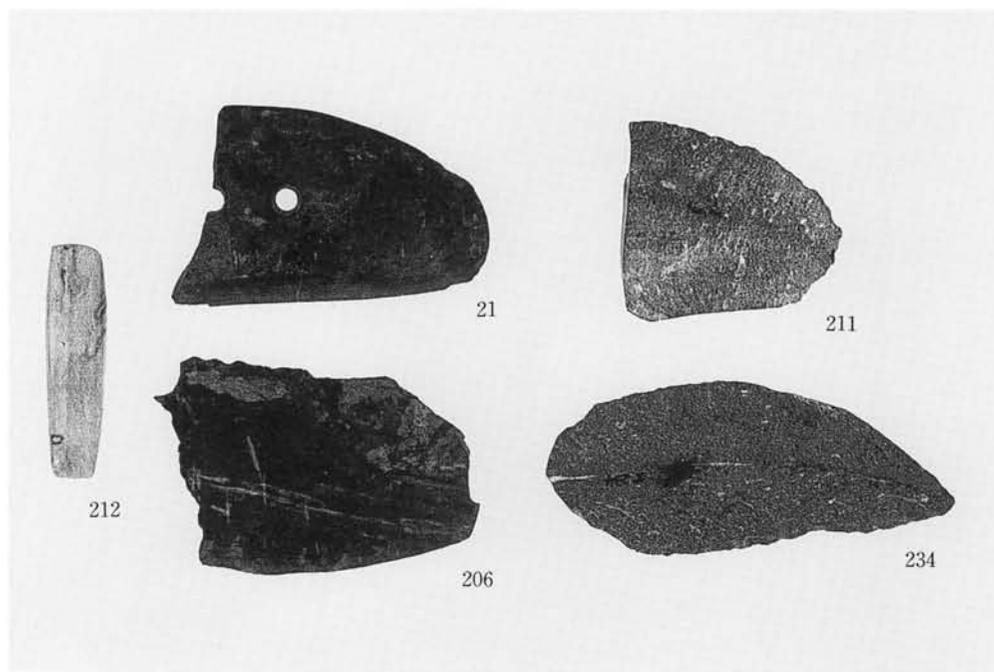


1区VII層 (218・222・225)・2区V層 (239・242・245・247・249・250・253・258)・  
2区最下層 (280・281) 出土土器

# PL 20



SD 1 (17)・SD 3 (41・70)・ユニット1 (99)・ユニット2 (123・128・132・134・138・139)・  
 ユニット3 (161・162・164・173) 出土土器



石包丁 (21・206)・刃器 (211・234)・ノミ状片刃石斧 (212)

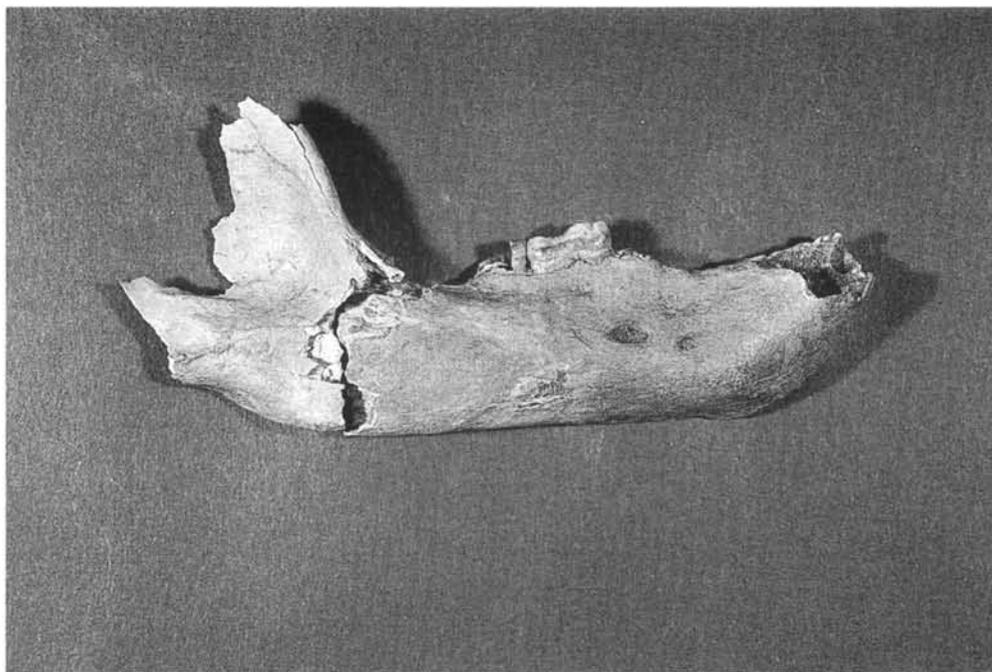


SD 3 出土着柄鋤先 (91)

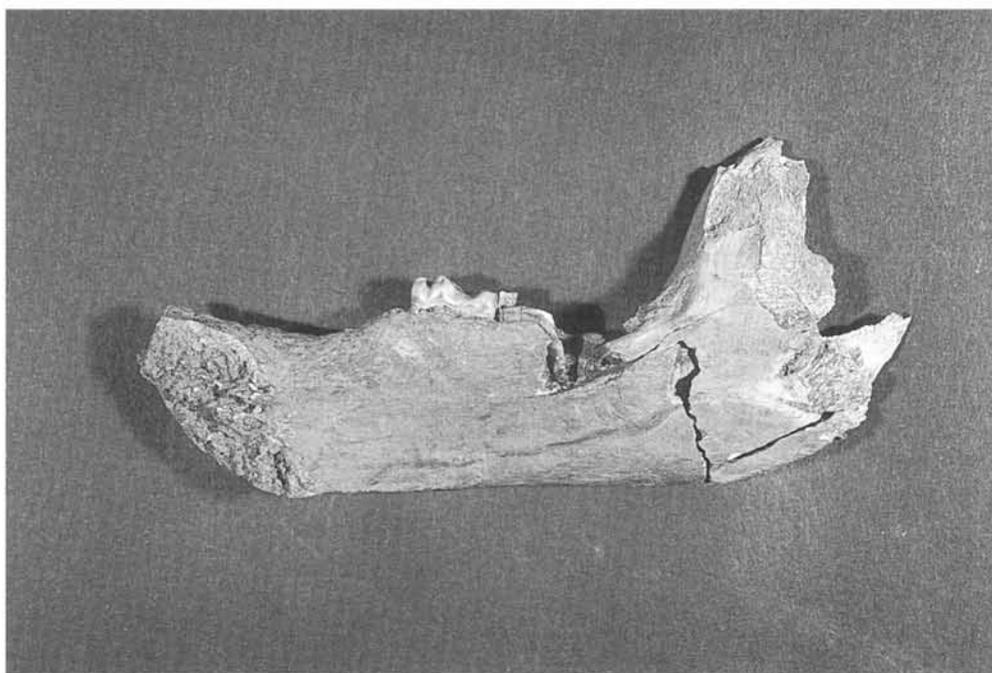


同上 裏面

PL 22



SD 3 出土のツキノワグマ顎骨



同 上

## 下分遠崎遺跡

(高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第16集)

1994年3月

編集 (財) 高知県文化財団  
埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

電話 (0888)64-0671

印刷 西村 謄写堂